

京都府遺跡調査概報

第 16 冊

1. 木津川河床遺跡
2. 奥山田池遺跡
3. 京滋バイパス関係遺跡
4. 燈籠寺遺跡第2次
5. 平安京跡右京一条三坊

1985

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく4年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることの普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和59年度は、39件の調査を実施しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは調査終了され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅してはいはざありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は、遺跡の重要性を理解していただくために、またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものがあります。昭和59年度は、第13冊、第14冊、第15冊、第16冊の4冊にまとめることにしましたが、この第16冊には平安京跡ほか4件を収録しました。調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに炎暑の下、極寒の中で熱心に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

昭和60年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 木津川河床遺跡 2. 奥山田池遺跡 3. 京滋バイパス関係遺跡
4. 燈籠寺遺跡第2次 5. 平安京跡右京一条三坊九町

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地・調査期間・経費負担及び概要の執筆は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 木津川河床遺跡	京都府八幡市八幡一丁目 ・針ノ木内ほか	昭59. 6. 1 } 昭59. 10. 22	京都府土木建築部	松井 忠春 黒坪 一樹
2. 奥山田池遺跡	京都府綴喜郡田辺町三山 木奥山田	昭59. 12. 4 } 昭60. 3. 30	日本道路公団大阪 建設局	長谷川 達 増田 孝彦
3. 京滋バイパス関 係遺跡	京都府宇治市菟道集上り	昭59. 6. 18 } 昭59. 3. 30	日本道路公団大阪 建設局	小池 寛 荒川 史
4. 燈籠寺遺跡第 2次	京都府相楽郡木津町内田 山	昭59. 8. 1 } 昭59. 10. 30	京都府教育委員会	松井 忠春 小山 雅人 戸原 和人
5. 平安京右京一条 三坊九町	京都市北区大將軍坂田町	昭59. 7. 19 } 昭59. 10. 11	京都府教育委員会	山口 博

3. 本冊の編集には、調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. 木津川河床遺跡昭和59年度発掘調査概要	1
2. 奥山田池遺跡昭和59年度発掘調査概要	17
3. 京滋バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要	27
4. 燈籠寺遺跡第2次調査概要	43
5. 平安京跡右京一条三坊九町昭和59年度発掘調査概要	61

挿図・付表目次

木津川河床遺跡

第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	調査地遠景（男山山頂から）	2
第 3 図	発掘区（トレンチ）配置図	3
第 4 図	土層断面柱状図①	4
第 5 図	土層断面柱状図②（D・Eトレンチ西壁中央）	5
第 6 図	Cトレンチ内遺構平面図	6
第 7 図	Bトレンチ内遺構平面図	7
第 8 図	Aトレンチ遺構検出状況（南から）	8
第 9 図	Cトレンチ内遺構平面図（下層）	8
第 10 図	掘立柱建物跡（SB01）平面図	9
第 11 図	Cトレンチ内土壇（SK01）・Bトレンチ内溝（SD39）	10
第 12 図	Cトレンチ内出土遺物実測図	12
第 13 図	立会調査地点位置図	15

奥山田池遺跡

第 14 図	京奈バイパス路線遺跡分布図	18
付表 1	京奈バイパス関係遺跡一覧表	19
第 15 図	調査地地形図・トレンチ配置図	21
第 16 図	出土遺物実測図(1)	24
第 17 図	出土遺物実測図(2)	25

京滋バイパス関係遺跡

第 18 図	調査地位置図および周辺遺跡分布図	27
第 19 図	トレンチ配置図	28
第 20 図	第 2・3 トレンチ平面概略	29
第 21 図	2号墳石室実測図	31
第 22 図	3号墳石室実測図	33
第 23 図	出土遺物実測図(1)	36
第 24 図	出土遺物実測図(2)	38
第 25 図	出土遺物実測図(3)	39

燈籠寺遺跡第2次

第 26 図	調査地位置図	43
第 27 図	トレンチ配置図	44
第 28 図	A トレンチ平面実測図	45
第 29 図	A トレンチ土層図	46
第 30 図	B トレンチ平面実測図	46
第 31 図	SD11 平面実測図及び土層断面図	48
第 32 図	埴輪出土状況 (SD11 北半)	49
第 33 図	埴輪出土状況 (SD11 南辺)	50
第 34 図	円筒埴輪実測図	52
第 35 図	家形埴輪実測図	54
第 36 図	奈良時代遺物実測図(1)	55
第 37 図	奈良時代遺物実測図(2)	56
第 38 図	SG01 出土木製品実測図	57
第 39 図	磨製石庖丁実測図	58

平安京跡右京一条三坊九町

第 40 図	調査地位置図	61
第 41 図	調査地平面図	62
第 42 図	SD0603・SB0604実測図	63
第 43 図	SD0605・SD0606平面図	64
第 44 図	SD0605・SD0606土層図	64
第 45 図	SK0607実測図	64
第 46 図	出土遺物実測図(1)	67
第 47 図	出土遺物実測図(2)	68
第 48 図	出土遺物実測図(3)	69
第 49 図	出土遺物実測図(4)	70
付 表 2	出土土器観察表	73

図 版 目 次

木津川河床遺跡

- 図版第1 (1)Cトレンチ遺構検出状況 上層(北から)
(2)Cトレンチ溝状遺構(南から)
- 図版第2 (1)Cトレンチ遺溝検出状況 下層(南から) (2)Cトレンチ溝(北から)
- 図版第3 (1)土壇 SK01(北から) (2)掘立柱建物跡 SB01(南から)
- 図版第4 (1)Bトレンチ遺構検出状況(東から) (2)Bトレンチ溝状遺構(北から)
- 図版第5 (1)Dトレンチ全景(東から) (2)Eトレンチ全景(東から)
- 図版第6 出土遺物
- 図版第7 (1)工事掘削状況(No. 3 地点) (2)最終底面観察状況(No. 3 地点)
(3)堤外水路地区(No. 4 地点)掘削風景
(4)土層断面観察状況(No. 4 地点北壁中央部)

奥山田池遺跡

- 図版第8 (1)平坦地調査前全景(北から) (2)平坦地トレンチ全景(北西から)
- 図版第9 (1)南東端調査前全景(北西から) (2)山林部分トレンチ全景(北西から)
- 図版第10 (1)7トレンチ全景(南東から) (2)7トレンチ・9トレンチ全景(南東から)
- 図版第11 (1)尾根頂部平面トレンチ全景
(2)7トレンチ拡張部遺物出土状況(北西から)

京滋バイパス関係遺跡

- 図版第12 (1)3号墳石室全景(南から) (2)3号墳遺物出土状況(東から)
- 図版第13 (1)2号墳石室全景(南西から) (2)2号墳遺物出土状況(北西から)
- 図版第14 (1)中世土壇墓群完掘状況(南から) (2)土壇11・青磁碗出土状況

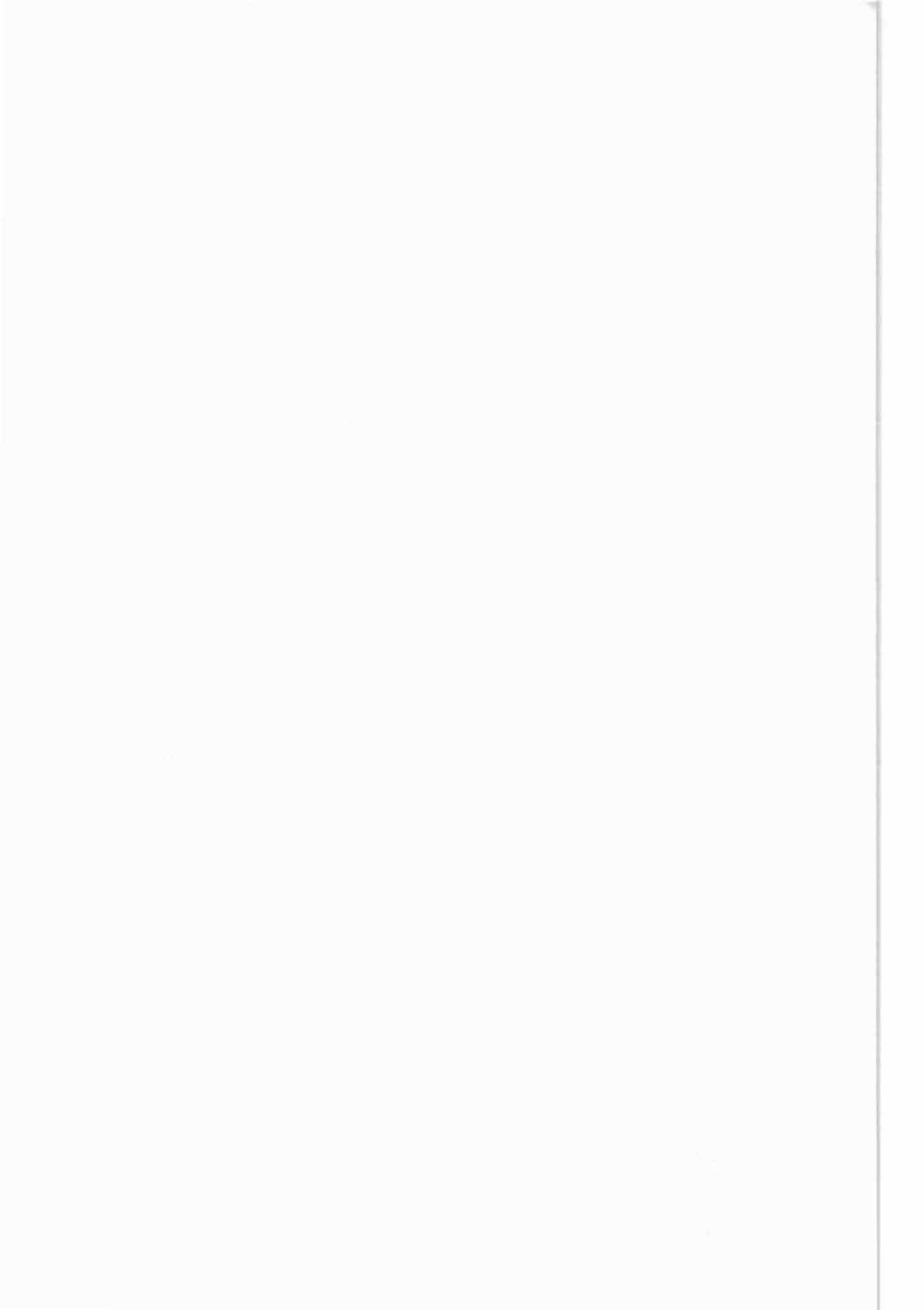
燈籠寺遺跡第2次

- 図版第15 (1)Aトレンチ全景(北から) (2)Bトレンチ全景(南から)
- 図版第16 (1)Aトレンチ遺構検出状況(西から)
(2)溝 SD11 上層検出遺構(南から)
- 図版第17 (1)溝 SD11 上層検出状況(北から) (2)上層遺物検出状況(北から)
- 図版第18 (1)上層遺物出土状況(西から) (2)上層遺物出土状況(東から)
- 図版第19 (1)溝 SD11 下層検出状況(南から)
(2)溝 SD11 下層検出状況(北から)

- 図版第20 (1)下層遺物出土状況(西から) (2)同上(北から)
- 図版第21 (1)溝 SD11 完掘状況(南から) (2)溝 SD11 完掘状況(北から)
- 図版第22 (1)池状遺構 SG01 検出状況(南から) (2)SG01 下駄出土状況(北から)
- 図版第23 (1)円筒埴輪 (2)円筒埴輪細部(線刻文様)
- 図版第24 家形埴輪
- 図版第25 (1)家形埴輪(正面) (2)同(側面)
- 図版第26 SD11 上層出土遺物
- 図版第27 SD11 上層出土遺物

平安京跡右京一条三坊九町

- 図版第28 (1)第1トレンチ全景(南から) (2)第2トレンチ全景(東から)
- 図版第29 (1)第3トレンチ全景(西から) (2)第7トレンチ全景(西から)
- 図版第30 (1)SD0605・0606 全景(東から) (2)SD0605 遺物出土状況(西から)
- 図版第31 出土遺物(1)
- 図版第32 出土遺物(2)



1. 木津川河床遺跡昭和59年度発掘調査概要

1. はじめに

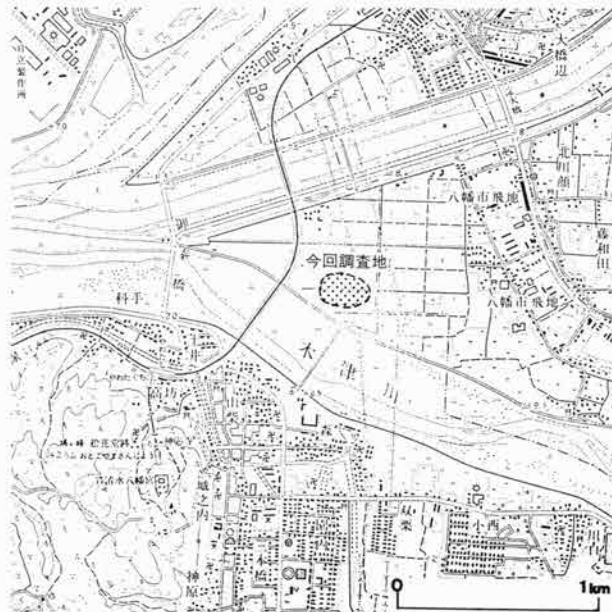
木津川・宇治川・桂川の三大河川は、当遺跡の西方約1kmのところ(八幡市橋本)で合流する。この合流点付近は、昔から葦原の卓越する低湿地的景観がひらけている^(注1)。こうした自然条件の中、魚類・水生動物とともに鳥類が多く生息し、この地はこれらの保護地域として貴重な価値をもっている。考古学的資料の存在も数多い。御幸橋付近の木津川河原に足を運べば、土師質皿を初めとする多種多様な遺物の散布に驚かされる。

より標高の高いところはどうであろうか。ちょうど三河川の合流点を挟んで、天王山(大山崎町)と対峙する石清水八幡宮(男山)を筆頭に、多くの古墳・集落跡・寺院を擁する男山丘陵が南にのびている。この男山山頂部から北東方向に目をやると、現在の木津川・宇治川の堤防と、木津川の旧河道を偲ばせる「川顔」～「藤和田」～「生津」の街並みで画された三角地帯を一望できる。木津川河床遺跡内の発掘調査地は、主にこの三角地帯に入っている(第1・2図)。

昭和57年度から京都府流域下水道事務所の依頼を受け、継続して発掘調査を実施してきた。昭和57年度は、弥生時代後期から中・近世にかけての遺物が出土した。しかしながら、遺構の存在は確認できなかった。^(注2)

続く昭和58年度調査では、古墳時代前期の土器溜りと同後期の集落跡、さらに中世の溝状遺構を検出している。^(注3)そして本年度の調査では、主に鎌倉時代以降の資料を得た。^(注4)

調査地の所在地は、京都府八幡市八幡小字一丁目・同字焼木に当り、木津川流域下水道浄化センターの施設として、汚泥濃縮槽・連絡管廊・渠管その他が建設・施工される地



第1図 調査地位置図

点である。

発掘面積は約620 m²である。

調査期間は、昭和59年6月1日から昭和59年10月22日までで、当調査研究センター調査課の松井忠春・黒坪一樹の両名が現地調査を担当した。期間中は多くの学生諸氏の協力を得た。また、調査後の整理作業についても、多くの方



第2図 調査地遠景(男山山頂から)

々から御助力を頂いた。^(注5)なお、文責は各節の末尾に記した。

(黒坪一樹)

2. 調査経過

昨年度の調査結果から、当遺跡については現地地表下約1.5~1.8 mに遺構面が存するものと予想された。したがって、バック・フォーにより旧水田地の耕作土・床土を剥ぎ、さらに下層の粘質土については遺物の出土状況を慎重に観察しながら、人力で水平に少しずつ掘り下げていくことにした。発掘区はA~Eトレンチまで設け、まずCトレンチから始めた(第3図)。A・B両トレンチについては、Cトレンチでの遺構の存在状況がある程度判明した時点で掘削を開始した。なお、発掘区の地区割りは、国土座標の軸に合わせて5 m方眼に区切った。

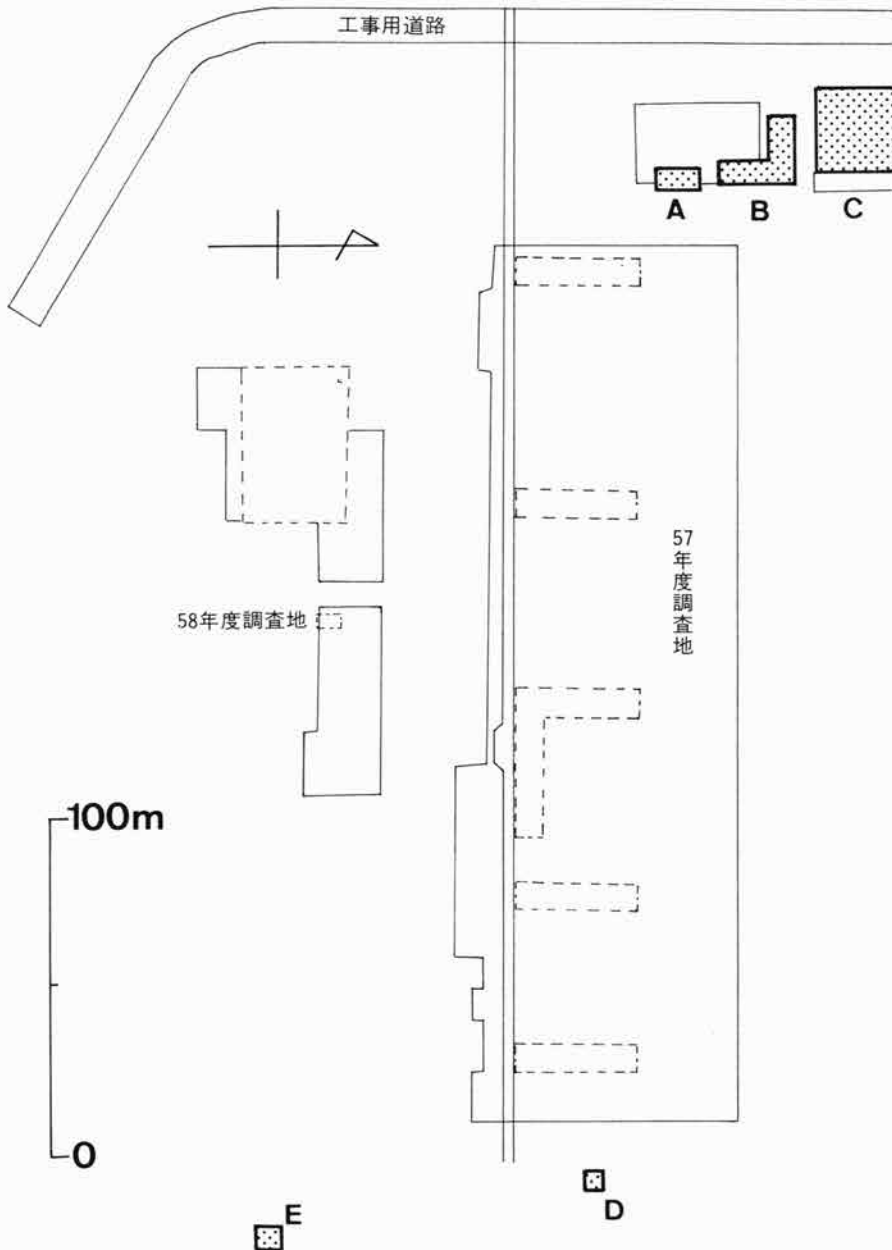
Cトレンチでは約1.5 m掘り下げたところで、暗青灰色粘質土の面に南北に走る幾筋もの溝状遺構の存在が明らかとなった。この溝状遺構はトレンチ全体に広がっており、当然トレンチ外に続くものと思われた。A・Bトレンチを同レベルまで慎重に掘り下げて、遺構・遺物の確認につとめた。溝状遺構やその他の諸遺構も両トレンチから検出した。さらに、Cトレンチでは下層から、掘立柱建物跡および溝状遺構を検出している。最終的に地区割り線に沿う断ち割り溝(幅1 m)を縦横に計7本入れ、土砂堆積状況を追求した。

D・Eトレンチでは、地表下2.3~2.7 mまで掘り下げたが、暗灰褐色系の粘質土の厚い堆積を観察したに止まり、明確な遺構は検出していない。土層断面の写真撮影・実測を行い、調査を終了した。

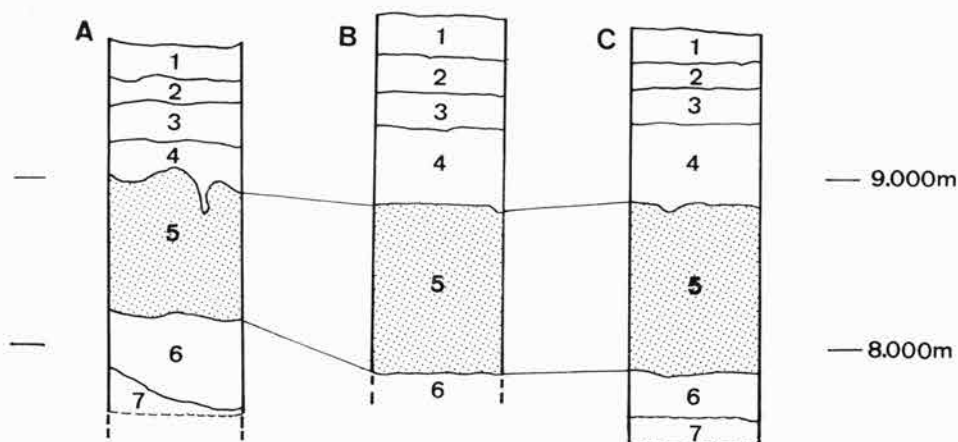
沖積地、とりわけ本遺跡に代表されるような低湿地における遺跡の発掘調査では、まず深く掘り下げることにより、時期のわかる層を検出していく事に意を注ぐべきであろう。

しかしながら、深く掘れば掘るほど、湧水や地崩れなどの作業上の支障も増大する。こ

のことが遺構の検出を困難にしていると言える。今回は、D・Eトレンチを除き湧水の被害は免れたにもかかわらず、全体が粘質土の地盤であるため、特に梅雨期にはトレンチ全体が水につかってしまうことも度々であった。雨天に苦しめられたが、10月23日にすべての作業を終了した。
 (黒坪一樹)



第3図 発掘区(トレンチ)配置図



第4図 土層断面柱状図①

A) Aトレンチ北壁中央, B) Bトレンチ西壁中央, C) Cトレンチ北壁中央

1. 黒褐色有機質土(旧水田耕作土) 2. 暗灰褐色粘質土(旧水田床土) 3. 暗青灰褐色粘質土
4. 青灰褐色粘質土(赤褐色斑含む) 5. 暗青灰色粘土 6. 暗青灰色極細砂
7. 黄褐色砂粒

3. 層位

発掘区の層位についてみると、まずA～Cトレンチの層位はほぼ同一である(第4図)。

今回の遺構面は第5層中に存在し、さらにこの第5層はAからCトレンチに向うにつれて、わずかながら低く傾斜しているのがわかる。

Aトレンチの北壁を例にとると、第4図に示したように第1～7層の7つに分けて説明することができる。

第1層は、淡い黒褐色の有機質土層(旧水田耕作土)である。やや粘質性があり、厚さは20～25cmを測る。第2層は暗灰褐色粘質土で水田床土である。厚さは約20cmである。ここで留意すべきは、下位に木津川の洪水堆積物である灰白色の極めて細かい砂が、4～5cmの厚さで断続的に堆積していることである。第3層は暗青灰褐色の粘質土層で、20～25cmの厚さで堆積している。第4層は、青灰褐色粘質土層である。黄色味を帯びた赤褐色の植物遺存体と鉄分が斑らに混在し、これらは下位ほど多く含まれている。厚さは15～25cmである。

この第4層は、中・近世の土師質皿・陶磁器片などの多くの遺物を多く包含する層ではあるが、遺構面は確認されていない。

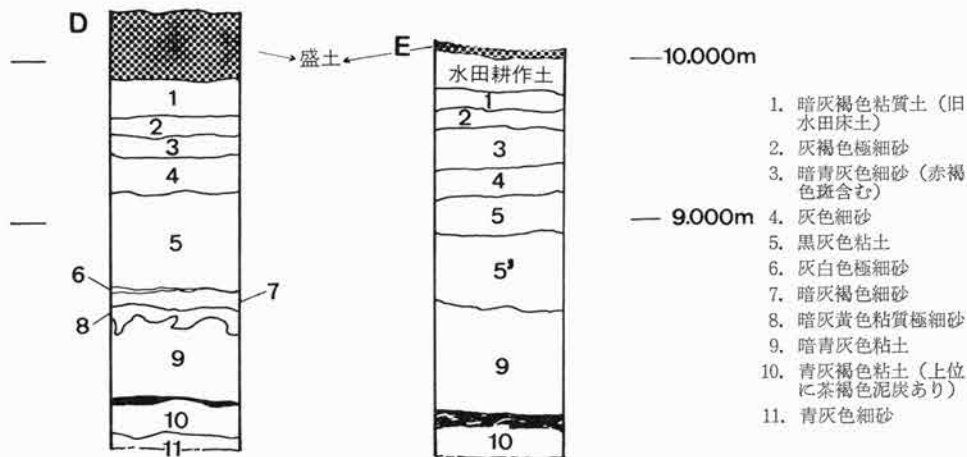
第5層は、暗青灰色粘土層である。古墳時代から中世にかけての遺構面を有する。およそ0.8mと厚く堆積しており、遺構面は下半部から検出される。断面観察により遺構面を肉眼で識別することは容易ではなく、むしろ土器などの遺物が比較的安定して出土する一定のレベルに注意しなければならない。第6層は暗青灰色極細砂層である。第5層と同色ながら、完全な細砂質となっている。厚さは約30cmを測る。遺物はまったく出土しない。

第7層は黄褐色砂粒層である。チャート粒を主成分にしている。中には0.5~1 cmくらいの細礫も疎らに含まれる。筋状になった鉄分の沈殿が部分的に観察され、赤褐色を呈する。

この第7層は、Cトレンチでの作業の最終段階で、深掘り溝を遺構面(標高約7.8 m)からさらに1 m前後入れたが、依然下位に続いていることが確認された。発掘調査地付近の工事着工地点の観察からも、第7層は3 m以上の厚さであることがわかっている。

Dトレンチの層位は西壁を例にとると、第5図に示す様に12層に分けて説明することができる。最上層は瓦礫・碎石などで構成される工所用盛土である。第1層は黒っぽい暗灰褐色粘質土で、旧水田床土である。厚さは約20 cm。第2層は灰褐色の極細砂層で洪水堆積物である。赤褐色の鉄分の沈殿が部分的に観察される。この層は若干削平されて上層の床土と混在している。したがって、純粋の第2層は10~13 cmの厚さしか残存していないが、本来はもう少し厚く堆積していたものとする。

第3層は暗青灰色細砂層で、やや粘性を帯びる。赤褐色の植物遺存体を斑らに含む。厚さは約15 cmである。第4層は灰色細砂層である。第3層と同様に鉄分を含んだ赤褐色斑が認められるが、量的に少ない。厚さは約20 cmを測る。第5層は黒灰色粘土層である。この層の下位にも洪水堆積物と思われる白灰色極細砂が、2.5~3 cm程の厚さで断続的に認められる。この第5層全体の厚さは約60 cmである。第6層は灰白色極細砂層である。全体にやや黄色味を帯び、12~15 cm程の厚さを測る。第7層は暗灰褐色細砂層である。粘性を帯び約10 cmの厚さである。第8層は第6層に類似し、暗灰黄色粘質極細砂層で約10 cmの厚さである。第9層は暗青灰色粘土層である。厚さは45~50 cmを測る。第10層は青灰褐色粘土層で、上層部はチョコレート色の粘土(泥炭)が斑らに混在している。厚さは約25 cmである。第11層は、青灰色細砂層である。下方にいくにつれて次第に粒子が粗



第5図 土層断面柱状図② (D・Eトレンチ西壁中央)

くなる。第5図で示した底面から約30cm掘り下げると黄褐色砂粒層になる。

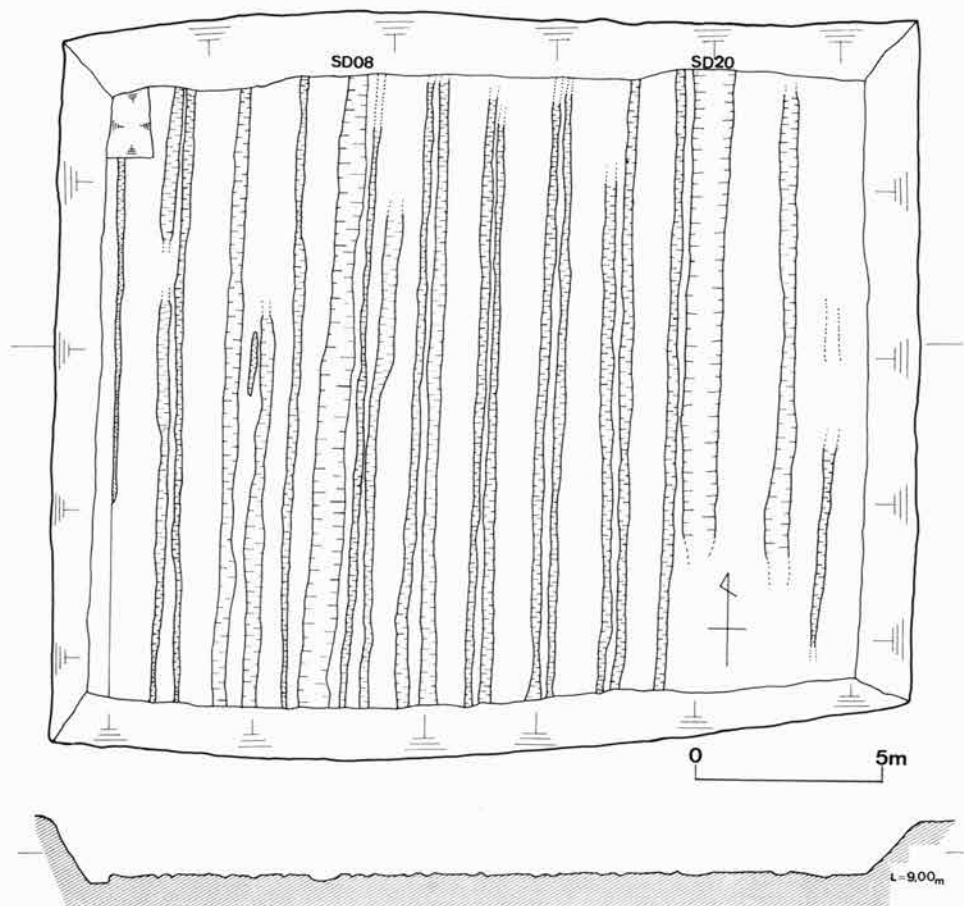
Eトレンチの層位は、南壁を例にとると第5図に示したとおりである。Dトレンチと同様に、暗褐色系の粘質土が厚く堆積している。工事中道路とした盛土の下層は、もとの水田の耕作土である。Dトレンチの第6・7・8の各層はここでは認められないが、他の層序は同様と言える。10層上位には、Dトレンチと同様にチョコレート色の泥炭層が存在する。
(黒坪一樹・飛田浩一)

4. 遺構

今回の調査では、多数の溝状遺構・掘立柱建物跡1棟・土坎2基などを検出した。

多数の溝状遺構を上層(室町時代)、掘立柱建物跡・土坎・溝を下層(古墳時代・鎌倉時代)の遺構として理解し、順に説明していきたい。

Cトレンチの溝状遺構は、長さ約16m、幅25cm～1.4m、残存する深さ約10cmを測る。



第6図 Cトレンチ内遺構平面図(溝番号は東から順に1～22とする)

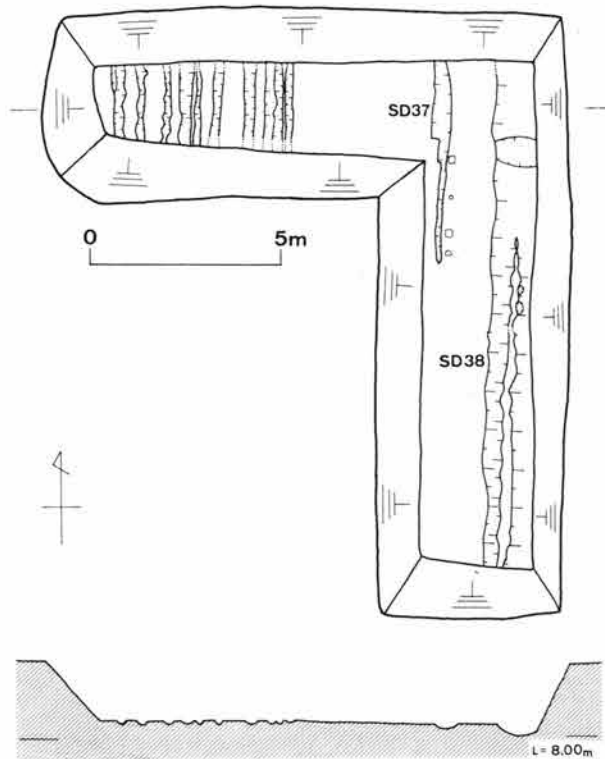
これらの断面形は丸く緩やかなラインを描き、南北方向に平行して走る(第6図)。これらは畑作のために設けられた畝間の溝(凹み)と考えられる。埋土は暗灰色粘土である。ここで畝部に当る溝間の幅の平均値を、発掘区中間部の残存状況の良好な箇所を抽出して算出するとおよそ1mとなり、畝幅としてはやや広いもの^(注6)と言える。溝内からは、土師質皿・羽釜形土器・須恵器・瓦器塊・瓦質土器などの破片が出土する。

A・Bトレンチの上層からも同様に、南北に走る溝状遺構が検出されている。Aトレンチでは発掘区北部に、長さ約2m、幅約20cm、深さ約5cmの平均規模で2条確認できた(第8図)。Bトレンチでは南西部において、長さ約2m、幅約20cm、深さ約25cm平均のものを合計11条検出している(第7図)。最も東側で検出された1条(SD37)は、その東側の掘形に沿って杭状のピットが4つ並んでいる。暗茶褐色粘土の埋土をもち、平面形は隅丸四辺形に近い。1辺は約15~20cm、深さは5~8cmと小規模なものである。瓦器塊細片が底面から出土している。

さらに、Bトレンチ東壁直下における長さ約15m、幅約1m、深さ約25cmの排水溝(SD38)がある。この溝はトレンチ中間地点で2条に分岐する(第7図)。遺物としては、土馬小片を出土する。

下層遺構の説明に入ろう。まずCトレンチでは南北に走る溝(SD23~26)がある(第9図)。

SD 23は長さ約13m、幅約40~80cm、深さ約10~25cmである。これは集落内の区画及び排水機能を備えた溝である。断面の形状は緩やかな弧を描く。また埋土は暗青灰色粘土である。この溝を境にして、西側は暗灰褐色の粘質土の面が広がり、東側はSD 24付近まで暗黄灰色細砂層が続く。後述する掘立柱建物跡(SB01)は、西側の粘質土面に建てられていた。一方、東側



第7図 Bトレンチ内遺構平面図

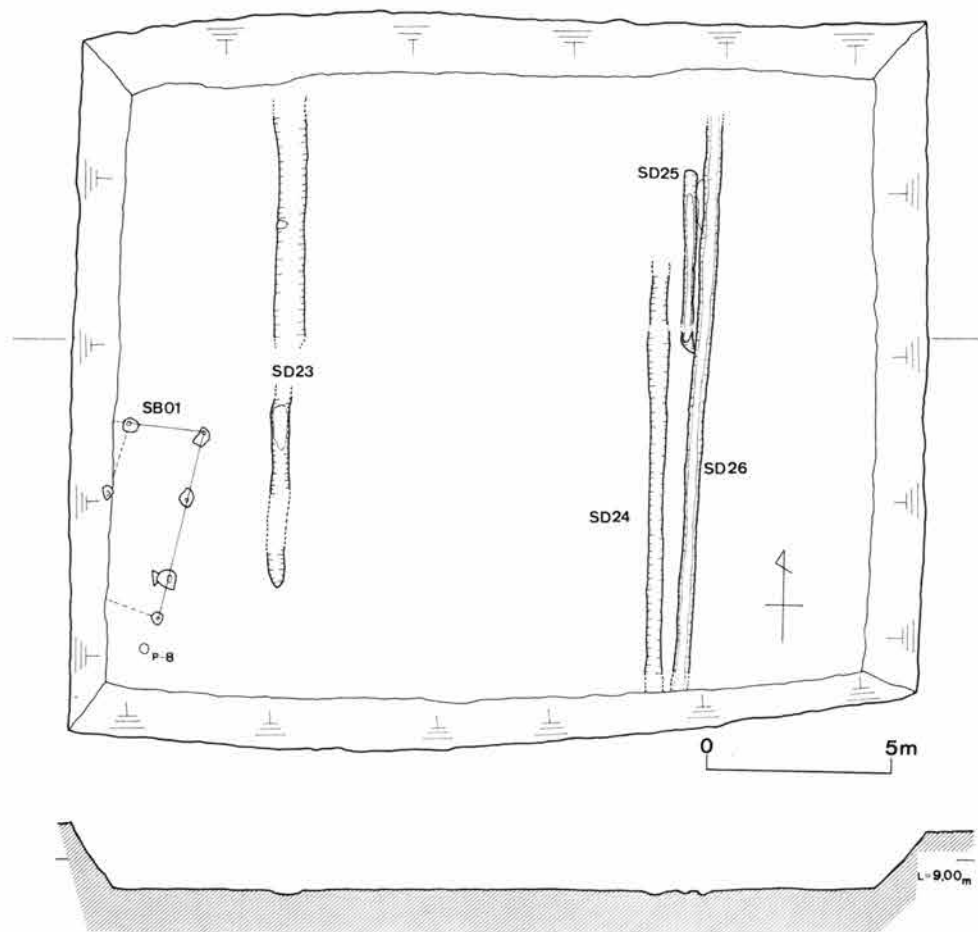
は小規模ながら川(流路)が存在していたものと考え
る。なお、SD 23 は全く遺物の出土がない。

SD 25・26 は共に排水溝と思われ、淡灰褐色粘土
の埋土をもつ。SD 26 は長さ約 15 m、幅約 40 cm、
深さ約 20cmを測る。断面形は半円形を呈する。SD
25 は長さ約 5 m、幅約 30cm、深さ約 7 cm、南端は
SD26により切断される恰好になる。掘形の断面は
隅丸台形である。出土遺物は両者の溝とも、土師器
片のみである。

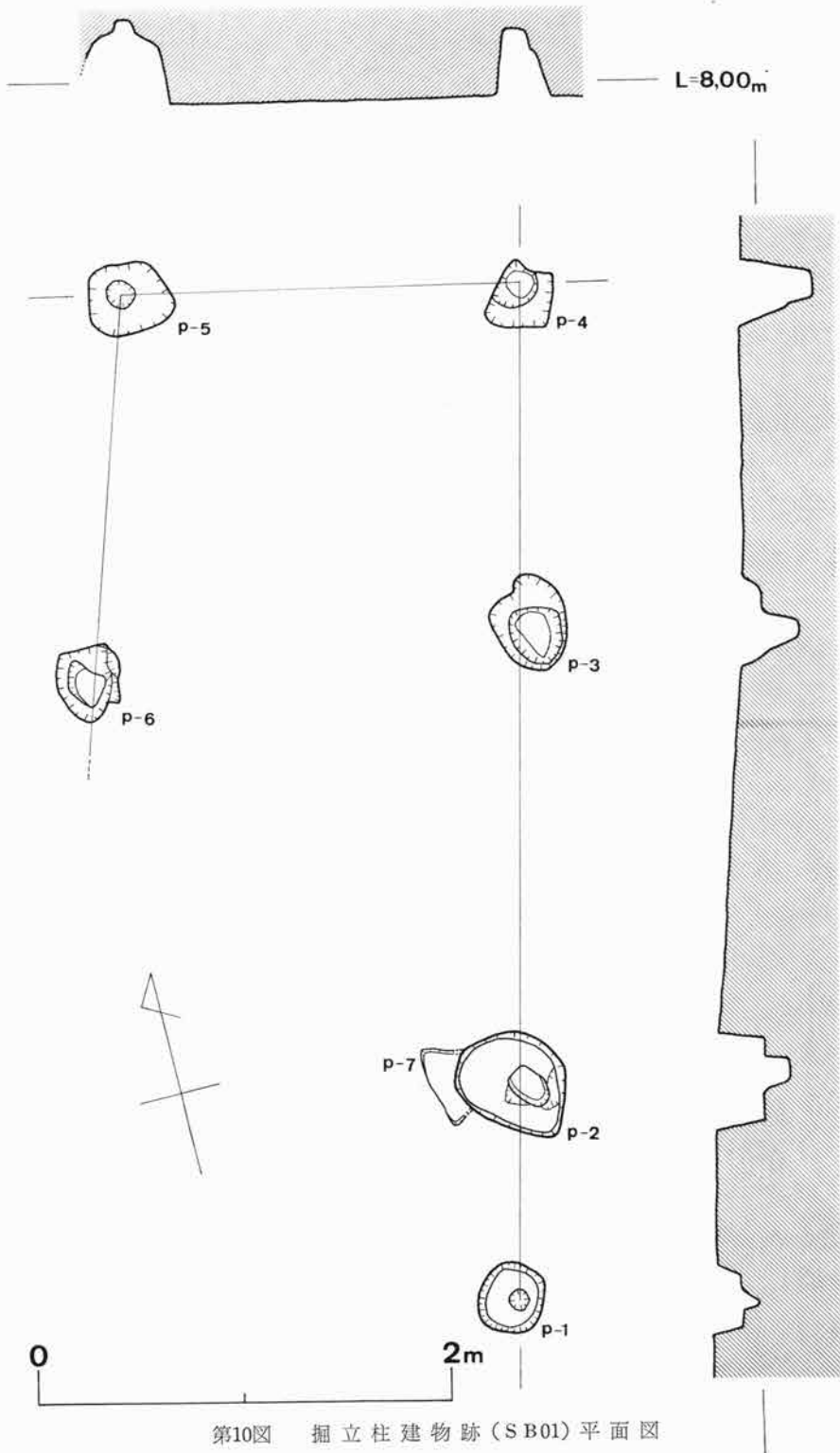


第8図
Aトレンチ遺構検出状況(南から)

掘立柱建物跡(SB01)は、Cトレンチ西南部隅で
確認された(第10図)。東側の棟に並ぶ柱穴4つと、西側に並行する2つを南北3間、検出



第9図 Cトレンチ内遺構平面図(下層)



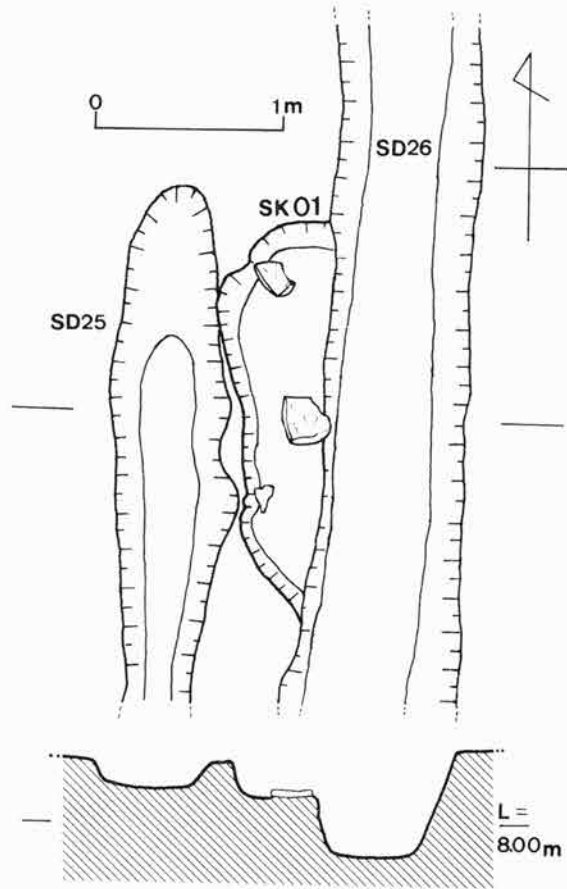
第10図 掘立柱建物跡(SB01)平面図

した。すなわち東西1間分である。トレンチ西壁に規制され、確実な間数規模は不明である。柱間距離は2.1m~2.3mと均等ではない。柱穴の平面形は不整形形で深さはどれも30cm前後である。おそらく上屋構造の簡便な、倉庫のような建物と推察する。

また、類似の形状・規模をもつ柱穴(P-7)もあるが、SB01の柱穴によって半壊している。さらに、この建物跡の南側にもう1つの柱穴が存在する(第9図)。これは時期の違う別の建物、あるいは修復などによる建てかえが考えられる。

SB 01 からの出土遺物としては、P-8付近の遺構面から土師器複合口縁壺片1点を検出している。他時期の遺物の出土がなく、また1点にすぎないため速断し難いが、古墳時代前期を上限とするものと判断できよう。

Bトレンチの下層からは溝(SD39)が検出された(第11図・下)。長さ約2.6m、幅約20cm、深さ約6~8cmを測る。埋土は暗灰色粘土で、暗灰褐色砂粒の面から掘り込まれている。特筆すべき点は、地震などによって生じたと思われる亀裂がちょう



第11図 Cトレンチ内土壇(SK01)・上
Bトレンチ内溝(SD39)・下

どこの中間部に入り、ズレを生じていることである。このような地割れはA～Cトレンチ内で部分的に観察し得る。垂直的にみれば、第5層最上面にまで達する。亀裂の中の埋土は、第7層に当る黄褐色砂粒である。

Aトレンチでは、二条の溝を検出した面から下層にかけては遺構の存在を確認していない。

土坑は、CトレンチにおけるSK 01とBトレンチのSK 02の2つである。SK 01は、長径約1m、深さは最も深い所で約10cmを測る(第11図・上)。溝(SD 26)と切り合い関係をもつ。中からは中世前期の土師質の羽釜形土器(第13図5, 図版第6-21)を出土している。埋土は濁った灰褐色粘土である。

SK 02は径約80cmの円形をなし、深さは約15cmを測る。出土遺物は存在せず、暗灰色粘土の埋土をもつ。(木ノ下治男)

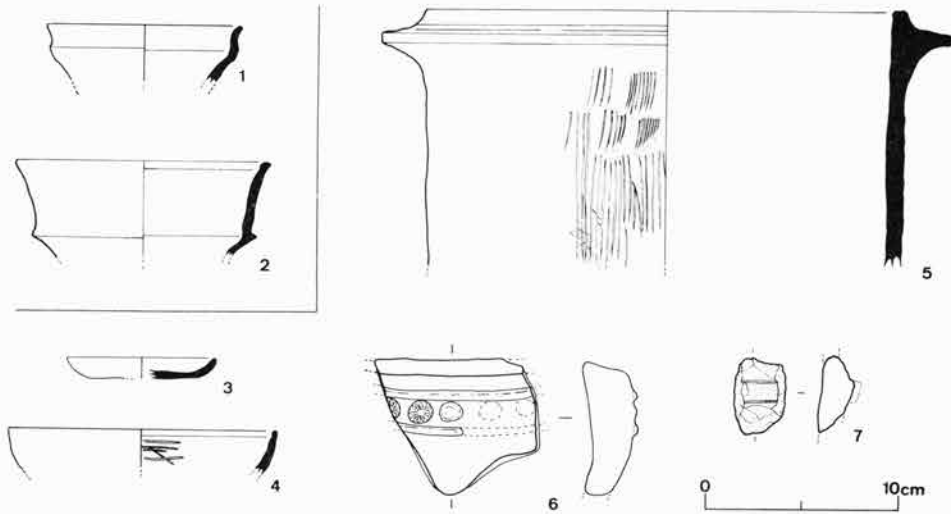
5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、検出遺構と相乗するかのように数量的に多くはないが、多種多様で、時代幅も古くは古墳時代から近世前半期にまでわたっている(第12図2, 図版第6)。以下、出土遺物について各種別毎に略述しておく。

古式土師器は、二重口縁部を有する壺の破片である(第12図, 図版第6-1)。内外ともに磨耗が著しい。口縁部は頸部から大きく外反させて折り返す。その折り返しが直角度に近く、口縁端部に向かってさらに小さく外反させる。口縁端部は内面に包み込んで丸く収める。赤褐色を呈し、焼成軟質で、胎土は比較的稠密である。

須恵器には埴(第12図1, 図版第6-2), 壺(図版第6-3), その他の体部片(図版第6-4)などがある。埴は口縁部の小破片である。口縁部を小さく二重に折り返す。内外面とも青灰色を呈するが、外面胴部以下は灰色をなし、その差異は明瞭である。重ね焼き焼成痕とも解される。焼成堅緻で、胎土は良質である。なお把手の存在は不明である。所謂「初期須恵器」の範疇に属する。他の須恵器片の大半は技法などの諸特徴から平安時代に比定される。粗雑な製作で、内面は青海波紋を施した後にナデ消し、外面には方形叩き目などが見られる。またロクロ痕も顕著で、底面には糸切り痕を有する例も存する。

土師器は土師質皿と羽釜形土器とに大別される。土師質皿の多く(第12図3, 図版第6-5～7)は小破片でその形状を全て推し測り得ないが、大小各種あり、二重口縁を有する例や、器高低く口縁部を単純に丸くした例などのように、技法的差違も窺われる。概して外面は粗雑な仕上げで、内面は丁寧な横ナデ調整を施す。焼成は硬質で、胎土は稠密である。色調は赤褐色系と黄白色系に二分される。平安時代～室町時代前半と推定される。羽釜形



第12図 Cトレンチ内出土遺物実測図

1. 初期須恵器埴(包含層中)
2. 土師器壺(SB01)
3. 土師質皿
4. 瓦器埴(以上包含層中)
5. 羽釜形土器(SK01)
6. 香炉(瓦質土器)
7. 石鍋(滑石製) 以上包含層中

土器(第12図5, 図版第6-21)は, 茶褐色を呈し, 外面には粗いタテハケを施し, 内面は丁寧にナデ調整する。銚との接合上下部分はヨコナデ調整するが粘土を充填させてはいない。銚部上面は低い段を成す。口縁端部と銚端部は平坦に仕上げる。外面は部分的に煤ける。底部は乱雑に粗いハケ目が付き, 表面磨耗している。実用に供していたことが窺い知れる。焼成は硬く, 胎土は良質であるが若干砂っぽい。中世前半期頃に比定して大過なからう。

輸入陶磁器としては, 白磁合子, 灰白磁碗と青磁碗がある。白磁合子は, 天井部外面に花文を描いた花卉形を成す器壁の極めて薄い極小片である。灰白磁碗(図版第6-8・12・13)は, 口縁部が折り返しによる「玉縁」口縁をなし, 底面以外の器壁に施釉し, 底面は露胎そのものである。底部は丁寧にヘラケズリ調整する。青磁碗(図版第6-9~11)は, 色調が緑色(同-9), 青白色(同-10), 濃緑青色(同-11)に三分される。表面の文様は猫描き文様と蓮弁文とに分別され, 同-10は縞蓮弁である。前者は珠光青磁と呼称される劃花文青磁で, 後二者は龍泉窯系青磁である。13~14世紀代に比定される。

瓦質系土器は埴と香炉に分類される。埴(第12図4)は, 内面に暗文を施し, 口縁部はツマミ上げる。「楠葉型」も存する。香炉(第12図6, 図版第6-14)は, 二条横凸帯間に小形菊文を陰刻し, 口縁端部を平坦に仕上げた室町時代に比定される円形香炉である。

瓦類には軒丸瓦, 軒平瓦と平瓦とがある。軒丸瓦(図版第6-15)は, 外区内縁に連珠文

を廻らし中心部に三巴文を配する巴文軒丸瓦で、表面には砂オコシ痕が認められる。室町時代に属するであろうか。軒平瓦(図版第6-16)は、均整唐草文を左右対称に配するが、唐草文は退化し、近世前半期の様相を示す。平瓦はナデと砂オコシが顕著である。

以上の遺物のほかに、滑石製石鍋片(第12図7, 図版第6-17)、背部に刻ミを施した土馬片(図版第6-18)、14世紀代の常滑系甕片、近世前半期と推定される志野系菊皿(図版第6-19)や小形の黄瀬戸系菊皿(図版第6-20)などがある。(松井 忠春)

6. ま と め

今回の調査では、主に中世(鎌倉時代)以降の資料が得られた。当時の調査地周辺部における乾陸化を示すものとして、各時代の遺構はいずれも貴重なものと言えよう。

ところで、今回の調査では前年度の集落跡(古墳時代後期)の広がりを確認していない。むしろ同時期の遺物が1点も存在しなかったことから、今年度の調査地区までの広がりについては否定的に考えざるを得ない。集落の範囲がより限定され、このことが今後の発掘調査区の効果的な設定を多少なりとも可能にしたと言える。

古墳時代の遺構は明確でないが、遺物は・掘立柱建物跡(SB01)を検出した面から前期の土師器複合口縁壺片が1点出土している。ここでいささか留意すべき点は、前年度の調査で下層遺構とした土器溜りとの関係である。これは沼池状の浅いおち込みで、時期は出土土器群からみて古墳時代前期に属し、庄内～布留式期に該当する。この土器溜りと今回の古墳時代遺物出土地点とは、直線距離にして約180m隔てている。この2地点をもって現状では同時並存と言えないのはもちろん、廃棄の場としての土器溜りと今回の建物跡とを有機的に関連付けるものは、今回の調査では得られていない。しかし、集落の広がりを考える上で掘立柱建物跡の存した遺構面(暗青灰色粘質土)は、1つの手がかりを与える。第9図に示した溝(SD23)から溝(SD24)の間は自然の流路、あるいは土器溜りの場所と同様の浅い沼池のような景観を呈していた様である。すなわち、SD23より西側に広がる粘質土面は自然堤防を形成している面であり、これより東側一帯は自然流路の入り組む後背湿地であると理解したい。この様に考えると、古墳時代の集落はより西側に広がっている可能性があり、しかも土器溜りの範囲までを含めた広い範囲になると推定される。

乾陸化の歴史は、また出土遺物にも反映されていることは言うに及ばない。出土遺物に関しては簡略ながら既述したとおりであるが、ここで再度歴史的に概観してみよう。上述の如く古墳時代にあっては、過去数回にわたる発掘調査で集落跡が検出され、その集落跡の範囲が明確に本調査地まで及んでいたことが、ごく少量ではあるが古式土師器や初期須恵器が物語っている。その後6世紀以降平安時代中期までの遺物が皆無であり、人為的痕

跡を全く欠失していることから鑑みる限り、あるいは木津川の氾濫原、ひいては巨椋池の水中に没した可能性を示唆していよう。平安時代後期に入ると再び乾陸化し、微高地に集落や耕作地を営みはじめ、その規模はかなり大きく古墳時代のそれに匹敵し得るものであったかもしれない。天変地異が少なかったが故に継続して生活圏が維持されたが、14世紀前半を境にして突如消滅する。それは土層の観察からも上記事由による災害が周辺一帯を襲ったことが窺い知れる。その湿地化から脱却しきれないままに、豊臣秀吉による淀築城まで待たなければならなかった。淀城を強固にするための一手段として木津川の大変革工事が施行され、それにより調査地周辺は旧来の姿を再現するに至った。しかしその期間はあまりに短く、淀城の運命と軌を一にしたと言っても過言ではない過程を経たものと推定される。志野系・黄瀬戸系陶器が表示するように、16世紀後半～17世紀前半という限定された期間内の遺物しか出土しないことが何よりの証であろう。その後昭和8年に始まる巨椋池干拓事業によって今日の姿を描出するに至ったのではなかろうか。

なお、中世期における特筆すべき点として、輸入陶磁器と滑石製石鍋の出土があげられよう。輸入陶磁器は前述したように海上交通により中国から日本に搬入されたものであり、滑石製石鍋にみる滑石は恐らくは長崎県産と推定される。これらの出土は交通の広さを窺わせしめるものであるとともに、本調査地の中世期における歴史的な性格を具視しているものと言えよう。

(松井忠春・黒坪一樹)

7. おわりに

木津川河床を非常に長い時代(弥生時代～江戸時代)にわたる広大な複合遺跡として捉え、資料研究に取り組む意義には甚大なものがある。古墳時代の集落としては典型的な低湿地の中に営まれたものであり、しかも残存状況は良存である。先史以前の集落の存在が当地においてあまり力説されて来なかったのは、一つには自然地理学や地質学との連携がうまくとれていなかったことにある。現在の地形からは推察し得ない旧地形の復原といったことに意を注ぐ。たとえば自然提防や後背湿地、扇状地などに対する基本的な理解と正確なイメージをもつことは、考古学の調査に多くの成果を付与する。当地のような調査ではとりわけ等閑視し得ない課題である。継続して実施される木津川河床遺跡内での調査で得た資料の重要性を常に認識し、今後の調査・研究に全力を上げたい。

(黒坪一樹)

8. 立会調査

(1) 目的と経過

発掘調査と一部並行して実施した当遺跡範囲内の立会調査について簡略に記しておく。

今回の調査の目的は、昨年度に検出している集落跡(古墳時代後期)の北限を確認することと、土層断面を正確に観察することにある。

調査地の所在は、京都府八幡市八幡小字針の内池で、石清水八幡宮の男山から臨める木津川流域下水道浄化センターの建設予定地内に当る。立会調査地点は、合計4か所ですべて水路改修工事の実施される所である(第13図)。したがって、掘削幅こそ3.5m前後と狭いが、全長は数百mの長さにわたる。すべての調査地が集落跡の検出地点の北側に位置しているため、集落のひろがりの北限を捉えることに努力した。

水路改修は、地表下約2.5~3mまで掘り下げる工事である。これまでの発掘調査でわかっている遺構面の標高が約8m(地表下約1.8~2m)であることから、工事による遺構、遺物の全壊は到底まぬがれない状況である。慎重な遺物採取、土層観察が必要となる。

調査期間は、昭和59年11月1日から昭和60年3月31日の間で、工事の進捗状況に対応して実施した。当調査研究センターの松井忠春、黒坪一樹の二名が現地調査を担当した。

立会調査という性質上、明確な遺構の検出はかなわなかったが、層位観察およびごく微量の遺物採集を行っている。なお、調査面積は約1,520m²である。

掘削工事は、No.1地点を例にとると、三段階に分けて地表下約3mまで重機で掘り下げる。そして人力で壁面を整え、あわせて崩落、水の流れ込みを止めるための鉄鋼板を打ち込む。したがって、土層断面観察は鋼板打ち込み直前までに限られる。手スコップと半月鍬で部分的ながら壁面の削り出しを行い、遺物の有無、層序などを確認する作業が主である。

以下、基本的な土層の堆積状況を中心に、調査結果の概要を述べたい。

(2) 調査概要

土層の断面観察を中心に1~4地点をみると、1~3地点は現地地表下約2.7mの深さで、



第13図 立会調査地点位置図 (S=1/5,000)

土層の堆積状況はほぼ共通している。上層から順に層名(および厚さ)を列記すると、①黒褐色有機質土(20~30cm)、②淡褐色砂質土(10~20cm)、③暗赤褐色粘質土(30~50cm)、④暗青灰色粘質土(1.4~1.6m)、⑤暗灰褐色細砂(30cm)となる。

①は、水田の旧耕作土である。②は、水田の旧床土である。この下半部に木津川の洪水堆積物である灰白色細砂の層が断続的に堆積している。③は、鉄分と植物遺存体が赤く斑らに存在している層である。④は、下位にいくにつれて粘質土から徐々に極細砂へと変化する。発掘調査ではこの層の下位から、古墳時代~室町時代の遺構面を検出している。最下位にて、茶褐色(チョコレート色)の泥炭層が薄く観察されたが、整地層ではなく自然の堆積によるものと判断した。遺物はまったく出土していない。

次に4地点(堤外水路部)では、6層に分かれる断面を観察した。1~3地点とほぼ同様の層序ながら、④層と⑤層の中間に暗茶褐色粘土と暗黒灰色細砂の互層(30cm~40cm)が存在する。この層のレベルはほぼ、1~3地点の泥炭層のレベルに等しく、この深さにいわれる植物遺存体の多くが存在している。この層中からは、径2~3cmの炭、水生植物であるヒシの種子などを採取している。土器その他の遺物は見つからない。

全体的に出土遺物は極く少量である。遺物は③層中から単独に出土する土師質皿、陶器(壺、播り鉢)などの細片が主なものである。④層中からは、全く遺物の出土がない。これまでの発掘調査で遺構面としてわかった時代(古墳時代前・後期、鎌倉、室町)の遺物は皆無であった。立会調査という制約は確かにあろう。しかしながら、断面観察、さらに排土中の採集作業からさえも遺物が得られない事実は、遺跡の広がりについて否定的に考えざるを得ない一面がある。慎重な態度で立会調査に臨み、旧地形の復原に資する材料を少しでもつくっていきたいと考えている。

(黒坪一樹)

注1 植村善博「山崎地狭部の地形と土地利用」(『地理』第29巻第7号)1984

注2 長谷川 達「木津川河床遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 京都府埋蔵文化財調査センター)1982

注3 黒坪一樹・長谷川 達・竹井治雄「木津川河床遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983

注4 黒坪一樹「木津川河床遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第14冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984

注5 調査補助員・整理員として次の人々の協力があつた。

福富 仁(関西大学卒業生)、城田正博(立命館大学学生)、木ノ下治男・飛田浩一・宮田裕美(関西外国語大学学生)、山尾摂子・今石和美(龍谷大学学生)、敬称略(順不同)。

注6 ここでは溝状遺構の残存状況が良好な所としてSD08~SD20の間を採用し、これらの溝間距離を測ってある。二本ずつの細い溝は合わせて一本の径、そして径と径の間の広い部分を畝と理解し、畝幅の平均値を算出している。

2. 奥山田池遺跡昭和59年度発掘調査概要

1. はじめに

京都から南山城・奈良県と古代遺跡の密集する中を通り、太平洋側の和歌山県へと通じる一般国道24号線は、京都―奈良を結ぶ動脈として頻繁に利用されている。そのため、交通量の増大に伴って日本道路公団は、相楽郡木津町より、宇治市内の交通緩和のために建設されている大久保バイパスに接続する延長約20kmの京奈バイパスの建設を計画した。

この建設計画に伴い、京都府教育委員会は、昭和47・57年度の2回にわたり京奈バイパス建設予定地内の分布調査を実施した。バイパスは、木津川左岸の丘陵上を通るにもかかわらず、18か所の遺跡が確認された。(第14図、付表1)

ここに報告する奥山田池遺跡も、分布調査が実施された際に確認されたもので、奥山田池周辺において、奈良時代と思われる須恵器・土師器・瓦片が採集され、遺跡の存在が明らかになったものである。

京奈バイパス建設工事に伴う事前調査として、初年度にあたる今年度は、建設工事の関係上、奥山田池遺跡がその対象となり日本道路公団より調査の依頼を受け実施した。

調査対象池は、当初、奥山田池西方に広がる平坦地、山林を含む路線長220m・道路幅分25mとしたが、対象地南端において多数の土器・瓦片が出土したため、対象地を南へ50m・道路幅分だけであったものを法面まで拡張した。

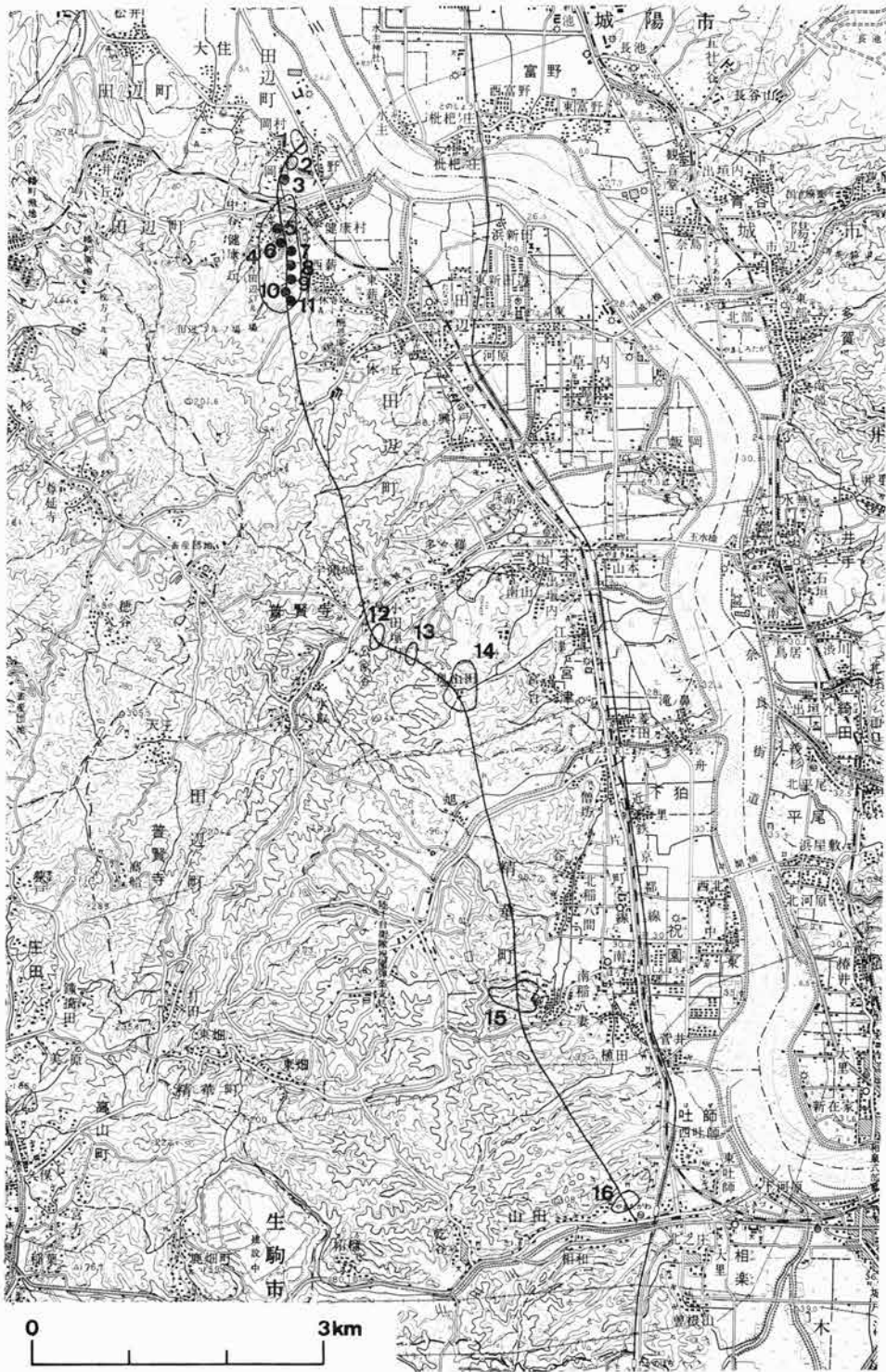
調査は、昭和59年12月4日から開始し、同60年3月30日まで行った。現地調査は当調査研究センター調査課主任調査員長谷川達・同調査員増田孝彦が担当した。

調査にあたっては、日本生命保険相互会社・田辺町教育委員会・京都府立山城郷土資料館・京都国立博物館から多大なる御協力をいただいた。さらに調査補助員・整理員として花園大学、立命館大学等の有志学生諸氏の積極的な参加があった。これらの方々から感謝の意を表します。

2. 位置と環境

奥山田池遺跡は、綴喜郡田辺町三山木奥山田に所在し、近畿日本鉄道三山木駅の南西方2kmの標高75m～95m付近の丘陵部に位置する。遺跡名称となった奥山田池付近では、3つの谷を包括する範囲となっており、もっとも広く奥行きのある南側の谷を中心として広がるものである。

田辺町は、南山城盆地の中央を北流する木津川左岸に位置し、町の西側は標高100mま



第14図 京奈バイパス路線遺跡分布図

付表1 京奈バイパス関係遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代	所在地			備考
				町	大字	小字	
1	久保田遺跡	散布地	古墳 奈良	田辺町	大住	久保田他	土師器散布
2	三本木遺跡	〃	〃	〃	〃	三本木他	土師器
3	岡村古墳	前方後円墳	古墳	〃	〃	姫ノ垣内	埴輪片
4	狼谷遺跡 (小谷遺跡)	散布地	弥生	〃	薪狼谷		弥生土器・石廬丁・石斧
5	郷土塚1号墳	円墳	古墳	〃	〃	平谷	横穴式石室
6	〃 2号墳	〃	〃	〃	〃	西山	横穴式石室・埴輪
7	〃 4号墳	〃	〃	〃	〃	西山	横穴式石室
8	畑山1号墳	〃	〃	〃	〃	畑山	〃
9	西山1号墳	〃	〃	〃	〃	溜池	〃
10	〃 2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	〃 3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃
12	小田垣内遺跡	城館跡	室江町 戸	〃	普賢寺	小田垣内	土塁・土橋・堀
13	西平川館跡	〃	(中世)	〃	三山木	西平川原	平瓦・軒平瓦
14	奥山田池遺跡	散布地	奈良	〃	三山木		土師器・須恵器・瓦
15	(南) 稻八妻城跡	城跡	室町	精華町	南	稻八妻	連郭式山城
16	山田遺跡	散布地	奈良	〃	山田		須恵器・土師器
17		散布地	奈良	木津町	相楽		須恵器
18	条里制遺跡	生産地 散布	奈良	〃	〃	市坂	土器片

での低平な洪積丘陵地帯（男山丘陵）が広がり、東側は木津川の沖積作用により形成された南北に細長い平野部から成っている。また、西側の低丘陵に源を発し木津川に流入する諸河川は、平野部に達すると天井川化している。

田辺町内には、数多くの遺跡が存在するが、以下、奥山田池遺跡周辺のみを歴史的環境を概観してみる。

周辺では、旧石器時代の遺物は採集されていないが、縄文時代の遺跡として石棒を出土した山崎遺跡^(注2)が知られている。

続く弥生時代の遺跡は、古墳出現前夜の各地域集団の緊張関係を背景として丘陵上に集落を営んだ、いわゆる高地性集落に属する天神山遺跡^(注3)・飯岡遺跡^(注4)がある。他に、異形銅器・刀子が出土した三山木遺跡^(注5)・大型蛤刃石斧が出土した西羅遺跡^(注6)などもある。

古墳時代になると、調査地北東方 3 km の飯岡丘陵上には、前期の全長 82m の前方後

円墳飯岡車塚古墳を中心に大型円墳を含む飯岡古墳群があり、さらに横穴の存在も知られている。調査地周辺では、普賢寺川左岸の下司古墳群^(注7)を始め、10数基程度の横穴式石室をもつ古墳の群集が認められる。また、調査地東方では、権現塚古墳^(注8)・山崎古墳群・宮ノ口古墳群・江津古墳・菖蒲谷古墳など多くの後期古墳が存在する。

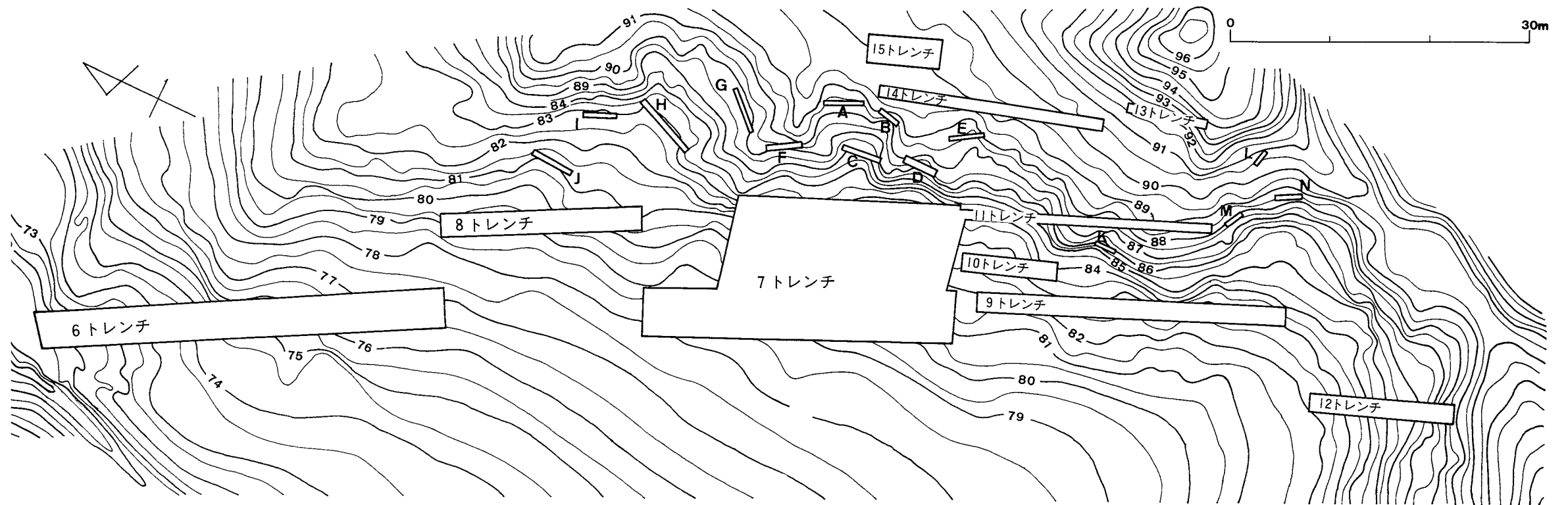
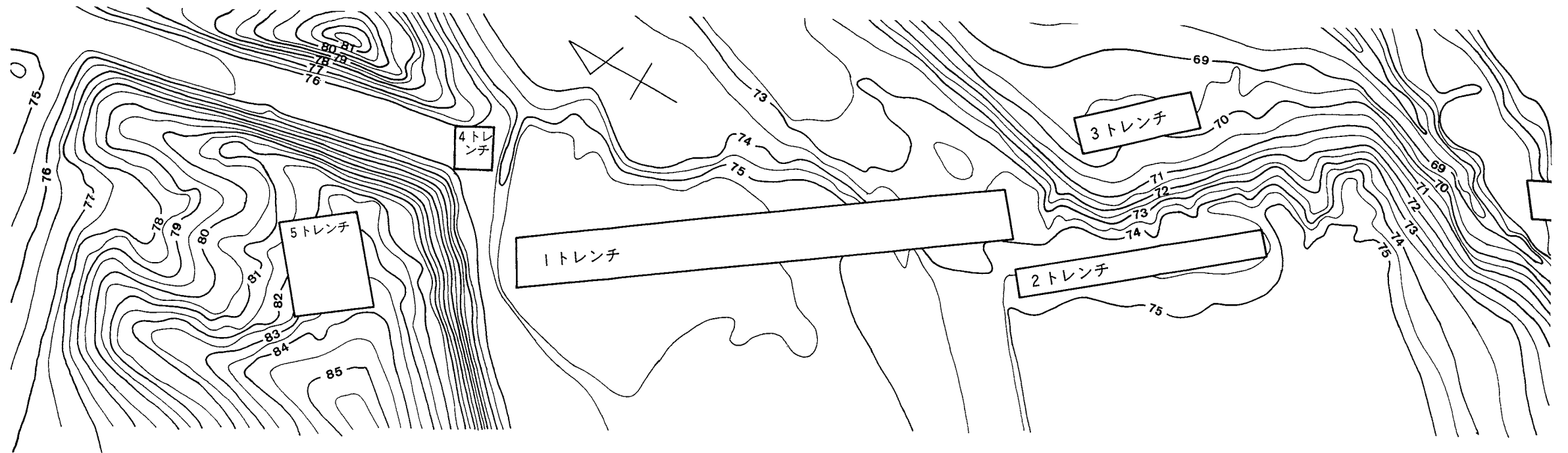
奈良時代、三山木地区は木津川左岸の交通の重要な拠点としてその位置を占めていたようで、『続日本紀』和銅4年正月条に、記述されているように、山本の駅が置かれていたことからもうかがい知ることができる。山本駅の所在地は、三山木の山本集落付近に求められているが、発掘調査等が行なわれていないためその位置についてはさだかでない。いずれにしろ、この地が交通の要衝として重要な役割を果していたようで、山本駅を中心として興戸廃寺・三山木廃寺・普賢寺が、奈良時代前期に創建されている。その他、同志社大学田辺校敷地内では、7世紀後葉～8世紀前葉にかけて須恵器生産を行った、マムシ谷^(注9)窯址・新宗谷窯址も確認されている。

3. 調査概要

調査は、対象地全域の雑草・樹木の伐採、正確な地形図の作成より開始した。伐採を行った結果、対象地北西端には尾根を二分する切り通し様のものがあり、その南側にはかなり広い平坦部分が存在していた。この平坦部分は、奥山田池に続く谷筋を広範囲にわたり埋め立てており、奥山田池水面より約10m程盛土されているようである。山林部分は、北に延びる尾根筋の西斜面にあたり、比較的なだらかな傾斜を呈している。

調査は、この平坦部分から着手し、平坦部分・切り通し部分に4か所のトレンチ（1～4トレンチ）を設置し掘削を行った。その結果、1トレンチでは、埋め立て用の土砂として丘陵が削られているため、旧地形の地山面を検出した。この旧地形の自然傾斜面は、現在残る丘陵裾より約40m南側にあたる。また、1・2トレンチよりも約5m下方の平坦部にある3トレンチでは、地表下2.5mまで掘削したにもかかわらず地山面が検出できなかった。以上のようなことから、かなり大がかりな造成が行なわれたことがうかがわれる。この平坦部は、旧軍隊の火薬工場が建っていた所で、その後牧場、果樹園として利用されていたようで、これらの施設に伴うコンクリート基礎、排水土管、トタン板、鉄釘、ワイヤー等が各トレンチで出土した。切り通し部分も同様であり、この部分は火薬工場へ続く進入路であったと思われ、平坦部分は火薬工場建設に際して造成されたものと思われる。

山林部分の調査は、調査地北西端の切り通し部分の上方に1か所（5トレンチ）、平坦地南側に3か所（6・7・8トレンチ）のトレンチを掘削した。5トレンチについては、遺構・遺物等はまったく検出されなかった。6トレンチについては、平坦部分に近いこと



第15図 調査地地形図・トレンチ配置図

もあり平坦地同様、コンクリート片・鉄釘・ワイヤー等現代の遺物が出土した。しかし、調査対象地最南東端の7トレンチにおいて昭和60年2月6日、須恵器・土師器・瓦片が多数出土し、地形的にみて周辺に窯が存在する可能性が出てきた。そのため、急遽対象地を南東に約50m尾根境まで拡張し、道路幅のみを対象としていたものを法面までとし、新たに伐採・地形測量を実施した。伐採後、西向きの斜面には、窯体天井部が落ち込んできたのではないと思われる凹みが見られた。これらの凹みに14か所の小トレンチを設定したが、表土下約30cm余りで地山面に達してしまい窯体等は存在しなかった。遺物も、10トレンチ南側の小トレンチまでは出土が見られたが、それより南のトレンチでは皆無であった。出土状況も、表土（腐植土）を除去した段階では見られず、地山直上、付近にもっとも多く見られ、その量も7トレンチの上位側に設けたものももっとも多かった。この凹みは大雨等により土砂が流失してできた自然地形であることが明らかとなった。

一方、小トレンチの掘削を行ないながら、7トレンチで出土した遺物の出土範囲及び窯体、灰原等の確認のためトレンチを丘陵上位側に拡張し検出に努めたが、窯体、灰原は存在しなかった。このトレンチでは、遺物が多量に出土したが、丘陵下位側にあたる部分では流土の堆積が著しく表土下2.3mで地山面に達するが、小トレンチや他のトレンチも同様であるが、地山直上にもっとも多く遺物が含まれており、上方に行くに従い遺物は少なくなる。表土下30cmまでは、全く遺物を含まない流土から成っていた。7トレンチで多量に遺物が出土し、窯体、灰原等が存在しないため近辺にある可能性も出てきたため、7トレンチ拡張部北側に8トレンチ、新たに伐採した南側に9・10・11トレンチを掘削した。8トレンチにおいては、7トレンチ同様表土下2.3mで地山面に達したが、遺物はほとんど出土せず、地山直上付近の流土中よりブロック状に炭を含んだ層を検出したが、灰原と断定するには至らなかった。9・10・11トレンチについては、7トレンチに近い部分は遺物が出土したが、9・11トレンチの中央から南端にかけては遺物は皆無である。また、対象地南端の北向き斜面にも1か所のトレンチ（12トレンチ）を掘削したが、遺物はまったく出土しなかった。各トレンチで出土した遺物は、須恵器・土師器・瓦片である。

斜面部分における調査では、窯体、灰原は確認できなかったが、7トレンチ上方の尾根頂部には、比較的広い平坦地があるため、何らかの施設等の遺構が存在する可能性があるため、3か所のトレンチ（13・14・15トレンチ）の掘削を行った。その結果、表土下10cmで地山面に達し、若干の須恵器・土師器・瓦片が出土したのみで遺構は存在しなかった。

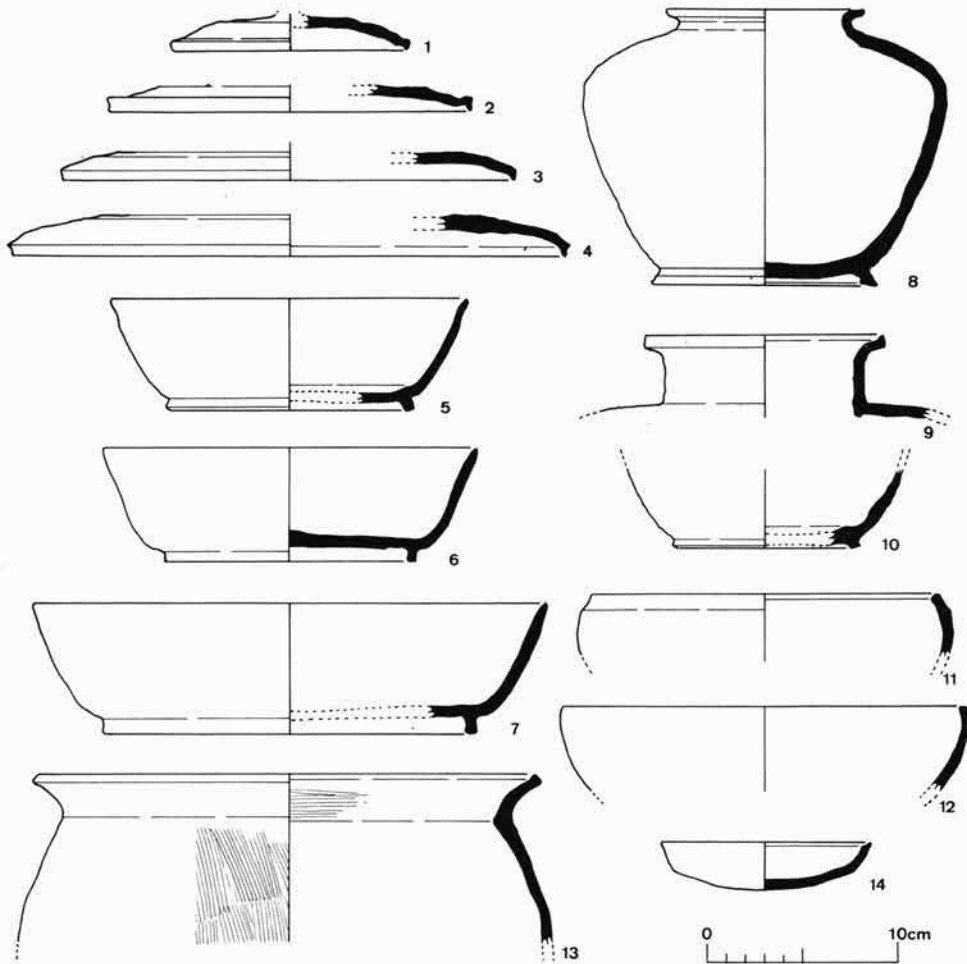
4. 出土遺物

出土した遺物は、須恵器・土師器片・瓦類等で整理箱にして約15箱を数える。そのほと

んどは、7トレンチ及びその上位側の斜面より出土したものである。須恵器・土師器片は細片が多く出土量から見れば、図化できたものはごく少量である。また、須恵器片は生焼け変形したものも多く見られた。瓦類は丸瓦・平瓦の小片が多く出土したが、1枚瓦として復元できたものは皆無である。軒平瓦3・埴1も出土したが、軒平瓦は図化したもの以外は、瓦当面が磨耗しており文様等が判別できなかった。埴は小片である。その他に、窯壁の一部と思われる小塊が少量出土している。

(1)須恵器 (第16図 1～12)

杯蓋 (1～4) は青灰色を呈し、焼成良、いずれも天井部につまみを持つものと思われる。(1)は口径12.4cmで出土遺物中最小である。(2)は口径19.2cm, (3)は、口径22cm, 共に口縁部は垂直に下るが、(2)は端部で外反して丸くおさめる。(4)はもっとも大型のもの



第16図 出土遺物実測図 (1)

で口径29.2cm、天井部と口縁部の間に張り出した稜線をもつ。

杯身（5～7）

(5)は、短い外方に張った高台を有し、口縁端部付近がやや外反する。口径18.8cm。(6・7)はほぼ垂直に張った高台を有するもので、(7)は口径27.2cmでかなり大型品である。杯蓋(4)と口径的にはセット関係が成り立つと思われる。いずれも青灰色を呈し焼成良。

壺（8～10）

(8)はほぼ完形近くまで復元できた短頸壺で、口径よりやや大きい、外方に張った高台を有し、頸部から大きく外反した口縁部、口縁端部は丸くおさめる。灰色を呈し、焼成はややあまい。口径10.4cm、器高29cm。(9)は胴部を欠損しており、なだらかな肩部より上方にまっすぐ延びる頸部、大きく外反する口縁部、端部は上方につまみ上げる。口径12.4cm、灰色を呈し、焼成良。(10)は底部のみの破片で、短い外方に張った高台を有する。

鉢（11・12）

共に灰白色を呈し、焼成はあまい。口縁端部が内傾するもの(11)と、上方を向くもの(12)がある。(12)は(11)より大型で口径21.6cm。

(2)土師器（第16図13・14）

甕（13）

胴部を欠損、「く」字状の頸部をもち、口縁端部は上方に突出する。口縁部内面に横方向、頸部付近より胴部に縦方向の刷毛目がみられる。口径25.6cm、茶褐色を呈し、焼成は良。

土師器（14）

ほぼ完器に近いもので、やや平らかな底部、体部は弧状で口縁部はやや外反する。灯明皿として使用されたのか、芯の周囲にススが付着している。口径11.2cm、赤褐色を呈し、焼成は良。

瓦（第17図）

平城宮式6721系の軒平瓦で、均整唐草文を内区とする。暗褐色を呈し、焼成はやや軟。

調査によって出土した土器は、奈良時代末期頃に位置づけられるものであり、平城宮式6721系の軒平瓦の出土は、調査地よりも北方へ約3kmの所に存在した興戸廃寺(白鳳時代



第17図 出土遺物実測図(2)

創建)や恭仁宮跡などからもその出土が知られている。

5. ま と め

調査では、窯体・灰原等を確認することはできなかったが、出土した遺物に窯壁の一部と思われるものや、不良品・生焼け製品が多いことや、地理的なことから考えると調査地内もしくは、その周辺において窯が存在していた可能性は高いと思われる。また、尾根平坦面から遺物が出土する点も考えれば、調査地の反対側斜面にも窯跡の存在をうかがわせるものである。

調査地付近の丘陵は、砂礫により構成される大阪層群から成っており、砂礫層と砂礫層との間に粘土層がはさまれている部分が存在する程度で非常に崩壊しやすく、地表面の状態が変わりやすい性格をもっている。そのため、流土の堆積が多く見られたり、大雨等により土砂が流失して凹みができたりしている。

同志社大学田辺校地内の調査によって確認された、マムシ谷、新宗谷窯址も調査の結果崩壊しやすい地質のため、窯体内や灰原が流失していたことが報告されている。本調査地内にも仮に窯が存在していたとするならば、窯体、灰原とも流失した可能性もあり、出土している遺物のほとんどが地山直上の流土中からがもっとも多い点などからも、その可能性がうかがわれる。現状では窯体・灰原が露出していることはまず考えられないが、調査地南西方には、かなり広範囲にわたって粘土層が露出しており、今後当遺跡地周辺が開発される際には十分な分布調査が必要とされる場所であろう。(増田孝彦)

注1 補助員 藤井健介・福田正広・佐伯英樹・鶴島三寿・八峠 興・平野 通 整理員 川端美恵・上田真美・東条正明・村瀬雄一・瀬川幸一

注2 梅原未治「三山木村山崎の石棒と同地の古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊 京都府) 1923

注3 森 浩一編『田辺天神山弥生遺跡』(『同志社大学文学部考古学調査記録』5 同志社大学文学部文化学科考古学研究室) 1976

注4 注3と同じ

注5 山田良三『三山木弥生式遺跡発掘調査報告』(田辺町教育委員会・田辺町文化財保護委員会) 1968

注6 田辺郷土史会編『田辺町史』 1968

注7 堤 圭三郎「普賢寺所在古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1967

注8 西川英広編「権現塚古墳発掘調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第2集 田辺町教育委員会) 1981

注9 森 浩一編「マムシ谷窯址発掘調査報告書」(『同志社大学校地学術調査委員会資料』No. 14 同志社大学学術調査委員会) 1983

3. 京滋バイパス関係遺跡昭和59年度 発掘調査概要

1. はじめに

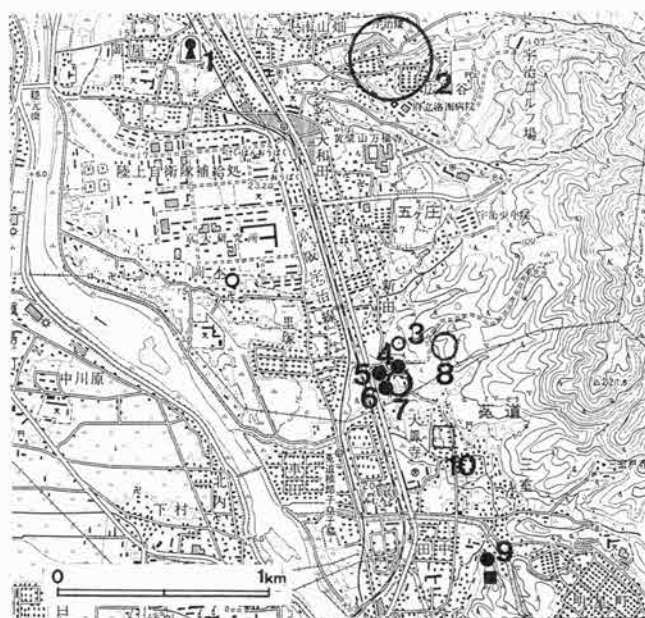
隼上り遺跡および隼上り古墳群の発掘調査は、日本道路公団が計画・施工している京滋バイパス建設に伴う事前調査である。調査地は、宇治市菟道東隼上に所在する。調査範囲は、宇治市菟道西隼上りから同東隼上りに至る約0.3 kmの区間である。発掘調査は、昭和58年度からの継続事業である。今年度は、隼上り遺跡・隼上り2号墳と新しく確認した隼上り3号墳の調査を行った。掘削面積は、約5,000 m²である。

2. 位置と環境

調査地は、宇治川東岸の五雲峰から西方へのびる丘陵先端部に位置し、大阪層群上に立地している(第18図)。また、東方には、黄檗断層がはしっている。

周辺には、弥生時代の羽戸山遺跡、隼上り1号墳、隼上り瓦窯跡、大鳳寺跡などがあり、特に、調査地は、隼上り瓦窯跡と大鳳寺跡との関連が重要である。昭和58年度の調査で検出した遺構等もこの関連で考えられるものである。

最近、大阪外国語大学・吉田金彦教授は、宇治の地名に関して、従来の「内」起源説とは違う立場で「畝地」起源説を発表され、記紀で「菟道」をウヂと読むこととあわせて、古代における中心地を調査地一帯と考えておられるが、これらの遺跡群を総合的に理解する上で非常に興味深い説で



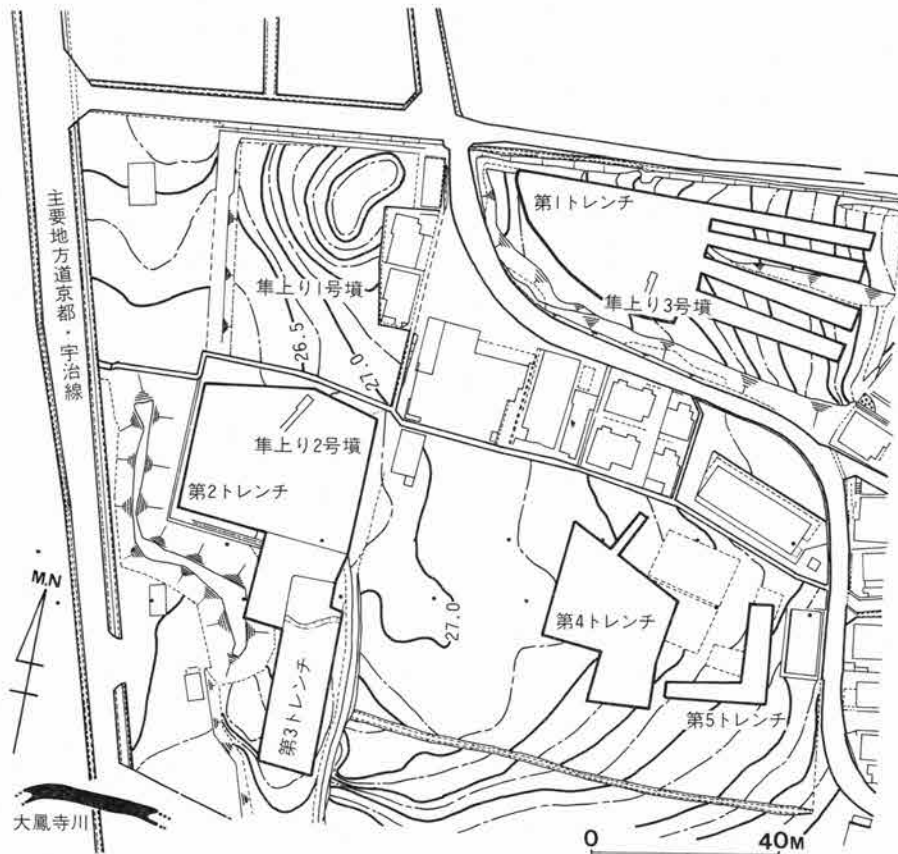
第18図 調査地位置図および周辺遺跡分布図

- | | | |
|-----------|---------------|-----------|
| 1. 二子塚古墳 | 2. 木幡墳墓群(宇治陵) | 3. 隼上り瓦窯跡 |
| 4. 隼上り3号墳 | 5. 隼上り1号墳 | 6. 隼上り2号墳 |
| 7. 隼上り遺跡 | 8. 羽戸山遺跡 | 9. 二子山古墳 |
| | | 10. 大鳳寺跡 |

ある。前述の遺跡に加えて、二子山古墳や宇治上神社などの式内社3社の存在からも、菟道周辺が古代の宇治の中心であったことをうかがわせる。

3. 調査経過

発掘調査にあたり、日本道路公団が設置した工事用のセンターライン杭を基準にしてトレンチを入れた。主軸ラインは、下り146+80と同146+40の杭を直線で結び、発掘地区は、主軸ラインに沿って10mごとに区画した。これは、前年度調査の方法と同じである。掘削は、便宜上第1～4トレンチに分けて行った(第19図)。第1トレンチの発掘は、昭和59年6月18日に着手し堆積状況を考慮に入れ東西に試掘坑を入れた。7月18日、第1トレンチの掘削中に隼上り3号墳を確認し、10月18日、第1トレンチの調査を終了した。第2・3トレンチは、10月15日に着手したが、第2トレンチには、2号墳が存在することから、周辺は人力掘削を行った。地表に露出していた石を重機で移動させ石室の掘り込みに入った。第3トレンチは、地表下2mで近世面を検出した。また、トレンチの大半が大鳳寺川の旧流路であること



第19図 トレンチ配置図

が判明した時点で、攪乱されていない部分を更に1.5m掘り下げ中世土塚墓群を検出した。土塚墓の一部がセクションにかかることと土塚墓群の広がりを確認するために第2・3トレンチ間を拡張し、これを拡張区と命名した(第20図)。第4トレンチは、3か所に試掘坑を入れ、明瞭な状態で柱穴群を検出したため拡張して調査を進めた。調査成果が得られた段階で第1トレンチおよび3号墳は、同年9月22日に、2号墳および中世土塚群・中世土塚墓群は昭和60年1月19日に各々現地説明会を開催した。同年3月30日に全作業を終了した。

検出した遺構の番号付けは、昭和58年度調査と同様に、柱穴・土塚等の性格は除外し、全遺構を通して付した。便宜上、Locus Numberの略号L.N.を使用した。一方、遺物包含層は、全トレンチで確認した時期ごとの層位にLocus Numberの略号L.N.を付し、

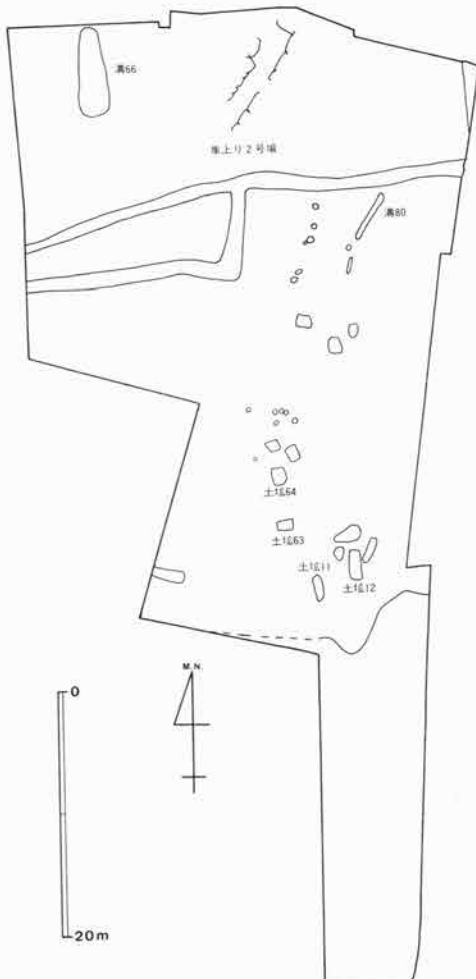
全トレンチで統一を行ったが、第3トレンチについては、堆積状況が複雑で不統一になった部分がある。略号が遺構・層位とも同じで混乱をさけるため、層位番号をL.N.15までとし、L.N.16以下を遺構番号とした。各図面に記入してある遺構番号は、現在、整理中であるため上記の番号を付してあるが、今後整理し、遺構ごとに番号を付け直したい。

調査は、調査課主任調査員松井忠春、同調査員小池 寛・荒川 史が担当した。本概報の執筆・編集は小池・荒川が行った。調査期間中、多くの方々の御協力を(注1)得た。また、種々の御教示を賜った諸先生に記して深謝する次第である。

4. 遺 構

検出した遺構としては、単上り2号墳・3号墳・中世土塚・柱穴・溝等がある。以下各遺構について概要を述べる。

(1) 単上り2号墳(第21図) 単上り2号墳は、丘陵の南緩斜面に位置する。この古墳は、以前から茶畑の中に石材が露



第20図 第2・3トレンチ平面概略

出していたため、横穴式石室を持つ古墳であることが知られていた。

墳丘は、その大部分を削平されている。また、石室の東方・西方・南方に後世の溝がはしる。このため、調査地内では、墳形及び墳丘の規模を明確にすることができなかった。しかし、墳形に関しては、今回調査した3号墳が円墳であることや、1号墳についても、現状の観察では円墳と考えられることから、2号墳も円墳であることが推察される。また墳丘規模に関しては、前述の東方と西方の溝と、石室との距離がほぼ等間隔であり、これらの溝が墳丘の規制を受けて掘られたことが推測される。この2本の溝が墳丘の規模を示しているとする、直径30mの円墳と推測できる。

埋葬施設は、奥壁から羨道に向かって右側に袖を持つ片袖式横穴式石室である。石室は破壊が著しく、基底石のみが残存している。石材は大型のチャートを主に使用している。

石室は南西に開口し、玄室の主軸は磁北からN-36°-Eをとる。石室の全長は9.15m、玄室長3.65m、玄室幅は奥壁で1.64m、袖部で1.95m。羨道長5.50m、羨道幅は玄門部で1.4m、羨門部で1.6mを測る。玄室の現在高は、奥壁部で1.10m、東壁で1.16m、西壁で0.92m、羨道の現存高は、東壁で0.4m、西壁で1.04mを測る。

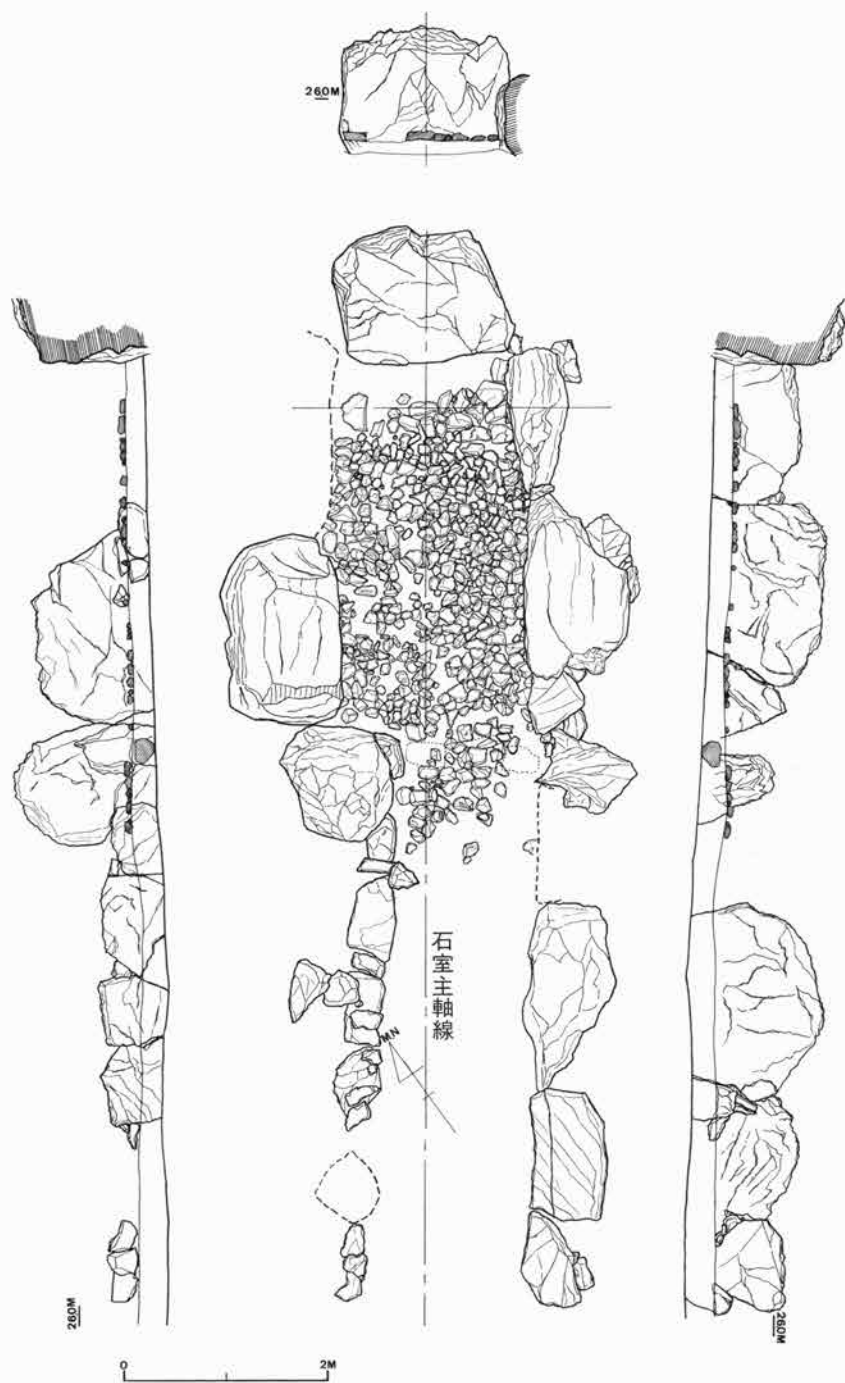
玄室は、西側壁の奥壁よりの石がすでに抜き取られていたが、奥壁1石、側壁は東壁が3石、西壁が2石で構築されていたものと思われる。玄室の平面プランは、奥壁部がやや狭まり、若干の胴張りを持つ。玄室の床面には、拳大の河原石が敷かれている。このうち、奥壁から約50cmの幅だけ割石を敷いており、何らかの区画を意図しているものと思われる。なお、玄門部の礫床下から、梱石としたと思われる自然石3石を検出している。

羨道は、東壁では大型の石2石と、やや小ぶりの石2石からなると思われるが、玄門よりの1石は抜き取りにあい、一部を残して破壊されている。西壁は、東壁と比較して小型の石7石からなるが、羨門から2番目の石は抜き取られている。羨道の床面は、玄門より一部で礫が敷かれているが、その他の部分では礫を検出できなかった。

前庭部には拳大の礫が堆積していた。この中からは、須恵器・土師器・隼上り瓦窯の製品と思われる瓦が出土している。この須恵器の中には、石室内の須恵器と接合できる個体がある。また後述する溝66の遺物と接合できる個体がある。このことから、前庭部の礫は、羨道にも礫床があり、これが追葬時、もしくは溝66の掘られた段階にかきだされたもの、という可能性が考えられる。

(2) 隼上り3号墳(第22図)

3号墳は、1・2号墳の北東約60mの丘陵南斜面に位置する。古墳は、かつての茶畑の耕作や造成工事によって削平され、あるいは埋め立てられて、これまでその存在が知られていなかった。



第21図 2号墳石室実測図

墳丘は、削平を受けており、その高さは確認できなかった。しかし周溝の最下部を検出し、直径約12mの円墳であることを確認した。周溝は幅0.5m～1.7m、深さ0.1m～0.4mの規模で、斜面上方に掘りこまれている。

石室は、玄室の奥壁を基点として、全長4.65m、玄室長は3.1m、玄室幅1.4m、羨道長1.55m、羨道幅は0.96mを測る。残存高は、奥壁部で1.11m、袖部で0.74m、羨門で0.41mである。奥壁は基底部に2石を配し、上部には平均0.5×0.4mの石で構築されている。東壁は、基底部に8石を配し、袖石を立てている。上部は奥壁上部と同じ大きさの石を使用している。西壁は、玄室に基底石6石を配している。羨道部及び袖部の石は抜き取られ、どのように構築されていたのかわからない。しかし、石材の抜き取り痕と、羨門部の原位置を保っている一石から推測すると、構造は東壁と同様であろう。

玄室床面には、40cm～45cm前後の平坦面を持つ石が7石、2列に並んでいる。奥壁から羨道に向かって90cmの線上に3石、230cmの線上に3石、その中間に1石並べられている。平坦面はほぼ同一の高さであり、又間隔も同じであることから、棺台として使用されたと考えられる。

羨門部には平均50cmの石が3石残存していた。石の周辺の床面は、攪乱された形跡がないことから、石室を閉塞するために置かれた石であったと考えられる。また、前庭部にも数石同じ大きさの石が散乱しており、これらの石も閉塞石であったと考えられる。

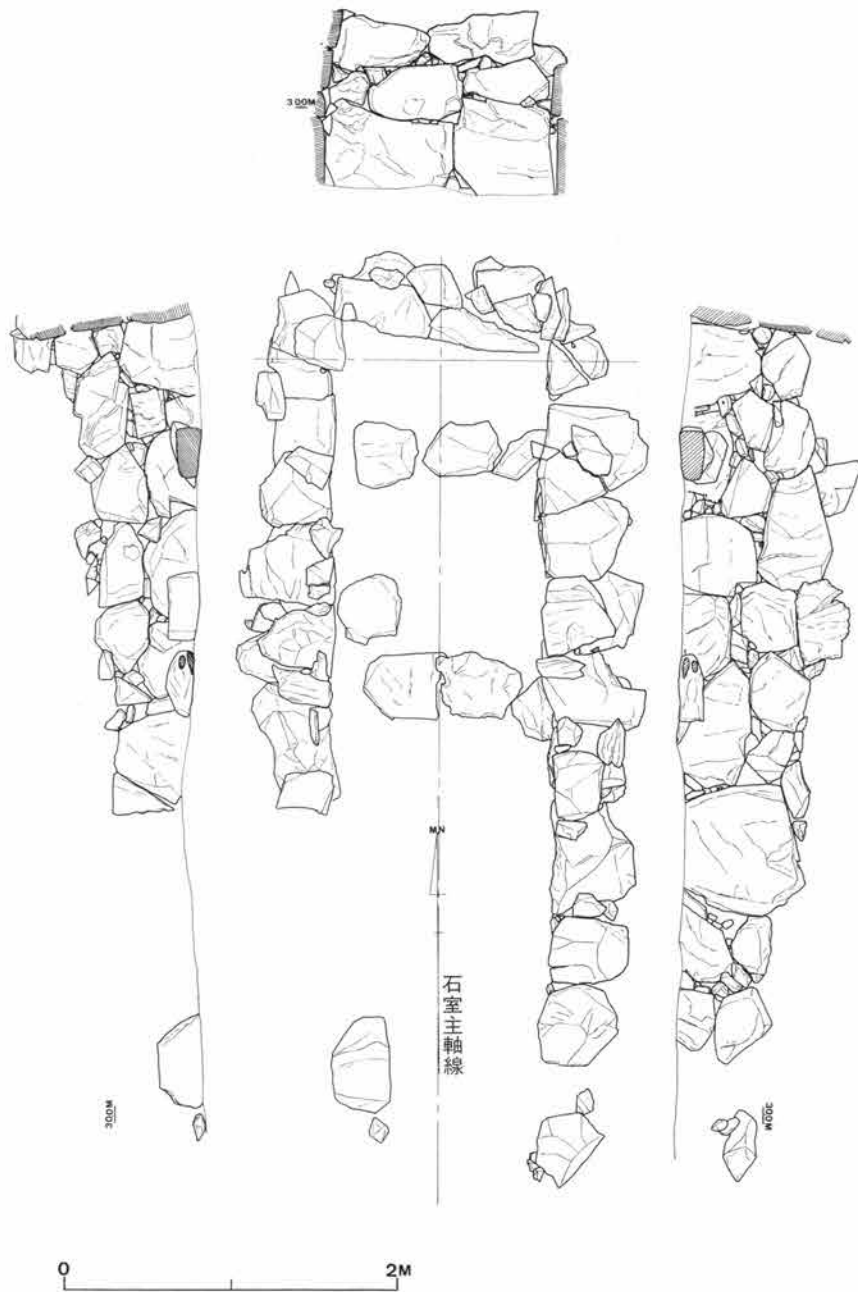
(3) 中世土塚

中世の遺構は、第2トレンチと第3トレンチの拡張区を中心とした地区で土塚を検出した。土塚は全部で13基ある。形態は、隅丸方形・隅丸長方形・楕円形の3種に分類できる。このうち、土塚墓と考えられるものは、土塚11・土塚12・土塚13・土塚14・土塚15の5基がある。以下主なものについて説明する。

土塚11 長軸1.8m、短軸0.65m、深さ約15cmの隅丸長方形の土塚である。墓塚の最北に20×30cmの石が一石置かれており、築造当初の現位置を留めている可能性がある。遺物の出土状況は、青磁碗2点が重なり合った状態で出土した。内面に劃花文を持つものが下にあり、碗と碗との間に木製の漆器(皿)を検出した。土塚最下部には、中世須恵器の皿が、口縁部を下にした状態で出土した。また、これらの遺物の周辺から、鉄釘が30点程出土している。青磁碗は、木製容器に入れられていた可能性もあるが、鉄釘は土塚北半分にやや広く散在していることから、棺に使用された可能性が高い。

土塚12、長軸2.6m、短軸1.1m、深さ25cmの隅丸長方形の土塚である。大きさは群中最大であるが、鉄釘1点以外遺物は検出できなかった。

土塚63 一辺約1.4m、深さ約9cmの隅丸方形の土塚である。土師器・瓦質土器・瓦



第22図 3号墳石室実測図

器・鉄釘等が出土している。

土塚64 長軸約 1.5 m, 短軸約 1.3 m, 深さ約 8 cm を測る。形態は隅丸長方形に近い楕円形である。遺物は、土師器・瓦質土器の細片が上層から多量に出土している。

この他の土塚は、土塚63・64とほぼ同様の規模のものが多いが、遺物はほとんど含んでいない。土塚墓と考えたもの以外の8基の土塚は、土塚63の遺物の構成等を見ると、土塚墓の可能性も考えられるが、これらの土塚が非常に浅いことや、青磁碗が出土した土塚11とは、底面のレベルが異なることから、土塚墓と断定できなかった。

(4) 柱穴群

第4トレンチでは、トレンチ東南部及び西北部でピット群を検出した。

東南部においては、一辺約 60 cm の隅丸方形の掘形を持つ柱穴が3基確認できた。柱部は、直径約 16~24 cm である。しかし、南北方向に対応する柱穴を検出し得なかったため、建物の規模等を明らかにすることはできなかった。3基の柱穴からは、須恵器片・土師器片が出土している。この中には、高台を持つ須恵器杯身があり、8世紀代のものと考えられる。

西北部では、20~30 cm 程度のものと、40~50 cm 程度の2種類の柱穴が見られる。建物の規模・方位等は明確にすることができなかった。遺物は、一部の柱穴から土師器が出土しているが、いずれも細片のため時期は不明である。ただ、検出面からは、高台を持つ須恵器が出土しており、東南部とほぼ同時期と考えられる。

(5) 溝

溝内から遺物が出土しているものは溝66と溝80である。

溝66は2号墳石室の西方に位置し、南北にはしる。長さ約 7.5 m, 幅 1.6~2.4 m, 深さは最深部で約 0.5 m である。断面の形態はU字形である。溝は、拳大から人頭大の礫で充填されている。遺物は、遺構検出面直下と溝の両肩に集中しており、須恵器・土師器が多量に出土している。

溝80は2号墳の南東に位置する。長さ約 4.2 m, 幅約 0.2~0.6 m, 深さ約 0.1 m を測る。遺物は溝の北東端から須恵器が出土している。

5. 遺 物

前項で述べた各遺構ごとに、出土遺物の概要を述べる。

(1) 2号墳(第23図, 第25図1~14)

出土遺物は、須恵器(蓋杯・高杯・横瓶・台付長頸壺・短頸壺・甕)・土師器(甕・皿)・

瓦器・金環・銀環・小玉・鉄鏃・鉄刀・馬具である。

土器(第23図1～11)の大部分は、須恵器が占め総数は50点以上になる。蓋杯の、第23図3・4では、4の方が立ち上がり退化しているが、口径は共に13cm程度であることから、ほぼ同時期である。5は、立ち上がりも退化し、口径11cm程度に小型化してきている。6は、受部の退化の状況・口径などから蓋と身が逆転する直前の段階のものである。

10の高杯は、蓋杯の3・4よりもやや大型の杯部を持つ。長脚に長方形の透し孔を三方に持つもので、蓋杯類よりやや古式の様相を呈する。

これらの土器は、その形態からおよそ4時期に分類できる。つまり、1期は11の高杯のタイプ、2期は3・4のタイプ、3期は1・2・5のタイプ、4期は6のタイプの4種類である。これらの須恵器から、1から4へ形態変化していったことが考えられる。しかし、4種類のうち、1タイプのものは、現在のところ10以外に確認できていない。

装身具としては、金環4点、銀環4点、小玉9点がある。

金環は、いずれも銅芯に金箔を巻いたもので、断面形態・大きさなどから2つのタイプにわけられる(第25図8～10)。銀環には中空のものがあり、銀板を筒状に巻き、それを環状にし両端に蓋をしたものである(第25図13・14)。京都府下では、福知山市城ノ尾古墳^(注2)・同洞楽寺古墳^(注3)・園部町天神山3号墳^(注4)に出土例がある。

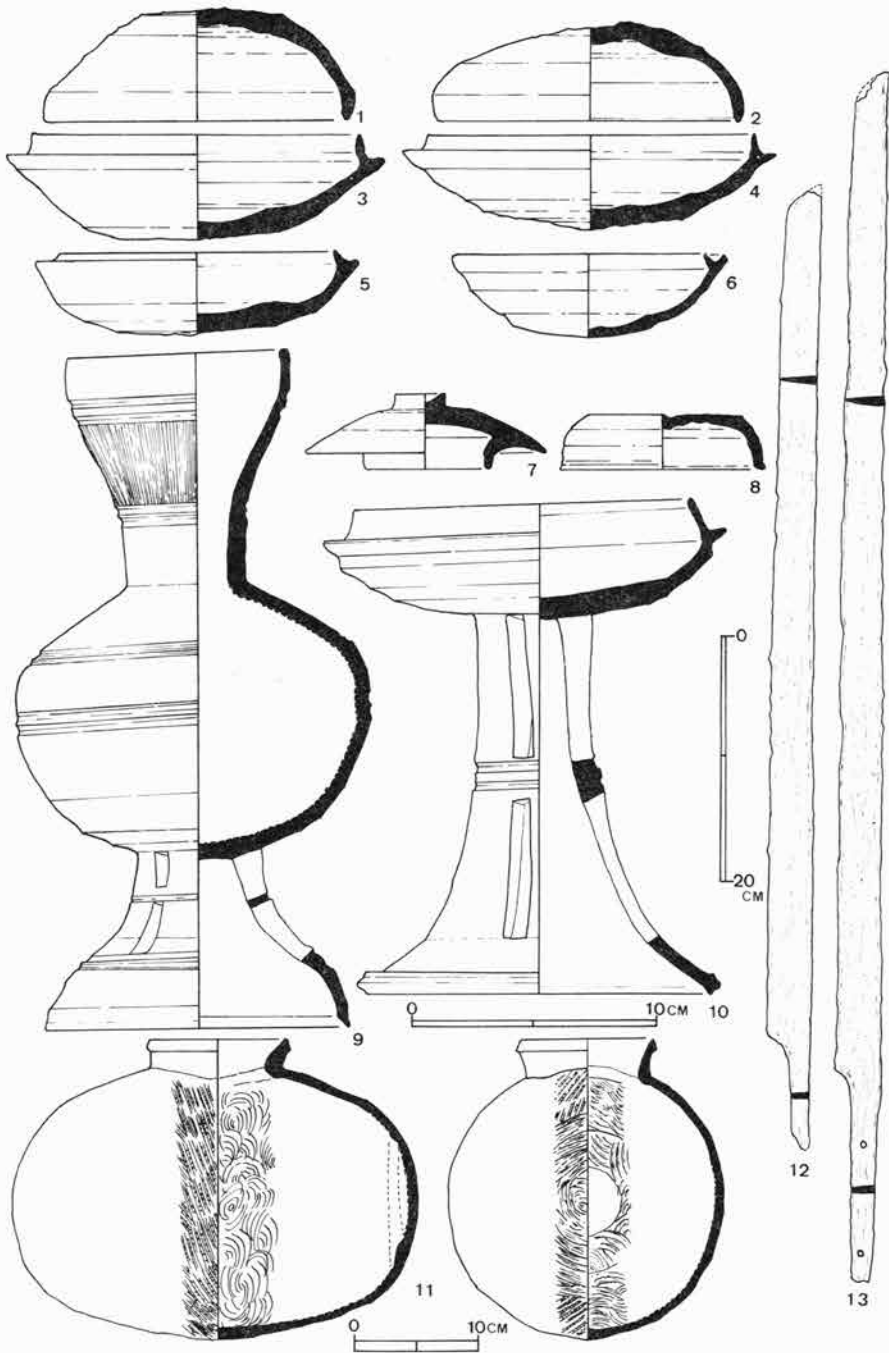
武器類では、鉄刀2振・鏝2点・鉄鏃12本等がある。鉄刀(第23図12・13)は、いずれも直刀平造りの大刀に属する。13の茎を含めた全長は99.3cmである。12は鋒の一部と茎尻を欠損しており、現存長は79cmである。鏝はいずれも倒卵形のもので、透し等は持っていない。鉄鏃は12本出土している(第25図1～4)。基本的には3タイプに分類することができる。1はいわゆる細根式、2・3は平根式の鉄鏃である。4はいわゆる平造柳葉形のものである。いずれも茎を欠損しているが、1と4は約15cmと思われる。

馬具では、鞍もしくは鉸具と座金具がある。座金具(第25図5)は、C字を背中合わせにした形態の鉄板の中心を裁頭円錐形に打ち出したものである。釘穴は方形である。金銅等を張った痕跡は認められず、何の座金具であるかは不明であるが、ここでは、鞍の座金具である可能性を指摘しておきたい。

(2) 3号墳(第24図)

出土遺物は、須恵器(蓋杯・無蓋高杯・台付長頸壺・甕・甗)・土師器(甗)・金環・銀環・鉄鏃である。その他、瓦器・黒色土器等がある。

須恵器(第24図1～10)では蓋杯が計7点ある。6は、5に比べてやや立ち上がり退化している。また、口径・器高等の法量から少なくとも2時期が考えられる。無蓋高杯は、方形2段透し孔をもち、7は、杯部外面の稜がにぶく脚端部にほとんど面を持たない。8



第23図 出土遺物実測図(1)
1~11. 須恵器 12・13. 鉄刀(2号墳)

は、稜が鋭く、脚端部に面をもつ。この2タイプは、蓋杯と同じ2時期を設定できる。

装身具としては、金環(第24図15・16)が2点、銀環(第24図13・14)が2点ある。いずれも銅芯金張りおよび銀張りである。

武器としては長頸の鉄鏃があるが、長さは残存状態が悪くわからない。

古墳時代以降の遺物の中で、須恵器・壺(第24図11)は、あまり肩が張らず、口縁端部は短く直立する。底部外面にはゲタ歯状の凹部がある。黒色土器碗(第24図12)は内面に細いヘラミガキがあり、外面には一部赤色顔料の痕跡がある。

(3) 中世土坑(第25図)

ここでは、土坑11の遺物について説明する。

青磁碗(第25図18・19) 18は、口径 15.3 cm, 器高 6.4 cm, 高台径 5.0 cm である。内外面とも無文である。19は、口径 17.1 cm, 器高 7 cm, 高台径 5.7 cm である。内面には文様帯を5分割し、幾何学的な劃花文を施している。見込みの部分には文様はない。口縁端部に5か所刻みが入る。

中世須恵器・皿(第25図17) 口径 8.9 cm, 器高 2.2 cm, 底径 4.0 cm を測る。体部内面には比較的明瞭な稜がはしる。口唇部は丸く仕上げられており、底部外面には糸切り痕がある。

漆器皿 木質部分は消失し、漆の被膜のみ残存している。製作技法としては、木皿内外面に黒漆を塗り、内面のみ赤漆を塗っている。全体的な遺存状況は良好であるが、正確な法量についてはわからない。

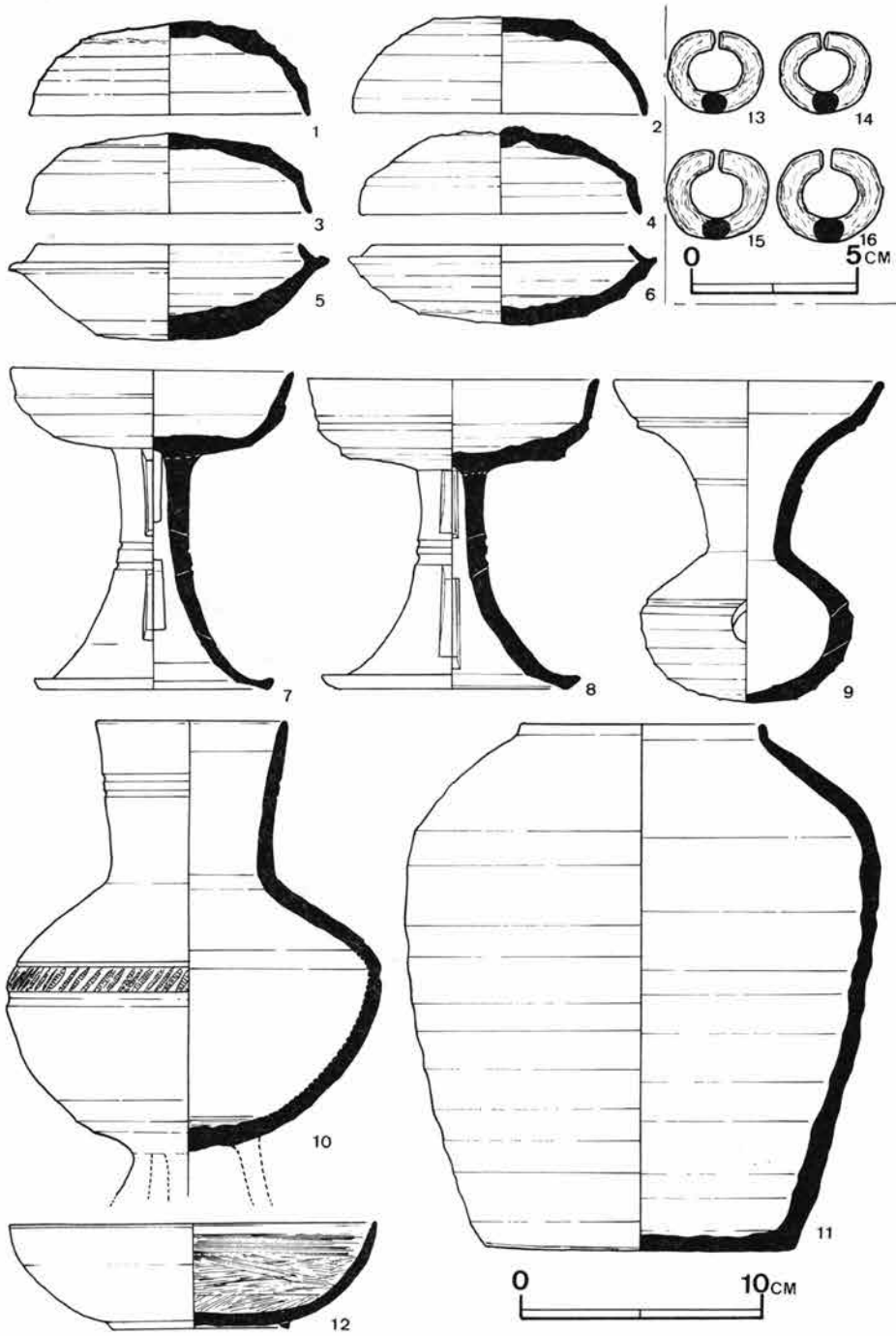
各中世土坑からは、瓦質土器、土師器、瓦器、土師質土器、鉄釘等が出土している。羽釜は、ゆるやかに内傾する体部を持ち、口縁から約1.5cm下に鏝をもつもので、山城型の要素がある。土師器・皿は、底部からゆるやかに内傾する体部と比較的丸い口唇部をもつもので、これらを総合的に考えると13世紀代の遺物として考えられる。

(4) その他

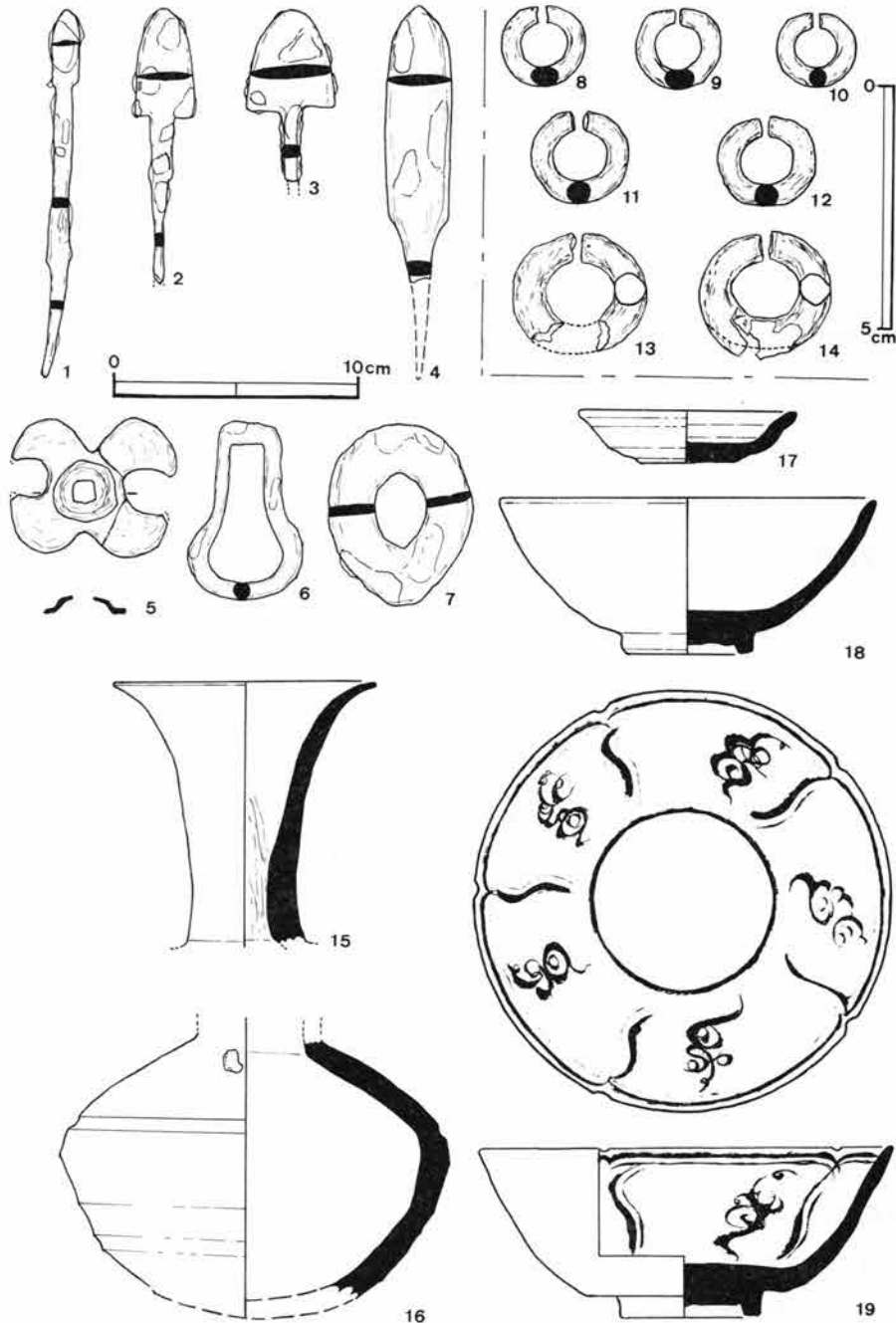
柱穴群からは、須恵器、土師器が細片ではあるが出土している。また、2号墳西側にある溝66からは、須恵器(杯・高・壺・鉢)や土師器(甕)等が出土している(第25図15・16)。遺物としては、バラエティーに富んでおり、また比較的量も多い。時期は8世紀であろう。

6. 小 結

以上、調査の概要を述べたが、現在、整理中であるため、ここでは各時代のアウトラインを記し、結びとしたい。



第24図 出土遺物実測図(2)
 1~11. 須恵器 12. 土師器 13~16. 耳環(3号墳)



第25図 出土遺物実測図(3)

1~7. 鉄製品 8~14. 耳環(2号墳) 15・16. 須恵器(溝66) 17. 中世須恵器 18・19. 青磁(土塚11)

縄文時代

遺構は検出していないが、第1トレンチ内から押型文土器と尖頭器が出土している。押型文土器は、山形文と楕円文の横位の複合施文の土器である。尖頭器はサヌカイト製で、形態的には、木葉形の尖頭器と有舌尖頭器との中間的な段階に位置付けられる。いずれも1点のみの出土であるため、明確なことはわからないが、昭和58年度調査においても、縄文時代のものと思われる石鎌が出土していることも考えあわせて、調査地付近に縄文時代の遺跡が存在する可能性が高い。

弥生時代

弥生時代の遺構は、検出し得なかった。また、遺物についても、胎土等から見て弥生土器らしき破片が数点出土しているのみである。先に説明した羽戸山遺跡に関連する遺跡の存在が予想されていたが、可能性としては、調査地より更に北西方の段丘上が有力である。

古墳時代

2号墳の築造年代は、その出土遺物、特に須恵器から、6世紀後半に位置付けられる。須恵器は、4時期のタイプに分類できる。このことから、少なくとも4回の埋葬があったと考えられる。遺物中には、特異な形態の座金具や、中空の銀環等が含まれており、被葬者を考える上で、興味深い資料となり得る。石室の石材はチャートであるが、この石材の供給源は、調査地より南方約3 kmに位置する白川周辺である可能性が高い。

3号墳は、6世紀末に築造された古墳である。出土須恵器の観察から、2時期設定できる。また、羨道部から出土した須恵器壺は蔵骨器と考えられ、10世紀代にも古墳を再利用していたことがうかがえる。調査地周辺は、後期古墳の分布が希薄な地域であったが、3号墳の例に見るように、早くからの開発によって破壊された古墳が存在する可能性が考えられ、宇治市域の後期古墳を考える上で、良好な資料を提出したと言えよう。なお、3号墳の石室は、宇治市教育委員会の意向により、宇治市文化センター内に移築保存されている。

奈良時代

奈良時代の遺構としては、柱穴群がある。これらの柱穴群は、建物として認識し得ないが、昭和58年度調査で検出した建物跡と何らかの関係があるのかもしれない。また、調査地内から、隼上り瓦窯で焼成された瓦や、大鳳寺跡に関連する斜格子及び縄目の叩きを持つ平瓦が出土している。特に後者については、後述する中世墓も関連して、調査地が大鳳寺と密接なつながりを持っていたことをうかがわせる資料である。

鎌倉時代

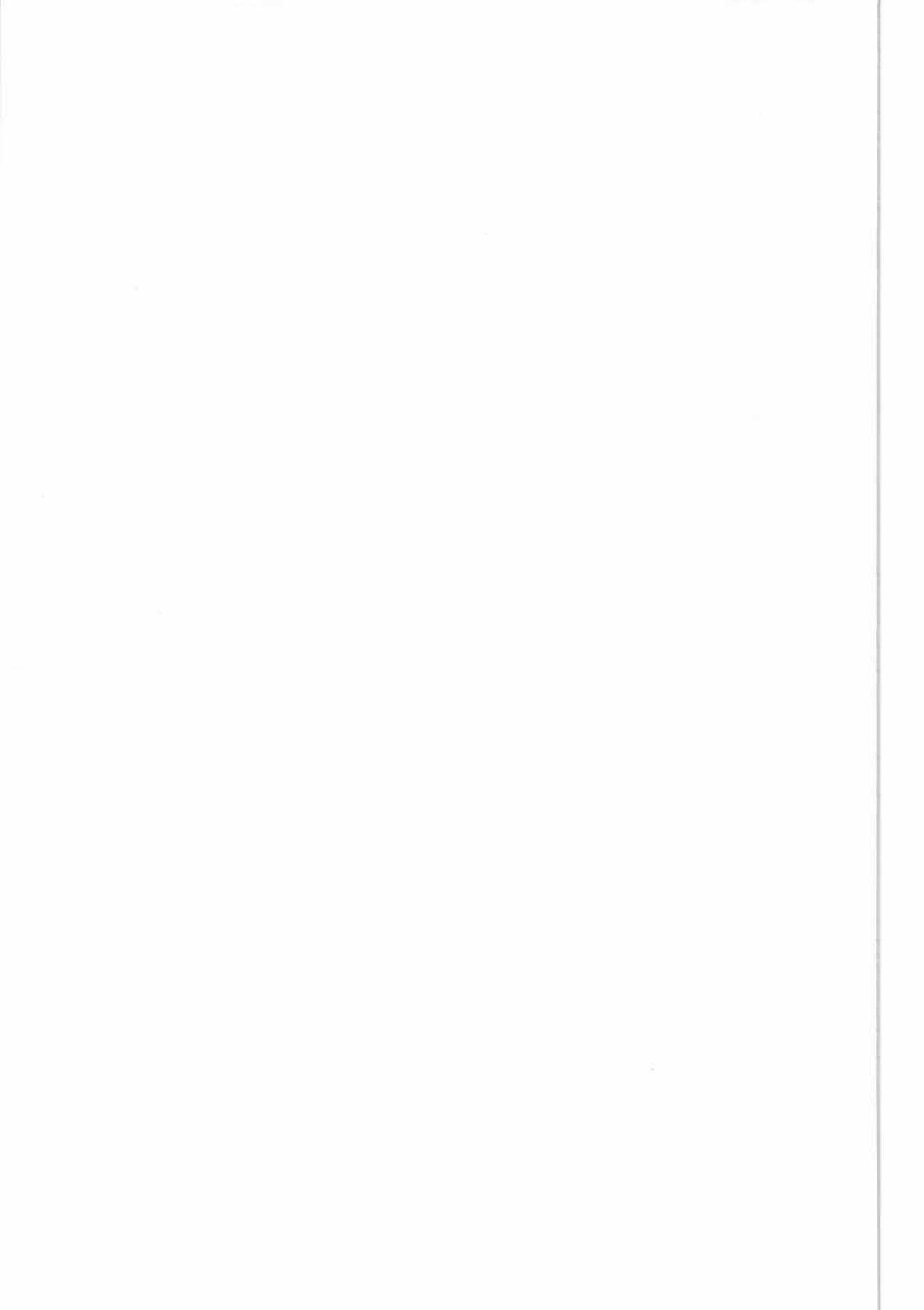
鎌倉時代の遺構は、土塚が主となる。土塚63・64の遺物から、一連の土塚群を13世紀に比定できる。土塚11から出土した青磁碗は、森田 勉^(注5)氏の編年的研究や、内面の劃花文がかなり幾何学化している事などから、13世紀に比定できる。中世須恵器は、いわゆる神出古窯跡群や魚住古窯跡群に代表される東播系のものである。青磁碗よりやや新しくなることも考えられるが、13世紀の範疇にはいるものであろう。

土塚11の被葬者について、憶測の域を出ないが一説を提起してみたい。調査地南方700mの地点には、白鳳時代創建の大鳳寺跡がある。大鳳寺4次調査では、創建時の溝がみつきり、また、5次調査では瓦積基壇の調査を行い、規模等が推定されるに至っている。しかし、廃絶時期を決定付ける資料が検出されていない。ただ、13世紀に比定できる資料が確認されており、寺院の規模を縮小して存続していたと仮定すれば、土塚11の被葬者を寺院と関連のあった人物と推定できる。青磁碗を副葬している事実からも、傍証できるのではないだろうか。

江戸時代

昭和58年度調査で検出した遺構と同時期のものは検出できなかったが、遺物の中には、18世紀に比定できる資料を確認している。 (小池 寛・荒川 史)

- 注1 高橋孝次郎・藤本雅之・森田浩史・井川朋之・田中祥介・金子慶太・村田嘉弘・中井精一・北埜善史・石田真一・清松和夫・梅本昌二・植木富美夫・吉田茂典・菊田成生・藤原ひとみ・植西洋嗣・西岡龍也・大西敏宏・猿向敏一・鈴木静恵・埴岡美矢・鈴木加代子・寺升初代・久世美智子・小山裕美(敬称略・順不同)
- 注2 辻本和美ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1982-2) 京都府教育委員会) 1981
- 注3 伊野近富ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注4 西岡成郎氏の御教示による。
- 注5 森田 勉「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」(『貿易陶磁研究』No.1 日本貿易陶磁研究会) 1981



4. 燈籠寺遺跡第2次発掘調査概要

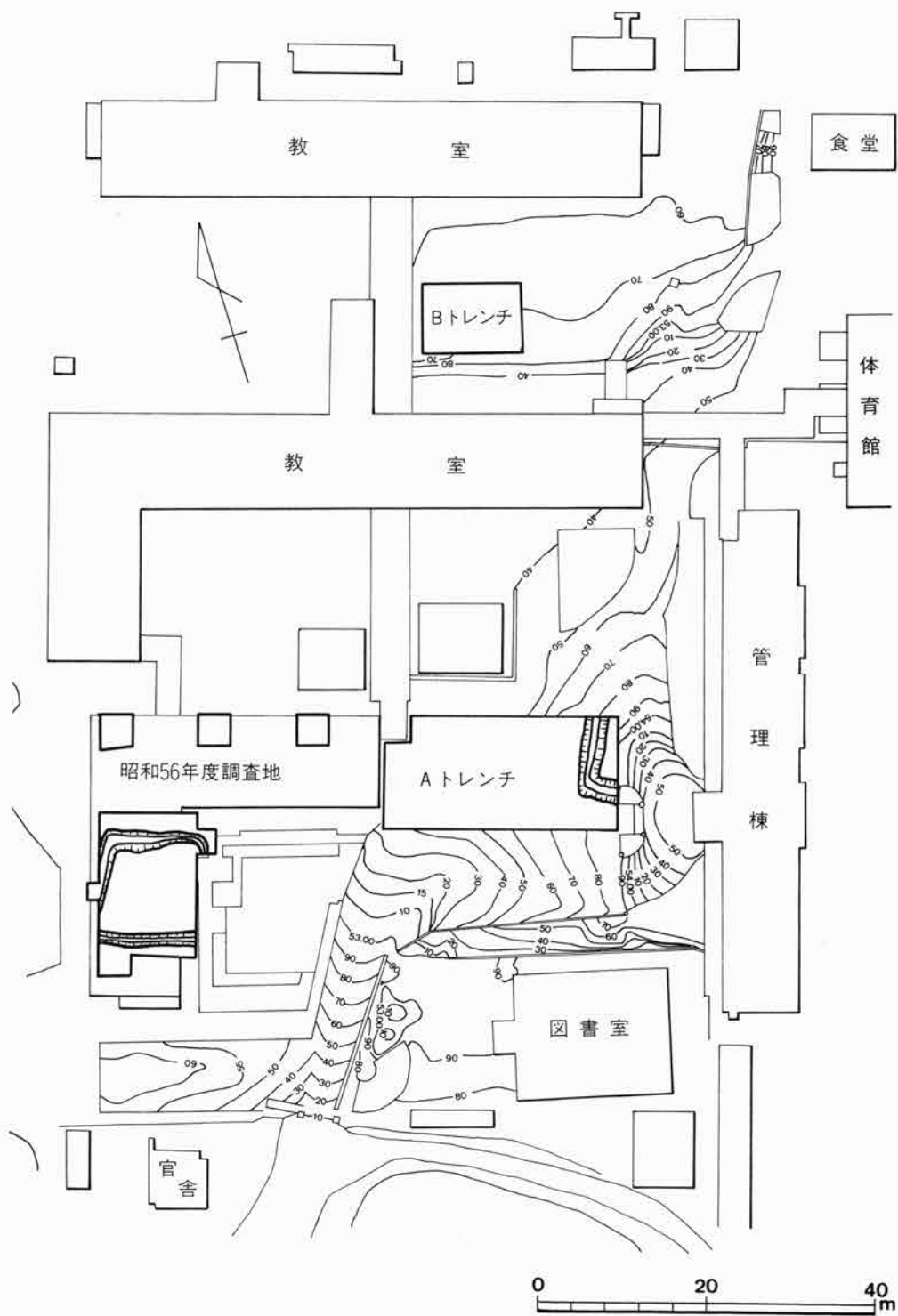
1. はじめに

今回の調査地は、京都府相楽郡木津町大字燈籠寺小字内田山に属する。すなわち、日本国有鉄道関西本線・奈良線「木津」駅の北東方約700mの、城山から真北にび延た標高50～60mの丘陵の先端部より南方へ約350mの範囲内の丘陵台地上の、校舎が林立する京都府立木津高等学校敷地内である(第26図)。北側は木津川に臨み南山城地方を一望におさめ、南側は平城山へと続く、古代以来の交通の要所であり、歴史上大きなウエイトを有したことは、上津遺跡を始めとした周辺諸遺跡が如実に物語っている。

昭和33年(1958)に同校農場造成工事が丘陵北端部一帯で実施された。その際、弥生時代前期・後期の土器、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪、奈良時代の須恵器・土師器・土馬、中世の土師器・瓦器・中国製青白磁・石鍋などが出土し、この地が弥生・古墳・奈良時代を経て中世に至る複合遺跡であることが判明した。よって字名をもって「燈籠寺遺跡」として『京都府遺跡地図』に登録された。昭和56年度に至って、校舎の増改築工事が行われることになり、同年9月3日から約3週間を費やして事前に試掘・発掘調査が施行された(第1次調査)。その結果、削平を被った、方墳を区画した周濠に比定されている周溝が確認されると共に、周溝内より円筒埴輪・朝顔形埴輪・切妻造家形埴輪・囀形埴輪など古墳関係遺物のほかに奈良時代の須恵器・土馬などが多量に出土した(以下、本墳を「内田山A-2」^(註1))



第26図 調査地位置図(1/25,000)



第27図 トレンチ配置図

号墳」^(注2)と呼称する)。

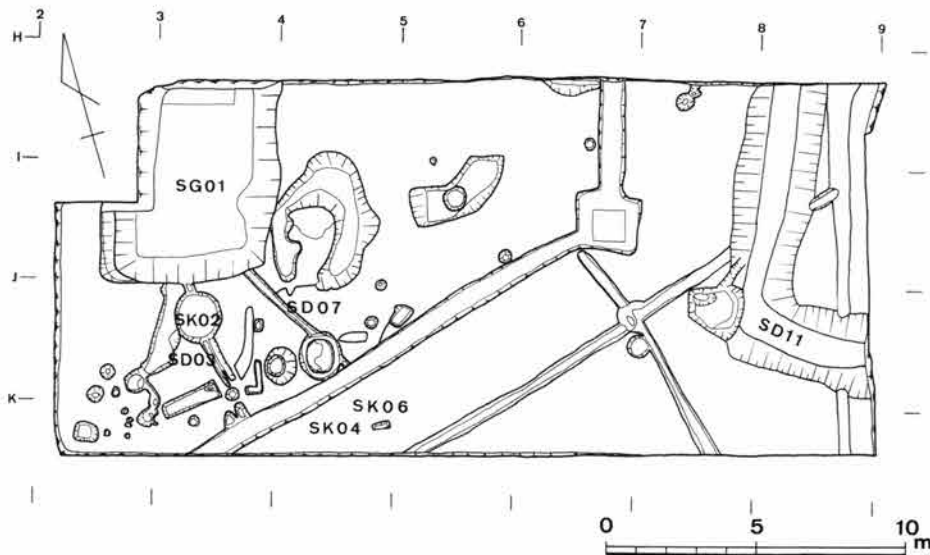
今回の調査対象地は、昭和56年度に建造された東西新棟の東方への延長校舎建設予定地(正門から管理棟に通ずる道路及び植込み庭園があり、南北方向は平坦で東西方向は東高西低の地勢である)、及び約55m北側の浄化槽建設予定地(北端東西棟と中央東西棟との空間地)である(第27図、図版第15)。

既述した遺跡の発見契機や状況ないし昭和56年度調査結果などから鑑みて、諸建造物建設予定地内にも燈籠寺遺跡ないし内田山古墳群A支群に関連する諸遺構・諸遺物が検出される可能性が十二分に推測されたため、事前に発掘・調査して記録保存することになった。なお中央東西棟と東西新棟(建設予定分を含めた南側東西棟を指す)とを連結する渡り廊下部分に関しては、工事掘削の内容を考慮して立合調査の対象とした。

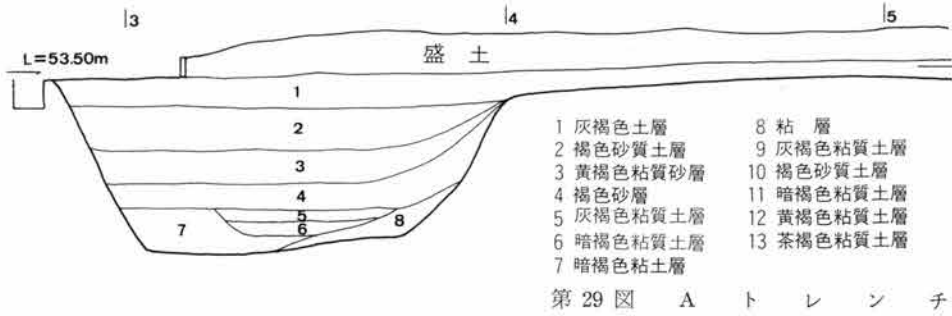
発掘調査は、昭和59年8月1日より同年10月30日までの3か月間にわたった。実施した発掘対象地内での調査面積は3か所総合計で581m²である。調査は、当調査研究センターが主体となり、当センター調査課主任調査員松井忠春・同調査員小山雅人・戸原和人が担当し、多くの補助員・整理員^(注3)の援助を受けた。とりわけ京都府立木津高等学校からは絶大なる支援を賜った。またその他の関係諸機関からも種々協力して頂いた。この場をかりて厚くお礼申し上げる次第である。
(松井忠春)

2. 調査経過

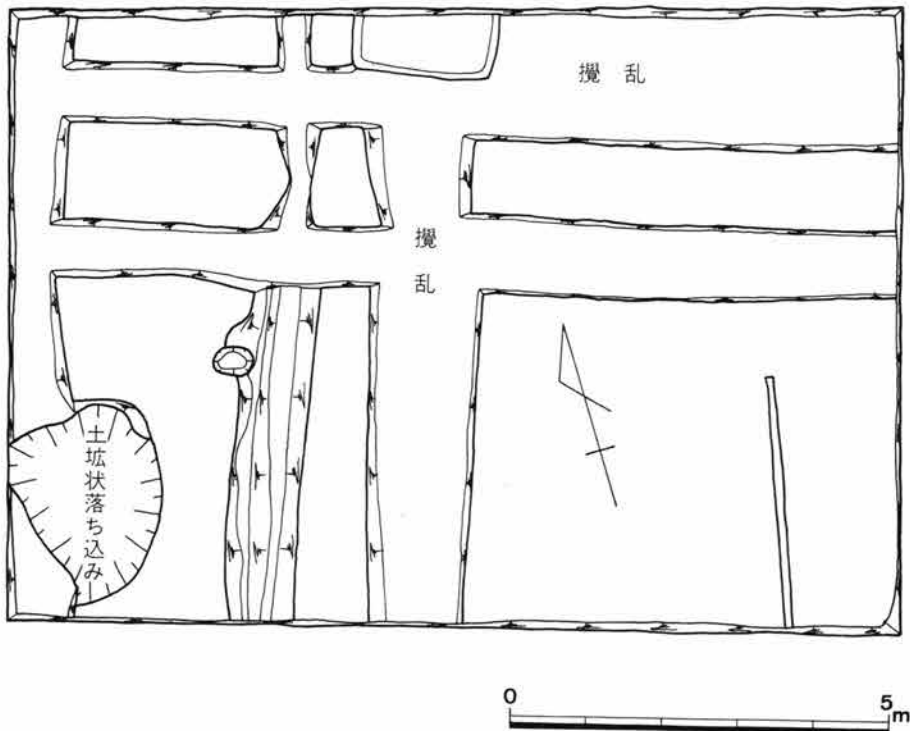
8月1日より現地入りし、着手準備のため、高等学校との打ち合わせを行った。夏期休

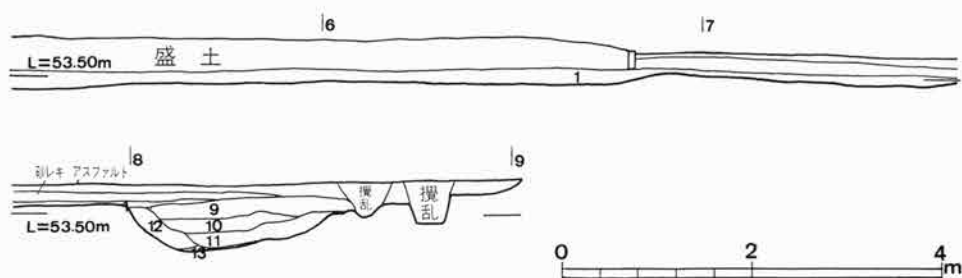


第28図 Aトレンチ平面実測図



暇中であっても農業課やクラブ活動のための生徒の出入りが多く、調査トレンチには安全対策のためのフェンスを設ける事、また、調査トレンチで車両の通行が妨げられるため迂回路を設ける事などを取り決めた。調査はまず、敷地内を被っているアスファルト面を取り除くことから始め、重機によって遺構面中での掘削をおこなった後、人力による精査に入った(Aトレンチ)。調査地は、幾度となく削平を受けており、顕著な遺構を確認することは困難かと思われたが、調査地北東部地域には遺物を包含する層が残存しており、部分的には遺構面が保存されていることが判明した。精査によって、地表から比較的深く掘り込





土 層 図

まれている溝や土坑が検出されたが、その多くは近世以降に掘られた性格不明のものであった。比較的良好に保存されていた池状の遺構と、古墳の周溝状遺構について詳細な調査を行い、古墳周溝遺構についての数多くの成果を収めることができた。また、Aトレンチ調査中の段階で調査区が追加され、「Bトレンチ」と命名し、継続して調査を実施した。Bトレンチでは明瞭な遺構面が残っておらず、校舎造成の折りに削平されたものと判断し、測量ののち、9月29日に調査は終了した。Aトレンチでの調査は、10月30日まで引き続き行うとともに、一部並行して廊下部分を含む立会調査を実施した。(戸原和人)

3. 検出遺構

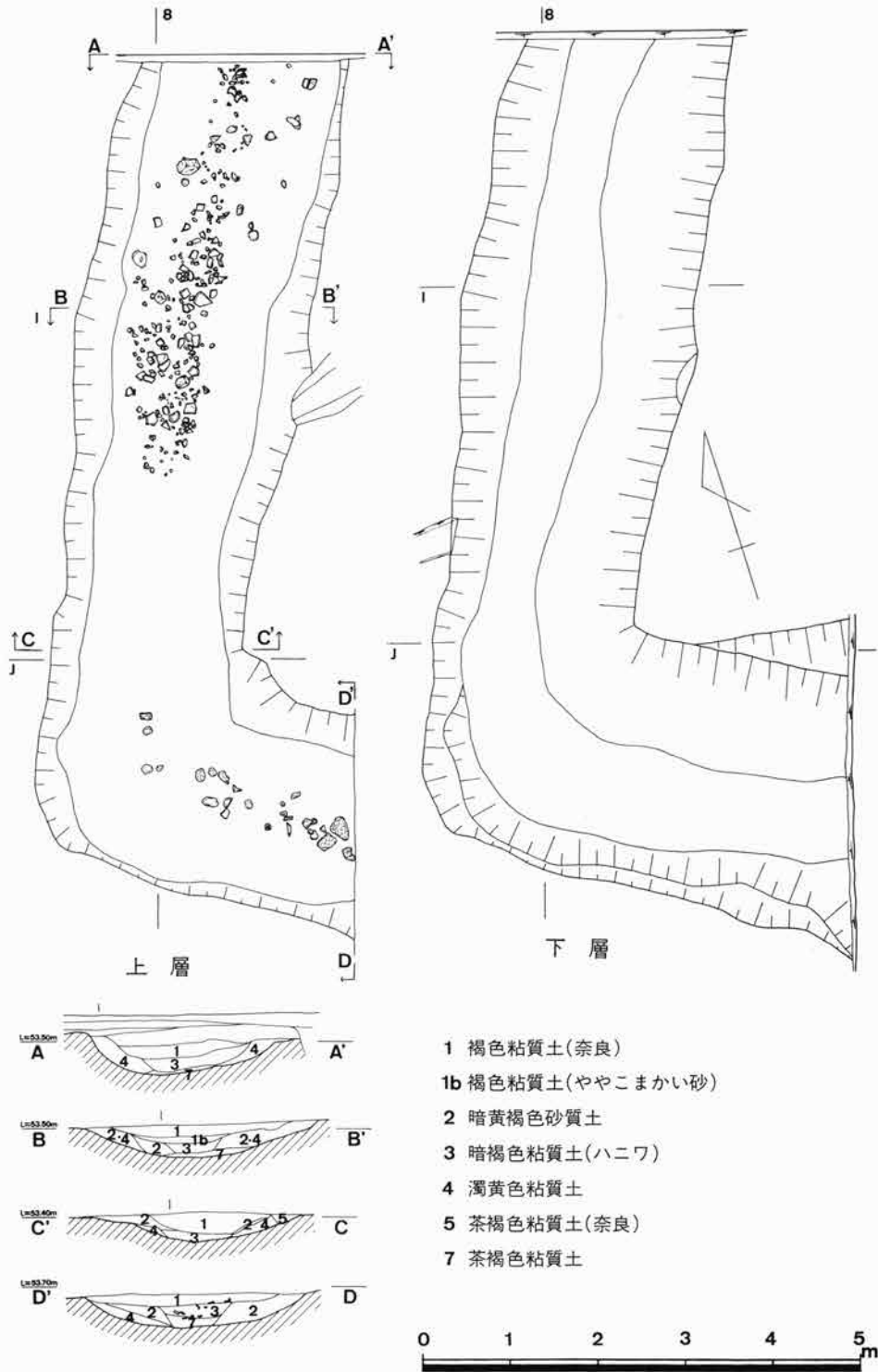
(1) SD11 (第31～33図, 図版16～21)

Aトレンチ東端部で検出したこの溝は、L字状に屈曲した平面形を呈している。トレンチの北壁と東壁で各々調査範囲外へ延びているが、トレンチ内で南北8.1m、東西3.6mを測る。南北方向部分では磁北に対して約9度東へ振れており、これと東西方向部分との成す角度は約93度であり、軸を北に向け、ほぼ直角に屈曲する溝といえる。

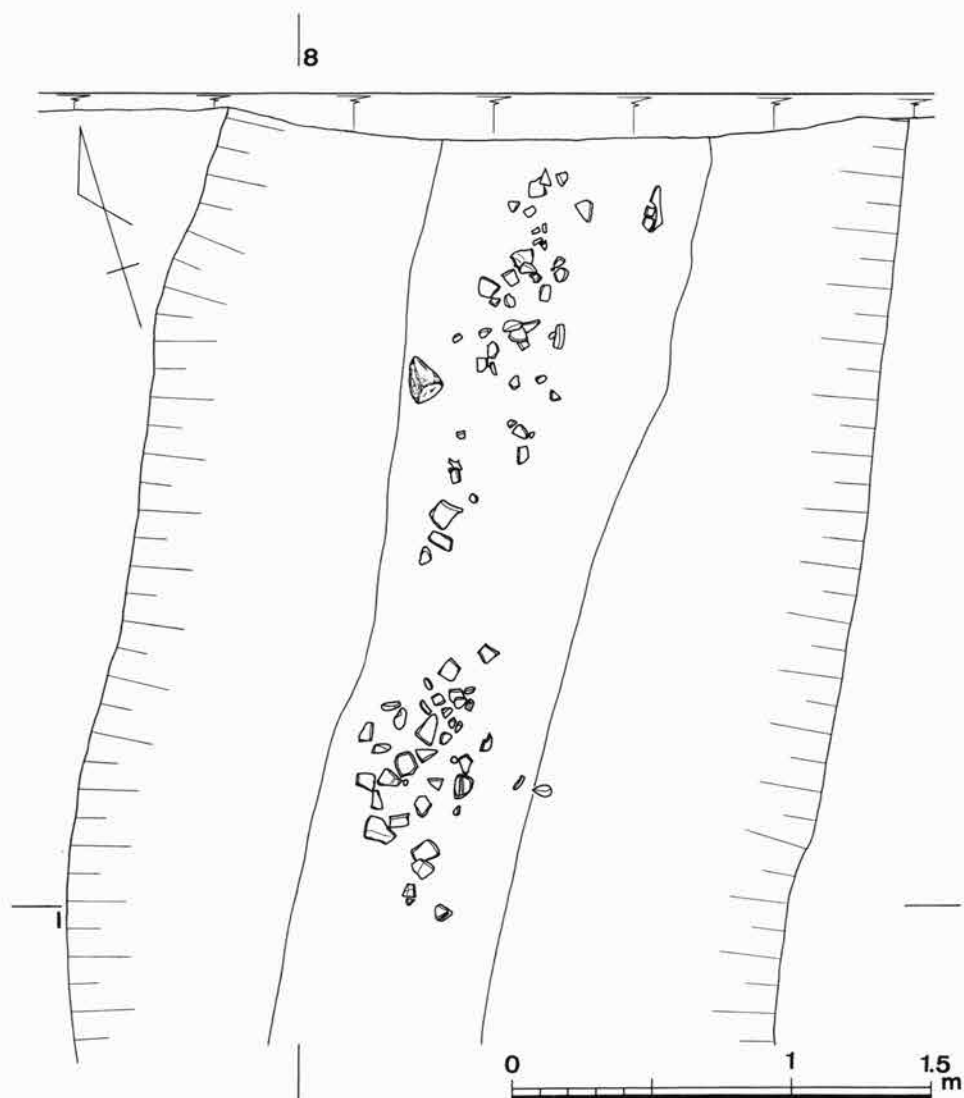
北端部では幅2.4m、深さ54cm、Iライン上で幅27cm、深さ36cm、東端部で幅2.5m、深さ38cmを測る。

このSD11の覆土は4層に分けられるが、遺物を伴うのは第1層(上層)と第3層(下層)である。

第1層は褐色砂質土で、最深部15～30cmの厚さを測るレンズ状の堆積層である。この層は、検出した限りの溝の全長にわたって認められるが、Iラインを中心とする南北3m、東西1.1mの範囲には、この層の下面(L=53.34m)直上に甕・壺・杯等の須恵器、甕・杯等の土師器、土馬片の散乱が見られた。その北東部では少量の埴輪片が出土している(第31・32図, 図版第16-2, 同17・18)。また屈曲部より東においては、20数個の河原石(径5～30cm)と共に少量の土師器の甕の破片が散乱していた。SD11上層遺構と称す。



第 31 図 SD11 平面実測図及び土層断面図



第32図 埴輪出土状況 (SD11 北半)

第2層は暗黄褐色砂質土であるが、これはJラインの東肩付近にのみ見られる層である。

第3層は第1層の直下にある暗褐色粘質土層で、幅80~120cm、厚さの10~25cmを測る。この層では、Iライン以北で円筒埴輪や家形埴輪の破片が出土し(第32図)、一方屈曲部以東では円筒埴輪と共に家形埴輪片がまとめて出土した(第33図、図版第20)。この第3層は埴輪以外の遺物を全く含まない層で、SD11 下層と呼ぶ。

第4層は第3層の下層両脇の層で、埴輪が落ち込む前に溝の両肩を埋めた濁った黄色粘質土である。地山は黄色粘質土である。

(小山雅人)



第33図 埴輪出土状況 (SD11 南辺)

(2) SG01 とその関連遺構(第28・29図, 図版第22)

Aトレンチ西半部で検出した池状の遺構である。東南角を確認したが、北及び西側は調査トレンチ外まで広がり、その規模は不明である。池は2段に掘り込まれており、東側では1段である。検出した規模は東西7.2m, 南北6.2mを測る。下段で東西5.6m, 深さ1.5mを測る。埋土は7層からなる。第2層から第4層の砂層及び砂質層により埋められており、第5層から第8層の粘土層はこの池が機能している段階での堆積である。第7層より下駄及び江戸期の陶器片が出土している。

SG01と関連すると考えられる遺構としてSD03・SK02とSD07・SK06がある。SD03は幅11~32cm・深さ23~34cmを5mにわたり検出した。SK02は直径約1.6m, 深さ37cmを測る。壁面に漆喰を塗っている。SD07は幅20cm・深さ12cmを45mにわたり検出した。SK06は直径1.4~1.5m・深さ19cmを測る。外壁にそって幅23cmの溝を確認した。壁面には漆喰を塗っている。これらの溝と円形土壇はいずれもSG01に関わる施設と考えられる。すなわち、池に引き込む水路状の遺構と考えられる。(戸原和人)

4. 出土遺物

調査により出土した遺物は、弥生時代のものとして甕底部片・石庖丁, 古墳時代のもの

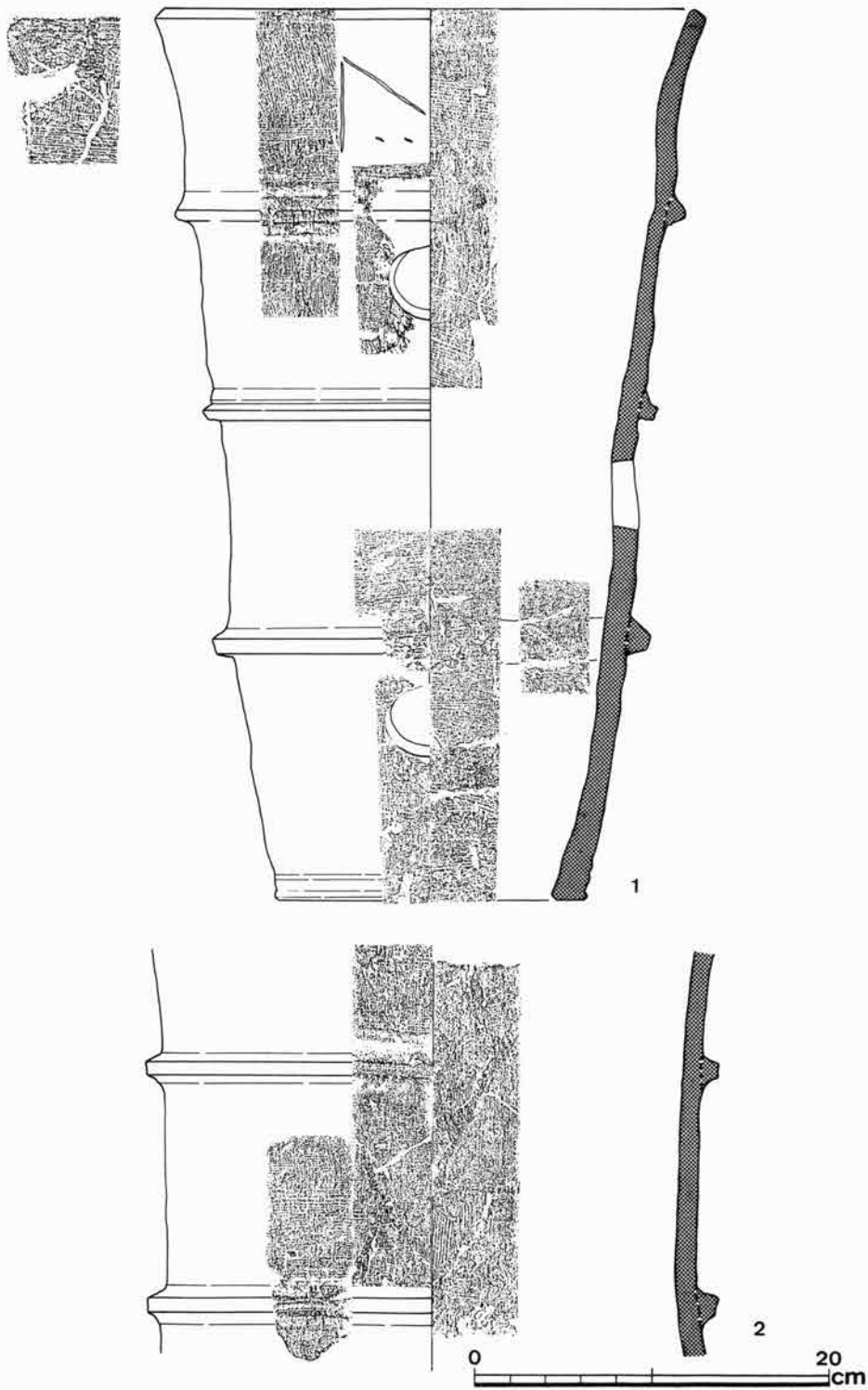
として円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・その他の形象埴輪、奈良時代のものとして土師器(杯・皿・高杯・甕)、須恵器(杯・皿・杯蓋・壺・甕)、ミニチュアカマド・土馬などの土製品などがあつた。ほかに近世の陶磁器類・木製下駄などがある。これらの遺物は、古墳時代から奈良時代にかけてのものが、主に古墳の周溝遺構 SD11 よりの出土で、その他の遺物は主に池状遺構の SG01 より出土した。これら出土遺物のうちでその形を完全に復元しうるものは少なく、大部分が破損した状態で出土したため、各々の個体数を集計するには至らなかつた。以下、出土した遺物の主なものについて、時代別に報告したい。

古墳時代に関する遺物は埴輪だけである。これらは主に古墳周溝遺構 SD11 よりの出土で、3-(1)で述べたように下層から多数出土している。種類別の個体数は明らかでないが、円筒埴輪数個体分、朝顔形埴輪 2 点以上、家形埴輪 2 個体以上、動物埴輪 1 点、不明形象埴輪数点である。

円筒埴輪(第34図、図版第23)は小破片が多く、復元しうるものは少ない。調査区が限定されており、その個体数も十分把握しえないが、いくつかの特徴を観察することができる。今回の調査により出土した円筒埴輪は、おおむね小型品と大型品の 2 種類がある。1 は、唯一口縁部から底部まで復元しえた個体であるが、全体を小片で復元したため器体のフォームが旧状を正確に復元しえたか疑問も残る。口縁部径30.5cm、器高約50cm、底部径18.0cmを測り、3本のタガにより4段に区画される。また、口縁下で円孔透し穴の上部にヘラによる線刻(図版第23-2)をもつ。タガの断面形は台形状で、口縁端部は外方に開き外傾する面をもつ。外面調整は縦ハケの後横ハケを施すが、最終調整で縦ハケを部分的に施している。内面調整は左上方への斜めのハケを断続的に用いる。基部は少し強めの横ナデを施す。タガの内面ではハケ目がナデ消される。ヘラ記号はまず縦方向に引かれた後左上から右下へ向かって引かれており、2本の線の内に2か所点描される。ハケの原体は7本/cmである。

2 は、腹径30.5cmを測り、1 に比してやや大型である。外面の調整は縦ハケの後横ハケで、横ハケを強く留めている。内面調整にはナデ、斜ハケ、横ハケなどを施している。ハケの原体は9本/cmである。この個体の特徴としては1 に比して器壁が0.9cmと薄いことがあげられる。1の底部及び2では黒斑を観察することができる。これらの円筒埴輪の時期は、川西編年Ⅲ期、5世紀前半をあてること^(注4)ができる。

家形埴輪は、図示したものの(35図)のほかに1個体以上の破片がある。それらはいずれも小破片であり、形態を復元することは現在のところ不可能であるが、3 に比していずれの破片も厚手であり作りも大きい。3 は鋸葦入母屋造りで、四注屋根の上に切妻造りの屋根を被せた形である(第35図、図版第24・25)。全体として破片の残りがよく旧状に近く復元することが出来たが、上屋根にとり付く破風や上屋根妻部の破片が確認できず、周囲に残る



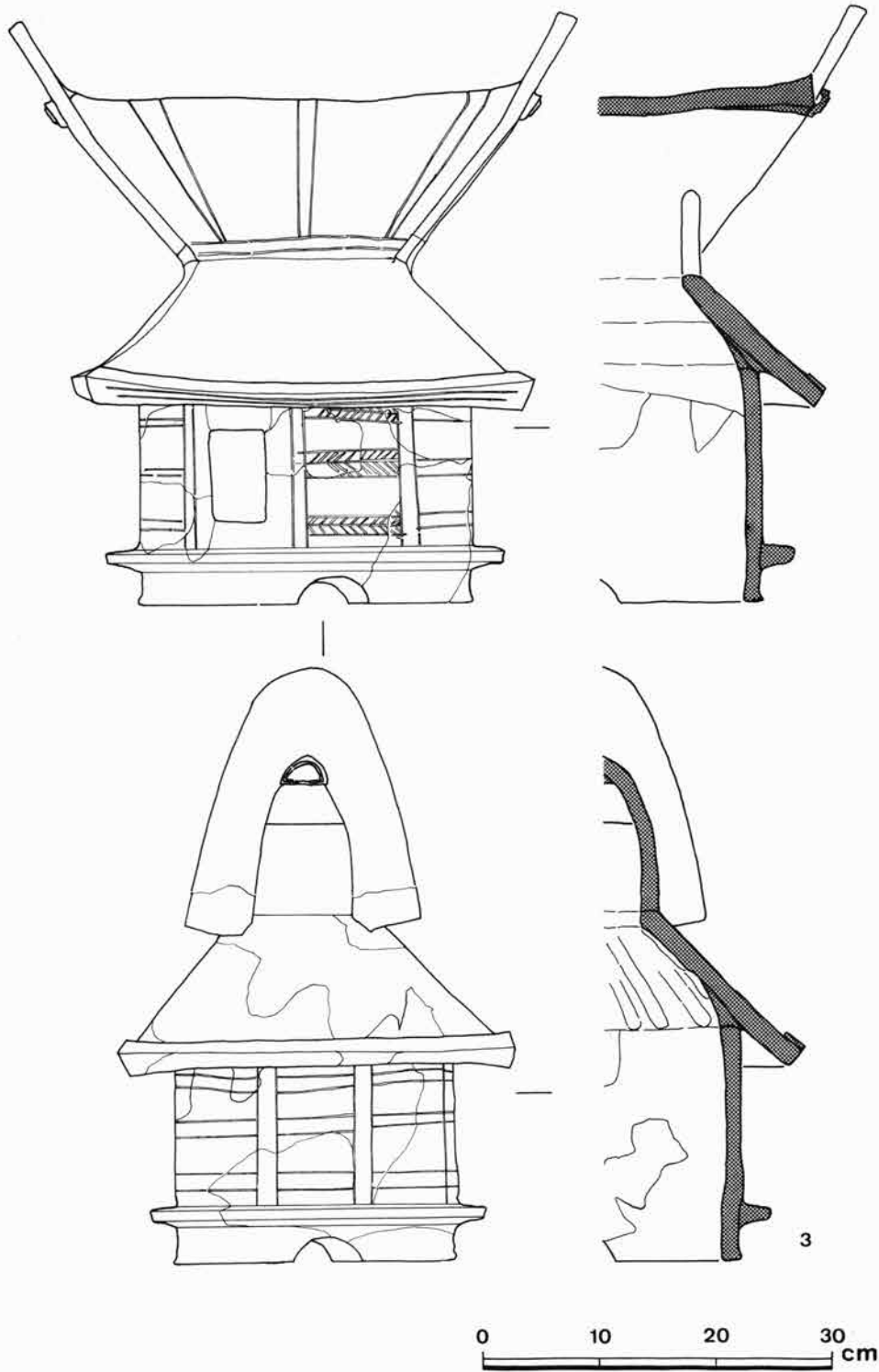
第34図 円筒埴輪実測図

貼り付け痕等により復元した。破風頂部までの高さ約50.0cm, 上屋根までの高さ45.0cm, 平の幅(破風最大幅50cm)が上屋根で43cm, 下屋の幅で40cmを測る。妻部で下屋根最大幅24.4cmを測り, 平部より狭くなる。棟正面と考えられる面は, 正面に向かって左寄りに5.0×7.8cmに扶る長方形の入口を開く。壁と柱の間はヘラ描きによる線刻で表し, 平で柱3本により中央に2間, 両側に半間を表現している。妻部では奥の隅柱と2本の間柱により, 一見3間分にみえるが1間半もしくは2間半を表していると考えられる。何故ならば, 平部中央1間分に柱心々7.8~10.0cm, 半間分に4.0~6.0cmをもちいているのに対して, 妻部では向かって右側で, 柱間7.7~8.0cm, 左側では6.5~9.5cmと, 寸法が異なるからである。壁面の平部と妻部の長さは28.6cmと24.0cmで, 平を3間とした場合2.5間分の長さとなる。この建物は3間×2.5間の平面規模をもつ平床式入母屋造りの建物を表現したものと解釈しておきたい。

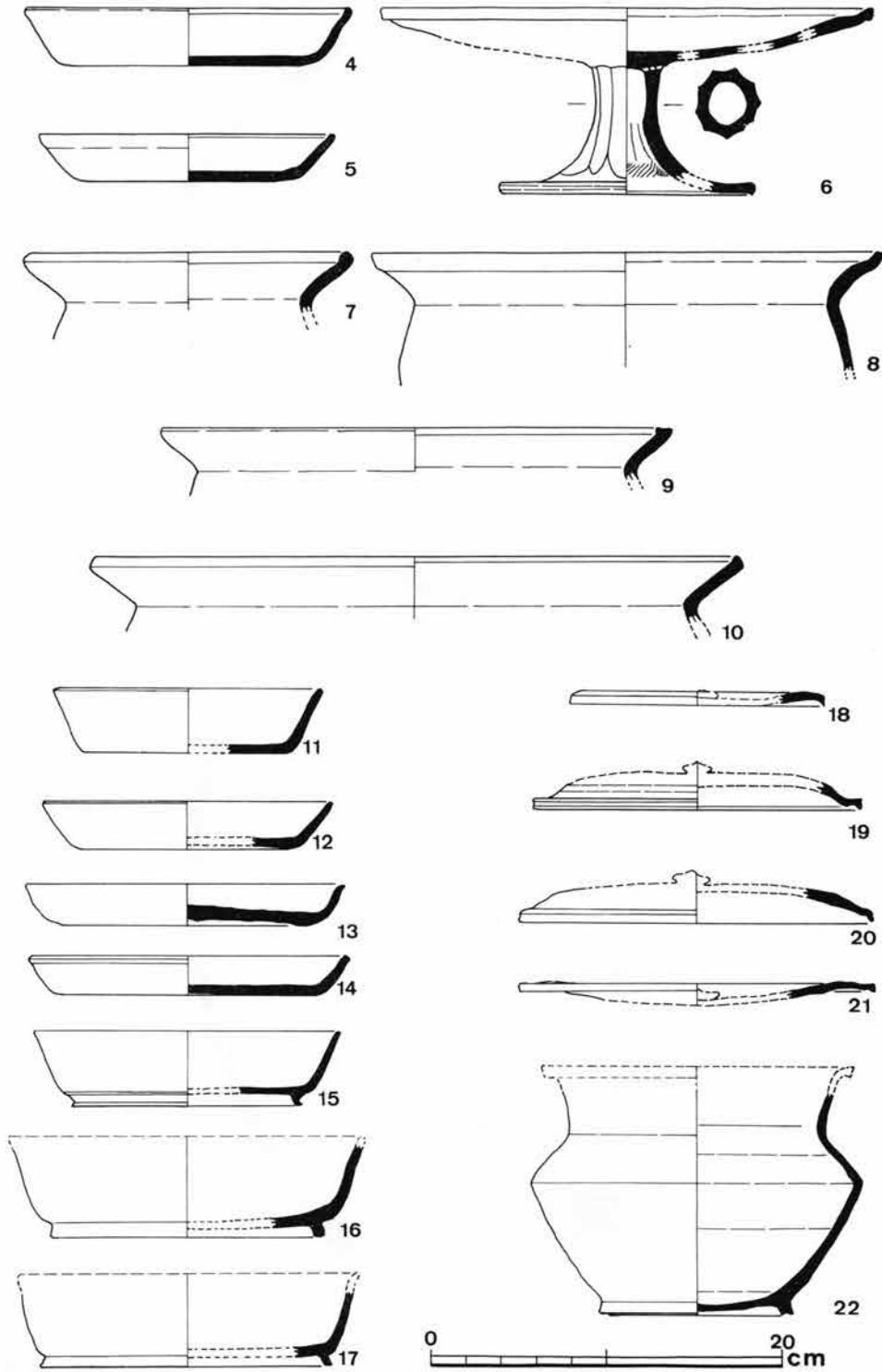
では次にこの埴輪の細部についての観察を行いたい。完形に復元できる家形埴輪の出土は全国的に稀である。以下, その製作工程に従い各部を観察すると, 一壁体の製作一壁はそれぞれ板作りで4枚製作された後, 接合して箱形にするが, 平部の2枚と妻部の2枚は粘土板を2枚重ね合わせ外形を整えた後床下にあたる半月形の透し穴を穿っている。これらは裏重ねにすると見事に重なる。各々の接合には内側で粘土の補充をして強度をもたせている。床凸帯は, 厚さ1.0cm, 長さ2~3.0cmの粘土紐を接合部に刻みを付ける事なく一気に壁体に接合している。これは壁体の補強の意味をも兼ねているものと考えられる。

一屋根の製作一大屋根は寄せ棟の形をとる。各面は極めて平滑でひずみはほとんど認められない。逆台字形の型の中で粘土をあてて製作され, 半乾燥のあと取り出されて壁体と接合させたのであろう。底部上面にはヘラにより押擦した後, 粘土紐を四隅に整形して貼り付け押縁を表現している。隅辺の下部は若干垂下し, 上部をならせており, 鍔葺き屋根を強調する結果となっている。次に上屋根の製作についてである。上屋根は下屋根との勾配が全く違っており, 接合部は刻み目と多くの粘土の補填によっている。正面では逆台形, 側面では逆U字形を呈す。その構造は複雑で, 上屋根本体, 破風, 妻板, 棟木より成っている。本体は2枚の粘土板により合せて形作り, 妻板と破風によって補強し固定している。棟木はきわめて装飾的なものであるが, 内側で上屋根の2枚の粘土板を貼り合わせる役目を果たしている。向かって右側は粘土板を曲げて作られており中空ではあるが, 左側のそれは中実で粘土塊によって手づくねで作られている。妻板は下屋根妻部と上屋根の内面を接合する。接合部はヘラにより押擦され接合効果を増している。上半部は平坦に仕上げドーム型の煙出し部を形作る。

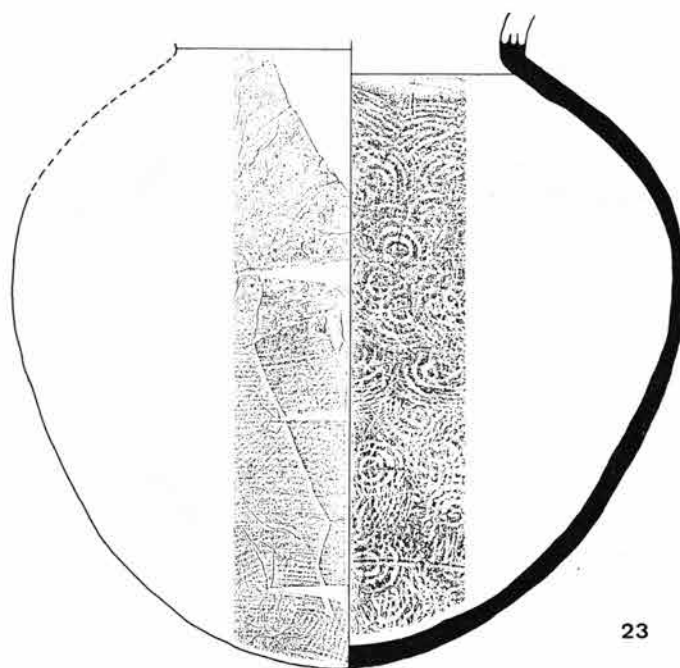
一入口及び窓の製作一家形埴輪は入口や窓を壁体に切りぬき表現する 경우가多いが, 簡



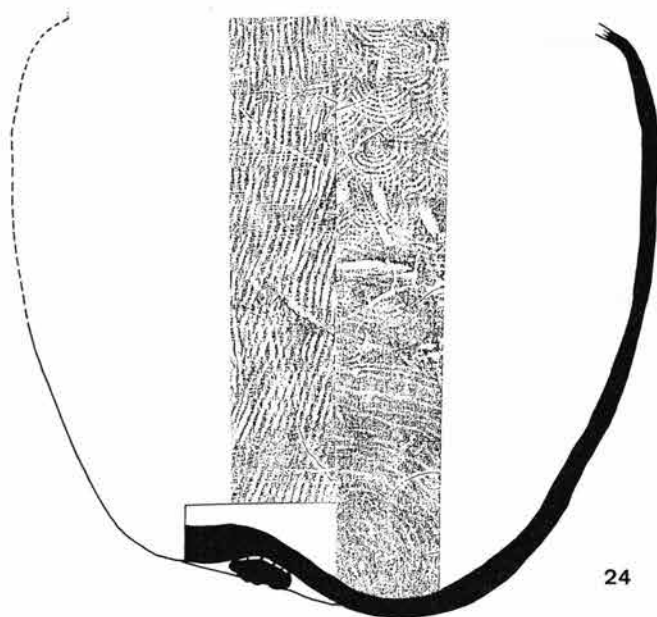
第35図 家形埴輪実測図



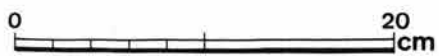
第36圖 奈良時代遺物実測図(1)



23



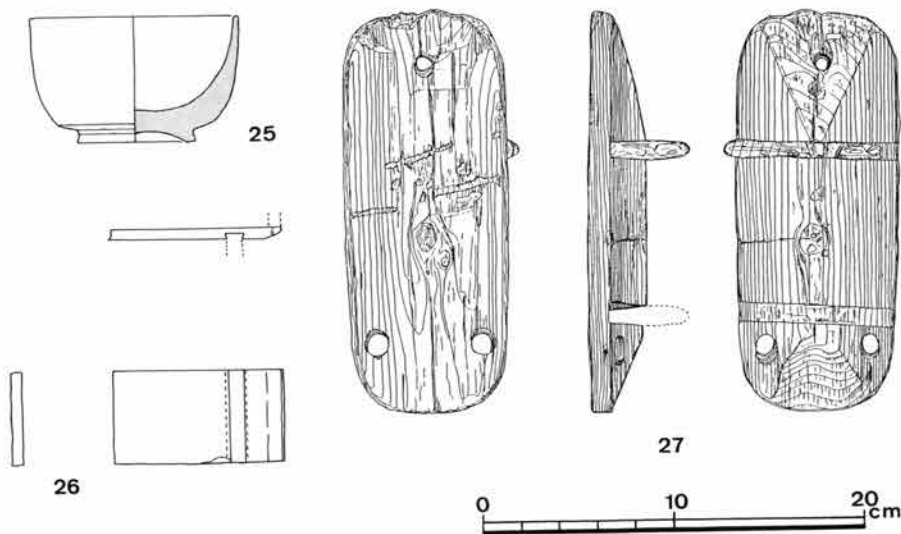
24



第 37 図 奈良時代遺物実測図(2)

略化されたり省略されるものも少なくない。本例においても簡略化が進んでいるためか、入口以外の切りぬき部は認められなかった。ただ入口部についても全体が出土していないので入口下部に凸状の削り込みを設けていたかどうかは確かでない。入口の横、平部の正面にはヘラ描きにより表現された三段からなる綾杉文が施されるが、これがあるいは雪見戸のようなものを表現したものであろうか。そのほかの部分ではヘラ描きによる柱及び横板を表現するのみである。最後に埴輪の仕上げ調整について触れておきたい。全体にハケ目による調整を施すが、何故か壁体に向かって右妻部ではハケ目をナデ消している。製作工程の上でナデ消す必要があったのか別の意味があるのか定かでない。下屋根は全くハケを使用していない。上屋根ではハケ調整のあと左上がりにはヘラミガキを部分的に施している。

奈良時代に関する遺物は土師器・須恵器がSD11上層より多く出土した(第36・37図、図版第26・27)。いずれも小片であり復元しうるものは少ない。土師器には皿A(4・5)、高杯(6)、甕(7~10)などがある。皿の外面調整はa手法による。高杯6は十角形に面取りされた短い脚部に浅く外方に開く杯部をのせる。甕は口縁のみ破片で底部まで復元しうるものはない。斜め上方に開き、端部を上方へつまみあげるもの(8)と、内側へ折り込み内面に段を作るもの(7・9・10)とがある。須恵器には、杯A(11・12)、皿A(13・14)、杯B(15・17)、蓋(18~21)、壺A(22)、甕(23~24)などがある。いずれも小片が多く復元しうるものは少ない。甕は口縁部を打ち欠いた後に投棄されたらしく、当該破片も採取できなかった。(古墳)周溝へのこのような投棄には、ある種の意味あいがあるのかもしれない。壺22も口縁部が欠損していると同様の性格を有するものであったかも知れない。そのほかの遺物として土製のミニチュアカマドや土馬などがあるが現段階では図示しえない。

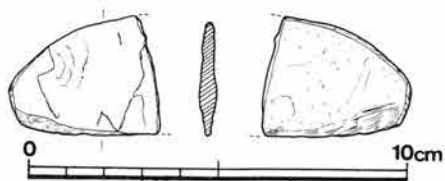


第38図 SG01 出土木製品実測図

木製品(第38図)はSG01より数点出土している。25は口径10.8cm, 器高6.6cmを測る漆器の椀である。口縁端部を欠損しており, の全体1/3程度の残存である。ロクロ引き成形で内外面を黒漆により仕上げている。剥落が著しく紋様等が書かれていたのかどうかは不明である。26は縦5.0cm, 横8.8cm, 厚さ0.6cmを測る。上下両面に漆を施すが, 側面及びホゾ部は漆を欠く。これはほかの部材との接合部であり, それが剥離したためである。右側下部は丸く削り, 下から上に向けて竹材と思われる目釘を打ち込んでいる。ホゾは蟻ホゾで, 接合時の接着効果をより高めている。縦横3辺は欠落しており, 全体を窺うことはできないが, 膳のような製品の一部と考えられる。27は長さ20cm, 横8.5cm, 高さ3.0cmを測る。紐穴は下駄中央部にあき, 歯はさし歯である女性用の下駄で, 右足にはいたものと考えられる。

石製品としては, 包含層中より磨製石庖丁が出土している(第39図)。本品は破損しており, 窺う事ができないが, 残存長3.9cm, 幅2.2cm, 厚さ3.45mmを測る。材質は粘板岩で, 形態は直刃型と考えられる。板状に剥離した自然面を残し, 背及び刃部を研ぎ出して形成している。使用したかどうかは観察できない。当遺跡では弥生時代前期後期の土器を出土しており, その時代に関わる遺物と考えられる。

(戸原和人)



第39図 磨製石庖丁実測図

5. ま と め

今回の調査で検出された諸遺構中, 注目すべきはSD11であろう。ここではこのL字形を呈するSD11の性格などについて検討することにした。

SD11は, 調査地範囲内にあつては明確に平面上L字形を呈するが, 北・東方の両側にさらに延伸することは既述したとおりであり, その意味では今後の調査にまつべき所であつて, 実際上はL字形をなすとは断言できない。とすれば平面上はL字形に収拾するか, あるいは方形ないしカスガイ形となるかの2通りのケースしか考えられなくなる。さらに立体的に観た場合でも, 断面U字形の溝にすぎない。そこで検出範囲内での遺構のみでは判断し難いため, 溝内出土の遺物をも通じて考えてみたい。溝内の上層からは奈良時代の遺物が出土し, 下層からは埴輪のみが出土した。当然にこの溝は下層段階における構築物として把えるべきであり, そこに古墳時代の埴輪を包含した溝としての姿が浮上ってくる。このような遺構・遺物を反映した遺跡としては, 埴輪窯跡, 埴輪工房跡と古墳が列挙されよう。まず最初に埴輪窯跡の場合は, 窯体あるいは窯体片, 灰原, 未完成であるがために破棄さ

れた埴輪片などが存しなければならないが、これらの痕跡は調査地内にあっては全く確認されていない。次に埴輪工房跡に比定した場合、埴輪窯跡と相関関係にある遺構でもあるが、完成埴輪、未完成埴輪、製作途上の埴輪、埴輪保管用倉庫や埴輪工人の住居跡などが伴うべきものであるが、これらとてまったく検出されていない。とすればおのずと第3番目の古墳を取りまく周濠の可能性が頗る高くなる。古墳には墳丘と墓域とを画するための周濠を廻らすことは普遍的である。この場合、L字形を呈し、さらに北・東方への延伸が推測されるのであるから、L字形から鑑みて、方墳が大きく削平されて生じた墳丘部及び周溝の残欠部に相当し、その南西隅の西辺と南辺の一部が発掘されたことを意味するのではなかろうか。これを裏付けるかのように、出土した埴輪が上方から明確に転落したかの出土状況を示すと共に、ほぼ完形に近い形で復元もできる。さらに上記2項が否定されることも、より傍証していると言えよう。それではSD11が即方墳の周濠の残欠と推察して正鵠を射ているかと言うといまだ解決されていない事項が存する。それは方墳であるか方形周溝墓であるかの問題である。方墳すなわち古墳である以上、高塚であることが第一の条件であるが、奇しくも上部は既に大規模に削平を受け消失してしまった現況では、何ら類推し難い。また周溝内に流入した土砂が恐らくはその一部が墳丘からのそれであったとしても前面的に認証し得るものではない。その一方、方形周溝墓としての仮説が成立するかとの課題に対しては、平面構成上は認定しえても、全面発掘調査でない以上、何らの根拠にも乏しいが、前回の調査で検出されたA-2号墳の場合本例と同一状況下にあるにもかかわらず埋葬主体部がなかった点から、主体部自体が現遺構検出面よりかなり高位に構築されていたとしか考えられず、これらの推測から方形周溝墓より古墳＝方墳と推量して大過なからう。それは地理的位置や家形埴輪が出土していることからも肯首される。それを(注5)もってA-3号墳と呼称する。

次にこのA-3号墳の築造年代についてであるが、(4)円筒埴輪の項で述べたように出土円筒埴輪が川西編年のⅢ期すなわち5世紀前半に比定される。しかし、僅少ではあるが動物埴輪片も含まれる点や、さらに方墳の周濠のごく一部の調査に止まっており、全体把握できずに今後につまづき課題ではある点を考慮した場合、一応5世紀前半より若干時期的に下る可能性も示唆できるのであって、ここでは慎重を期して5世紀前半～5世紀第2四半期頃に比定しておきたい。

このA-3号墳が5世紀前半～同第2四半期の築造だとすれば、すでに報告されたA-2号墳が円筒埴輪からみて5世紀前半に比定され、先年消失したA-1号墳は正式な調査が実施されていないが、採集遺物から5世紀末～6世紀初と推定できる。すなわち内田山古墳群A支群は、A-2号墳→A-3号墳→A-1号墳の順で営造されたことになる。とすれば、

A-3号墳→A-1号墳間が年代的に若干幅広くなり、あるいはこの中間時に築造された古墳が本調査地に隣接して存在する可能性も四捨できないであろう。(松井忠春)

6. おわりに

今回の調査で検出した古墳の周溝SD11は、A-2号墳とおおむね同時期ないし若干後出の古墳と考えることができ、恐らく一辺14m前後の方墳ではないかと推測する。立地としては、第27図でわかるように東から西に向かって伸びる丘陵の小さな稜部に営まれた事がうかがえる。また、上層で検出した奈良時代の遺物は、北方300mに所在する上津遺跡が営まれる時期に相当し、更に東方200mの釜ヶ谷遺跡でも同時期の土馬・須恵器・瓦が出土している。当地方が平城京の北にあって、その外港としての中心的な役割を果たした舞台を見下ろす絶好の地にあることを指摘して今後の研究の一視点としたい。(戸原和人)

注1 大槻真純「内田山古墳発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

平良泰久「考古編」(『木津町史—史料編—』木津町) 1984

注2 内田山古墳として報告されているが、すでに本地点より南方250mの丘陵西端部で確認された古墳も「内田山古墳」と命名されていた(長谷川達「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-1 京都府教育委員会) 1981ため、同一古墳と誤解される事態が生じた。そこで本報告では『木津町史—史料篇1—』(木津町, 1984)の遺跡名称を採用することとした。

注3 牛見敏子・木下年史・滋井雅章・中野邦江・中塚 等・古谷敏樹・前田 寛・宮本純二(敬称略)

注4 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号, 日本考古学協会) 1978

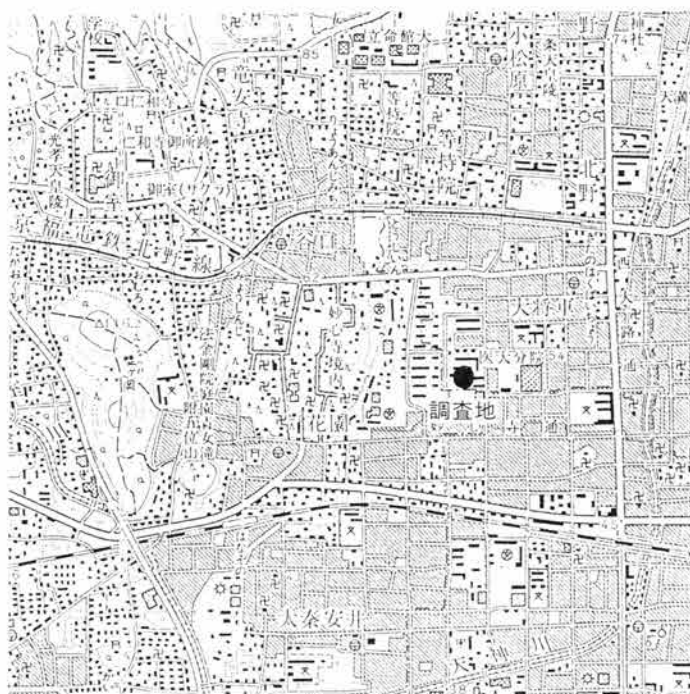
注5 野上丈助「埴輪生産をめぐる諸問題」(『考古学雑誌』第61巻第3号, 日本考古学協会) 1976

5. 平安京跡右京一条三坊九町 昭和59年度発掘調査概要

1. はじめに

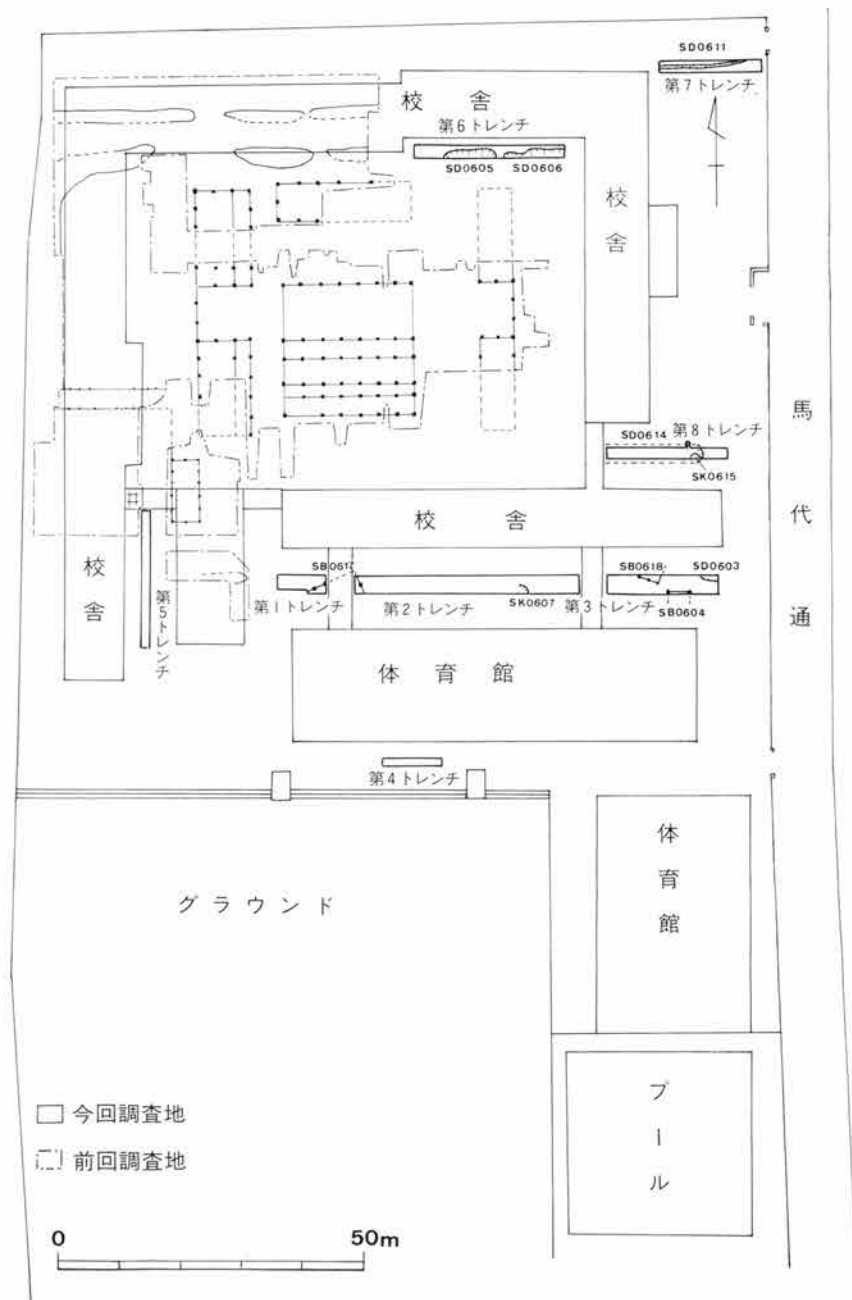
京都府教育委員会では、京都市北区大將軍坂田町にある京都府立山城高等学校内の下水道整備工事を計画した。当該地が、平安京跡の右京一条三坊に当たるとともに、古墳時代から奈良時代の集落遺跡である花園遺跡の範囲に含まれることから、事前の発掘調査を当調査研究センターに依頼した。今回発掘調査を実施した京都府立山城高等学校は、平安京跡の右京一条三坊九町・十町に位置している。昭和54年校舎改築工事に伴う発掘調査で、九町の宅地に当る場所から、平安時代初期の左右対称の大規模な建物群を検出した。また、翌昭和55年にも発掘調査が行われ、九町の宅地では、先の大規模な建物群に付属する建物跡・井戸・溝等のさまざまな遺構を検出し、十町の宅地では、池跡やそれを埋めて建てられた多数の掘立柱建物跡を検出した。これら両年にわたる調査の結果、九町の宅地に当る山城高等学校敷地の北半部には、正殿・後殿及び東西2棟ずつの脇殿からなる建物跡を中心に、1

町規模の屋敷地が存在したことが判明した。その中心建物群は、現状保存され、その後京都府の史跡に指定されている。なお、これらの調査では、平安時代の各遺構のほか、古墳時代の竪穴式住居跡や奈良時代の掘立柱建物跡も確認されている。また、京都府立山城高等学校の隣接地では、昭和49年・50年に日本住宅公団



第40図 調査地位置図 (1:25,000)

花園鷹司団地建設工事に伴う発掘調査が行われ、土御門大路・木辻大路等の道路側溝や正殿・脇殿・後殿からなる大規模な建物群が検出されたほか、古墳時代の竪穴式住居跡等も^(注4)確認されている。このように、この地一帯では、平安時代前期の大規模な邸宅跡や、古墳



第41図 調査地平面図

時代から奈良時代にかけての各種の遺構が検出されている。

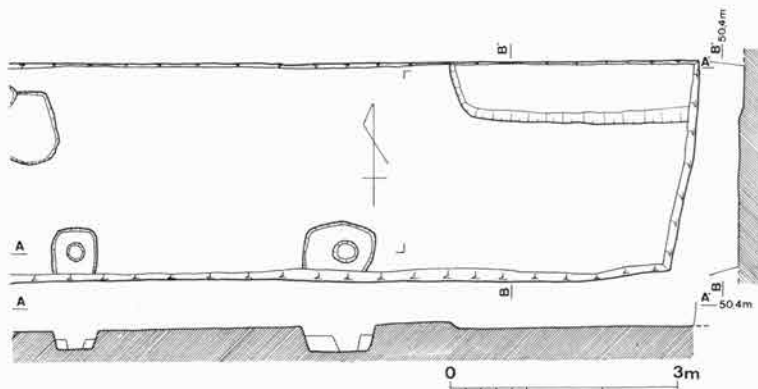
今回の調査は、前述したように下水道整備工事に伴うものであり、幅1~3mのトレンチを下水道の幹線部分を中心にして入れた、線的な調査であった。その調査面積は約320m²である。また、枝線等そのほかの場所については立会調査を行った。発掘調査は、昭和59年7月19日から開始し、8月30日に終了した。その後、工事に伴う立会調査を引き続き行い、10月11日に終えた。調査は、当調査研究センターの調査課主任調査員長谷川達と同調査員山口博が担当した。この発掘調査では、京都府立山城高等学校教諭西村和宏氏の助力を賜わり、調査補助員として肥後弘幸・鈴木良章・八田達男・近藤 篤・藤原ひとみ・浜口和宏・小川建太郎・濱田延充の各氏の参加を得た。また、京都府立山城高等学校には、調査を進める上でさまざまな便宜を図っていただいた。記して謝意を表したい。

2. 調 査 概 要

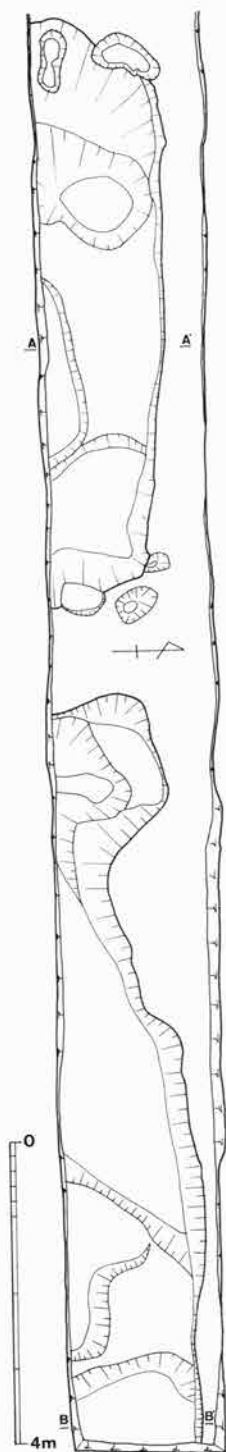
現地調査は、昭和59年7月19日に発掘資材を搬入し、7月24日から掘削を開始した。今回の調査では、高校敷地の北半の校舎部分(右京一条三坊九町に位置する)に計8本のトレンチを入れた。そのうち、まず、第1~第6トレンチの重機掘削及び残土の場外搬出を行い、第1~第3トレンチを中心に人力による掘削作業に入った。その後、第1~第5トレンチは、8月16日に調査を終了し、原因者に明け渡した。第7・第8トレンチについては、第6トレンチの人力掘削と並行して、8月11日から重機掘削を行い、調査に着手した。

これら各トレンチの基本層序は、前回調査で確認されているように、盛土・旧耕土、近世の遺物を含む淡緑灰色砂質土層、古代末~中世の遺物を含む褐色粘質土層、平安時代の整地土の黒褐色粘質土層、そして地山の黒褐色粘質土層・黄褐色粘質土層からなり、整地土層及び地山の黒褐色粘質土層の上面で遺構を検出した。ただし、これも前回調査で確認

されていることではあるが、北に行くに従い遺構面は浅くなる。第6・第8トレンチでは、盛土直下で地山の黄褐色粘質土層となり、こ



第 42 図 SD 0603・SB 0604 実測図



第 43 図
SD 0605・0606 平面図

の上面で遺構を検出した。

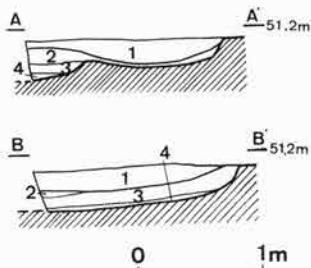
今回の調査では、第1～第3トレンチ、第6・第7トレンチ等から、平安時代の掘立柱建物跡(SB0604)、溝(SD0603・0605・0606・0611)、土坑(SK0615)、柱穴、奈良時代の掘立柱建物跡(SB0617・0618)、古墳時代の土坑(SK0607)等を検出し、平安時代の多量の土師器・須恵器・瓦・製塩土器や、墨書土器・緑釉陶器、奈良・古墳時代の土師器・須恵器等が出土した。ただ、奈良・古墳時代の遺物は、わずかであった。

それでは以下に、主要な検出遺構・出土遺物について簡単に説明する。

(1) 検出遺構

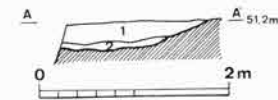
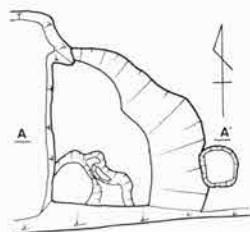
SD0603 第3トレンチ東北端で検出した東西方向の溝で、深さ約0.1mを測る。北肩がトレンチ外にあり、幅は不明である。トレンチの東へはまだ延びるようであるが、トレンチ東端から西へ3mのところまで途切れる。平安時代前期の土師器片・須恵器片が少量出土した。この溝は、前回調査で検出されたSD153と対になるものと思われる。

SB0604 第3トレンチの南壁に沿って柱穴を検出した、東西1間の規模の建物である。トレンチ内では、南北方向の対になる柱穴は検出されず、トレンチの南へ延びると思われる。柱穴は、掘形の1辺が約0.9mを測る、比較的大型のものである。東西方向の柱間距離は、約3.3mを測る。その規模や柱間距離等からして、



第 44 図 SD 0605・0606 土層図

- 1 暗褐色粘質土層(炭を含む)
- 2 暗褐色粘質土層
- 3 濃暗褐色粘質土層
- 4 暗褐色砂質土層



第 45 図 SK 0607 実測図

- 1 暗褐色粘質土層
- 2 暗褐色粘質土層(やや砂を含む)

門の可能性がある。時期は、平安時代前期のものである。

SD0605 第6トレンチで検出した東西方向の溝である。その位置関係から、同じく第6トレンチで検出されたSD0606とともに、九町の邸宅地の内側を廻る溝SD45^(注6)の延長になるものと考えられる。長さ約7.6m、深さ約0.3mを測る。南肩はトレンチ外にあり、幅は不明である。埋土は4層に分かれ、上層の暗褐色粘質土層は、炭を多く含み、多量の土師器・須恵器・製塩土器等が投棄されていた。溝底は平坦ではなく、かなりの凹凸がある。

SD0606 SD0605の東で検出した東西方向の溝である。不整形な平面形を呈し、底部も凹凸がある。やはり南肩はトレンチ外にあり、幅は不明である。約10m分検出し、トレンチの東へさらに延びる。深さは、約0.3mを測る。埋土の上層から、須恵器・土師器・軒平瓦等が出土した。出土遺物の量は、SD0605に比べさほど多くない。埋土は、SD0605と同様な状態である。

SD0614 第8トレンチで検出した東西方向の溝である。この溝は、当初東肩のみを検出し、ほかの溝肩がトレンチ外にあることや、トレンチ西端部を深掘りした際、出土する遺物に小片が多く、少量でもあったため、宅地を造成した際に凹地を埋めたものと考えていた。しかし、その後掘り下げ、また北へ小トレンチを入れ、北肩を検出した結果、溝であることを確認した。南肩は、既設管のため破壊されていることが判明した。幅は不明である。約16m分検出し、深さは、約0.2~0.6mを測る。溝中からは、土師器・須恵器や軒丸瓦片が出土した。時期は、遺物からみて平安時代中期まで下る。

なお、この溝の埋った後に、ピットが数個穿たれている。

SK0615 第8トレンチで検出した土塚で、SD0614によって削られている。東西長約1.2m、深さ約0.85mを測る。トレンチ南へ広がる。多量の平瓦・丸瓦が出土した。九町の邸宅が廃絶した際に、瓦を投棄していったものかと考えられる。

SD0611 第7トレンチで検出した。北へ湾曲しながら西から東へ伸びる溝で、幅約0.5m、深さ約0.15mを測る。遺物は、磨滅した須恵器・土師器の小片が出土したのみで、時期は不明である。瓦器が含まれていないため、平安時代後期頃までのものと思われる。

SB0617 第1トレンチから第2トレンチにかけて検出した掘立柱建物跡で、3個の柱穴を確認した。桁行3間以上の規模の建物と推定される。1辺約0.4~0.6mの柱穴掘形を持ち、柱間距離は、桁行約2.1m、梁行約2.4mと推定される。棟方向は、東に対し北へ大きく振れている。整地層の下で検出され、奈良時代の建物である。

SB0618 第3トレンチで検出した建物跡で、東西方向の柱穴列を2間分検出した。トレンチ内には南北方向に対応する柱穴がなく、トレンチの北へ延びると思われる。柱間距離は、約1.5mを測り、1辺約0.5mの柱穴掘形を持つ。建物の方位は、北に対し東へ振れ

ており、SB0617と同様奈良時代の建物である。

SK0607 第2トレンチで検出したやや不整形な円形を呈する土坑である。西半分は後世の攪乱坑で削られ、トレンチの南へも広がる。深さは約0.4mを測り、径は3m前後と推定される。埋土は2層に分かれ、ほぼ同質ながら下層はやや砂を含んでいる。底面から古墳時代末期の須恵器杯蓋が出土した。出土遺物は少ない。

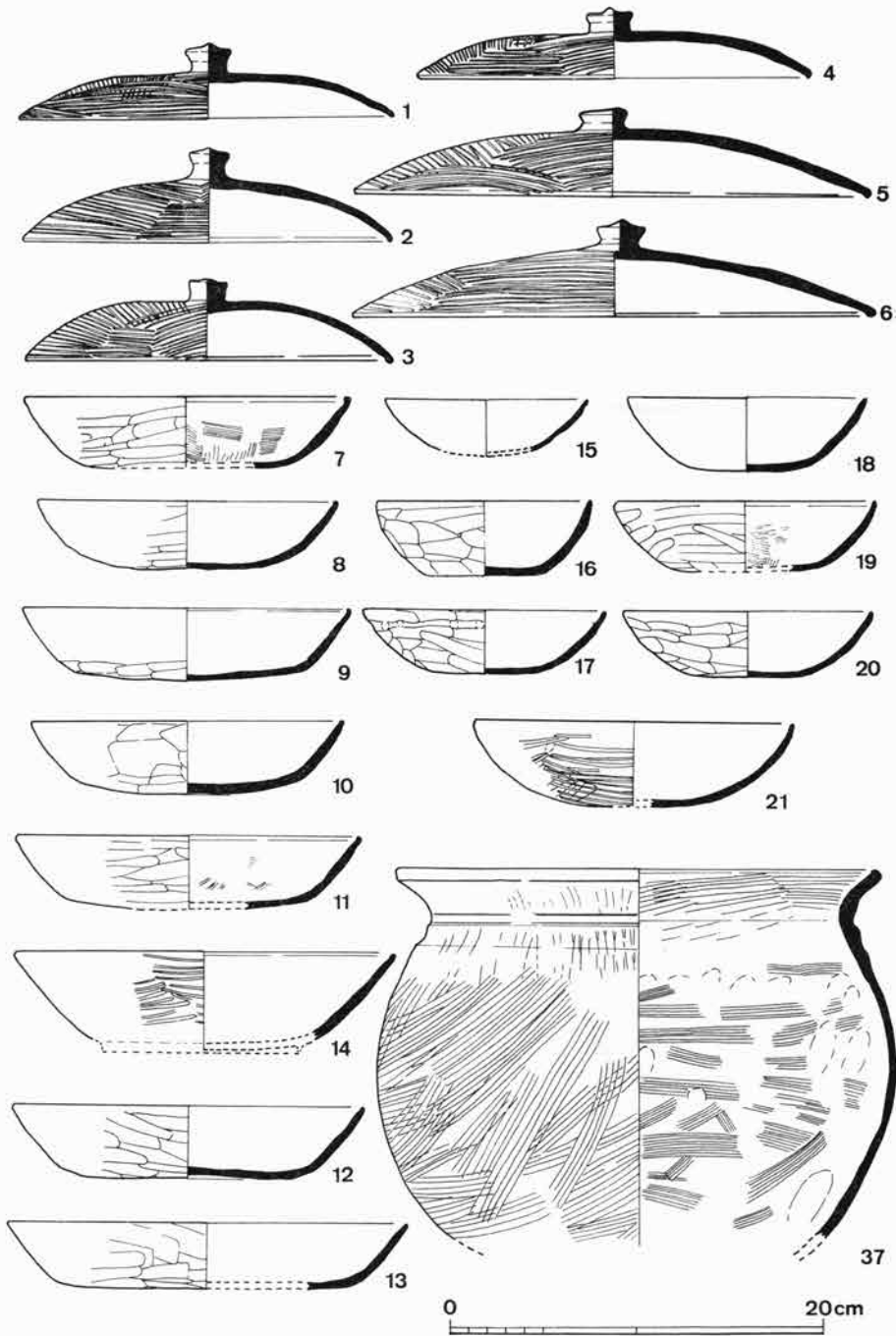
(2) 出土遺物

今回の調査では、平安時代の土師器・須恵器・墨書土器・製塩土器・緑釉陶器・軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、奈良時代の土師器片・須恵器片、古墳時代の須恵器、鎌倉・室町時代の土師器片・陶磁器片等が出土した。特に、第6トレンチのSD0605からは平安時代前期の土師器・須恵器・製塩土器等が多量に出土し、出土遺物の大部分を占めている。また、SK0615からも軒瓦は含まないものの瓦がまとまって出土した。

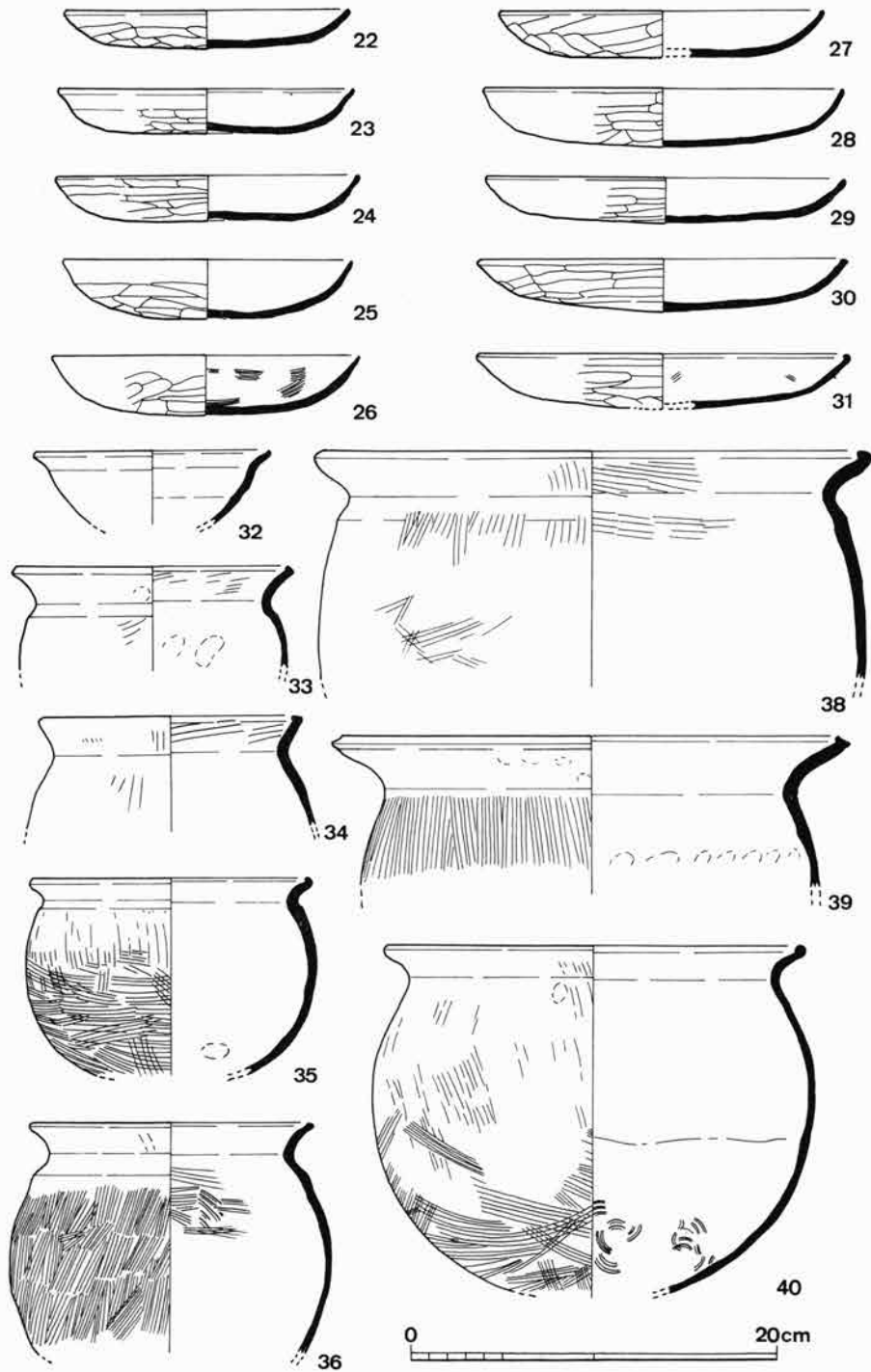
ここでは、今回出土遺物の大半を占めるSD0605の遺物を中心に、遺構別にその概略を述べる。なお、各器種のアルファベットによる呼称は、奈良国立文化財研究所の行っている分類規^(注7)準に準拠した。

SD0605 出土遺物 この溝からは、土師器の蓋(1～6)・杯A(7～13)・杯B(14)・椀A(15～20)・椀(21)・皿A(22～31)・高杯・鉢E(32)・甕A(33～42)、須恵器の杯蓋(46)・壺蓋(43～45)・杯A(47)・杯B(50)・皿A(49)・壺(48)・鉢D(51)・甕B(52)、黒色土器、製塩土器(54～58)、墨書土器(50・53)、軒丸瓦(71)・平瓦・丸瓦等が出土している。大部分は、溝の上層の埋土から、炭片と共に出土した。

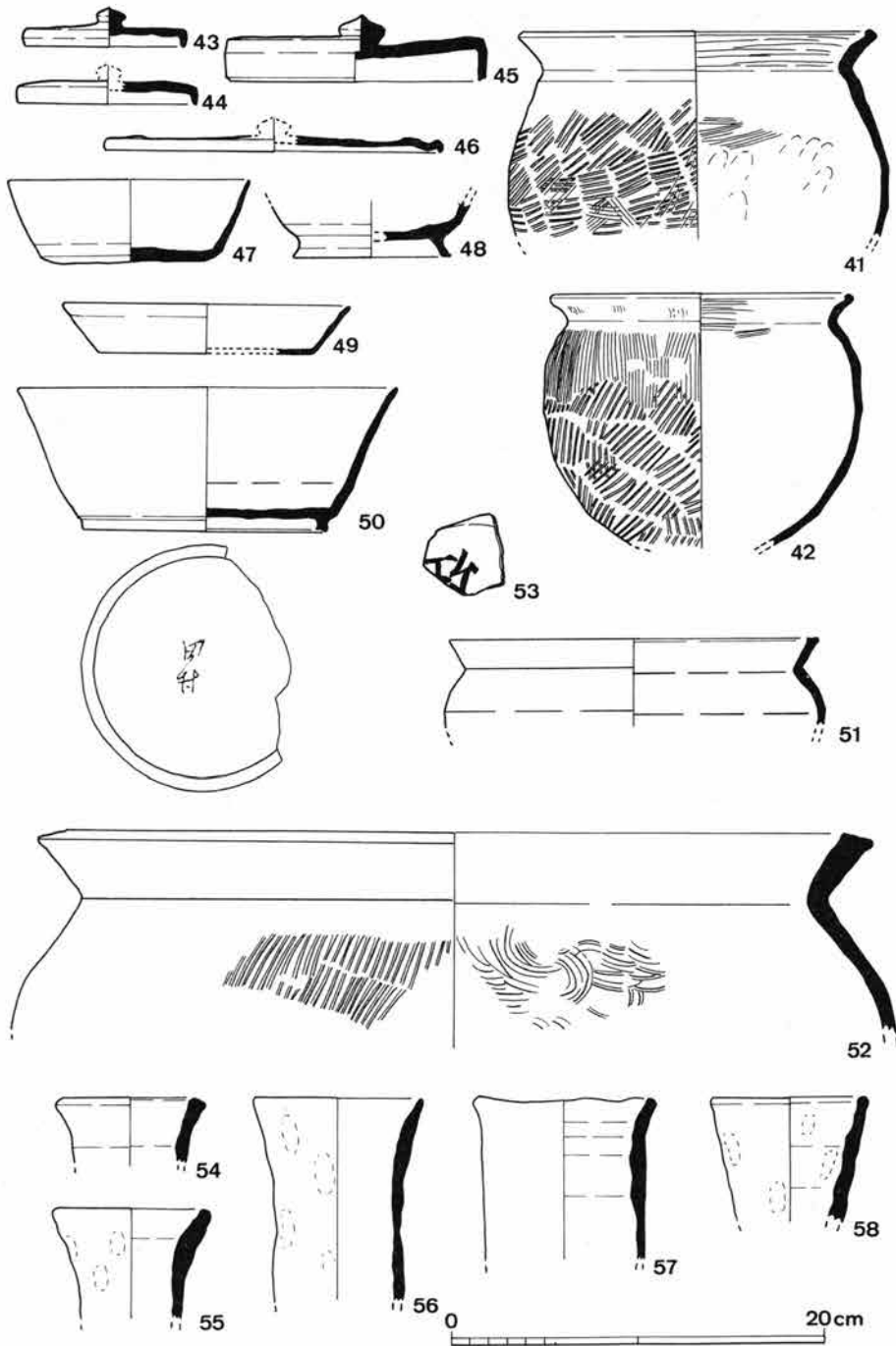
土師器の蓋(1～6)は、量法から口径20cm前後のもの(1～4)と28cm前後のもの(5・6)にわかれる。いずれも、外面はヘラ磨きを施し、内面はナデ及び横ナデを施しているが、内面にハケ目の痕跡を残すもの(1)が見られる。端部は内側に肥厚させている。杯A(7～13)は、口径17,18cm前後のもの(7～12)、21cm前後のもの(13)にわかれる。大半が外面ヘラ削りを行う手法のものであるが、口縁端部近くを削り残すもの(7・11・12)が比較的多く見られる。また、底部外面のみをヘラ削りするb手法のもの(9)も若干出土している。7・11は、内面にハケ目の痕跡を残し、ハケ目を施した後、ナデ調整を行っている。杯B(14)は、図化できるものがこれ1点のみで、ほかには高台部の小片が少量出土したにすぎない。口径20cm強を測り、口縁部が比較的大きく開く。椀A(15～20)は、口径11cm前後のもの(15・16)と、13.5cm前後のもの(17～20)がある。外面調整は、ヘラ削りを行っているが、15・16・20のように口縁端部近くを削り残すものや、19のように削りが荒く部分的に削り残されているものが比較的多く、指頭圧痕を残すもの(17・19)もある。また内面にハケ目の痕跡を残すもの(18)が出土している。21は、外面ヘラ削りの後ヘラ磨きを施



第46図 出土遺物実測図(1)
1~21・36:土師器 1~21・36:SD 0605出土

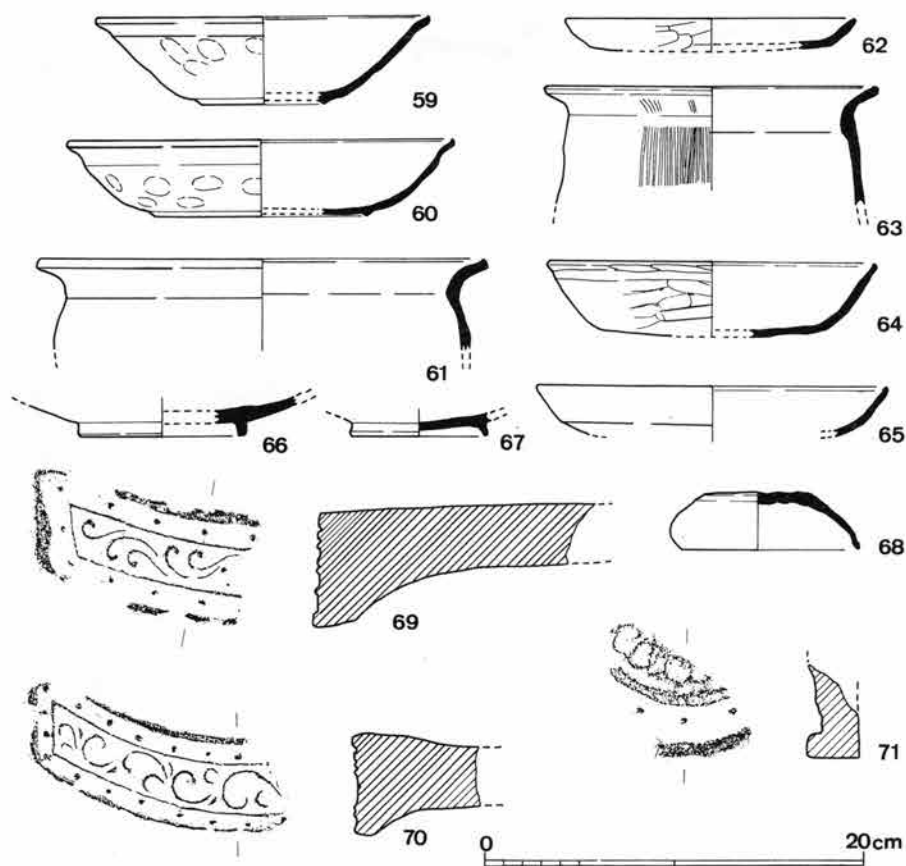


第47図 出土遺物実測図(2)
 22~40:土師器 22~40:SD0605出土



第48図 出土遺物実測図(3)

41・42・53: 土師器, 43~52: 須恵器, 50・53: 墨書土器, 54~58: 製塩土器
41~58: SD 0605 出土



第49図 出土遺物実測図(4)

59～65：土師器，68：須恵器，66・67：緑釉陶器，70・71：軒平瓦，71軒丸瓦，
71：SD 0605 出土，62～64・69・70：SD 0606 出土，59～61：SD 0614 出土，
68：SK 0607 出土，65：包含層（第4トレンチ）出土，66・67：包含層（第2ト
レンチ）出土

し、口径約17cmとやや大型である。皿A(22～31)は、口径16cm前後のもの(22～26)と20cm前後のもの(27～31)がある。22～26は、口縁端部近くを削り残す。また、内面調整に、ハケ目を施した後にナデを行っているもの(26・31)がやはり存在する。甕A(33～42)は、口径が15cm前後のもの(33～36)、20～23cm前後のもの(40・41)、26～30cmのもの(37～39)に分れ、頸部のナデが強いため、肩部に稜をなすもの(33・35～38・41・42)が多い。41・42は、叩きが施されており、36・40も、内面に当て板の同心円文を残す。その他、ハケ目やナデによって消されているが、叩きによる平坦面が観察できるものがあり、叩きによって整形されたものがある程度数を占めている。また、口縁部内面にハケ目が施されているものも多い。口縁端部は、大部分が内側へ肥厚ないし折り曲げている。

須恵器は、土師器に比べ器形も数量も少ない。ここに紹介しているものが図化できるものの大半である。壺蓋(43~44)が出土しているが、壺A・Cは出土していない。

墨書土器(50・53)は、須恵器の杯B(50)の底部外面と、土師器の杯(53)の内面に書かれている。50は、「田^[村カ]□」, 53は、「□^[政カ]」と記されている。(53)は、字が半分欠失しているため不明なところが多いが、その記載位置から見て、もう1字存在した可能性がある。

製塩土器(54~58)は、粘土紐の巻き上げで成形され、全体に凹凸があり、胎土はやや砂質である。

SD0606 出土遺物 土師器の皿A(62)・杯A(64)・甕A(63), 須恵器の杯A・杯B・蓋, 軒平瓦(69・70)・丸瓦・平瓦, 製塩土器等が出土している。

出土遺物の量は、SD0605に比べかなり少ないが、傾向は同様である。70は、2葉を1単位となし4転させる。前回調査でNH01と分類されたものである。71は、3葉を1単位となし5転させる。平城宮式の瓦である。

SD0614 出土遺物 土師器の杯A・杯B(59・60)・皿・甕(61), 須恵器の杯A・杯B・蓋・甕, 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦等が出土している。

杯B(59・60)は、いずれも口縁端部外面を横ナデし、以下を指オサエ未調整とする。軒丸瓦は、瓦当面を欠失している。軒平瓦は、重画文の残欠である。

SK0607 出土遺物 須恵器の杯蓋(69)が出土した。

その他の出土遺物 ビットや包含層から出土した遺物で、須恵器の蓋・杯A・杯B, 鉢, 土師器の杯A・皿A(65)・甕, 緑釉陶器碗(66・67), 瓦片等が出土している。65は、第4トレンチの包含層, 66・67は、第2トレンチの包含層からそれぞれ出土した。

3. 小 結

今回の調査では、以上述べてきたように、顕著な知見を得ることはできなかったが、SD0603・0605・0606等、平安時代前期の邸宅の築地内側を廻る溝や、宅地を南北に区画する溝の延長等を確認することができ、SD0605からは多量の出土遺物をみるなどの成果を得た。また、古墳時代末期・奈良時代・平安時代中期の土壇・掘立柱建物跡・溝等、平安時代前期以外の遺構も前回調査同様検出している。そのほか、高校グラウンドに接してその北側に入れた第4トレンチでは、トレンチが狭小なため遺構は検出することはできなかったものの、平安時代前期の整地土層を確認することができた。このことは、第1~第3トレンチの状況から見て、両者の間に十分遺構の存在を予測させるものである。

九町の宅地は、SD153などの溝によって南北に区画されており、北は、正殿・脇殿・そのほか雑舎等から構成される居住空間となっていた。この、宅地を南北に区画する溝は、東

と西の築地内側の溝からそれぞれ延び、西から延びるものが前回検出したSD153、東から延びるものが今回検出したSD0603である。このSD0603は、当初予想していたよりも短く、正殿中軸でSD153を折り返した位置までは延びていない。さらには、その検出位置から見て、宅地内側を廻る溝は、西側においては築地から東へある程度離れて検出されているが、西側においては築地にほぼ接して存在したものと考えられる。なお、SD0603が途切れるところの南約2mには、門の可能性のある建物SB0604が存在する。前回調査では、正殿中軸上に内門を想定しており、SB0604の位置が主要殿舎群より東にあることから、通用門として存在したと現時点では推定しておきたい。また、このSB0604からは、区画溝のかわりに柵列が西へ延びていることも十分考えられる。ただ第1～第3トレンチに接して既設の下水道幹線が走っており、削られている可能性が高い。

SD0605から出土した多量の出土遺物は、上層の埋土から炭片と共に多量に出土し、建物群が廃絶されたおりに一括して投棄された様相を呈している。これは、SD45一特に『ゴミ捨て穴』部と称されている中央部から東部にかけて一の出土状況と基本的には同様である。ただ、SD45出土土器に比べ、須恵器の出土量が絶対的に少なく、出土土器の大部分を土師器が占めていることや、土師器の甕がかなりの数量存在すること、土師器の蓋が多く目につくこと、灰釉陶器・緑釉陶器がほとんど含まれていないことなど若干の相違点がある。また、SD0605出土土器に関して言えば、土師器の蓋の出土量に反し、それと組み合わせる杯Bないし盤Bがほとんど出土していないことも特徴として挙げられよう。なお数量的には、土師器の杯A・椀A・皿Cが出土土器の大半近くを占めている。これらSD0605出土土器には、近在の建物(東の脇殿群)の性格がやはり反映されていようし、SD45出土土器との相違は、この邸宅の居住空間域における東側と西側の区域の性格の相違、つまりは使用のされ方の相違を示すものであろう。

以上今回の調査結果について若干述べてきたが、狭小な埋設管設置に伴う調査という性格上不明な点は多く、類推によるところも多い。今後の調査により明らかになることも多いであろう。なお、最後に付記すると、池庭の存在については、以前の調査ですでに可能性は薄いと指摘されているが、今回調査の第4トレンチの結果等から見て、より可能性は薄くなったと言える。今後の調査結果に期待したい。(山口 博)

付表 2 出土土器観察表

遺構	器種	器形	番号	法量 口径器高 (cm)(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
SD0605	土師器	蓋	1	20.4 4.0	<ul style="list-style-type: none"> ○扁平な笠状を呈する。 ○擬宝珠状のつまみを附す ○口縁端部はやや内側に肥厚する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面はヘラ削りの後、ヘラ磨きを施す。 ○内面は横ナデを施す。 ○内面にハケ目痕を残すもの(1)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 赤褐色。 	○外面の一部に煤が附着する。
			2	20.0 5.0			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 淡赤褐色。 	
			3	19.8 4.7			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 精良。 ○焼成 ややあまい。 ○色調 暗褐色。 	
			4	21.0 3.8			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良。 ○焼成 良好。 ○色調 淡褐色。 	
			5	27.6 4.6			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 0.5~2mm 大の砂粒を含む。 ○焼成 良好。 ○色調 赤褐色。 	○内外面の一部に煤が附着する。
			6	27.7 5.3			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良。 ○焼成 良好。 ○色調 淡褐色。 	
	杯	A	7	17.4 3.7	<ul style="list-style-type: none"> ○平坦な底部から大きく開く口縁部を持つ。 ○口縁端部は、丸くおさめるもの(10・12・13)と内側へやや肥厚させるもの(7~9・11)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面はヘラ削りの後、ヘラ磨きを施す。 ○7・11は、内面にハケ目痕を残し、ハケ目の後横ナデを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗。 ○焼成 ややあまい。 ○色調 橙褐色。 	○口縁端部外面に黒斑がみられる。
			8	16.3 3.8			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 精良。 ○焼成 ややあまい。 ○色調 淡橙褐色。 	○全体に煤が附着する。
			9	17.6 4.1			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗。 ○焼成 良好。 ○色調 淡赤褐色。 	
			10	18.8 3.9			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良。 ○焼成 良好。 ○色調 淡褐色。 	
			11	18.0 4.0			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗。 ○焼成 ややあまい。 ○色調 淡褐色。 	
			12	19.0			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗(砂粒を含む)。 ○焼成 ややあまい。 ○色調 淡橙褐色。 	
			13	23.7 3.6			<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗(砂粒を含む)。 ○焼成 ややあまい。 ○色調 淡橙褐色。 	
	B	14	20.4	○高台を有する。	<ul style="list-style-type: none"> ○外面はヘラ削りの後ヘラ磨きを施し内面は横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 良(砂粒を含む)。 ○焼成 良好。 ○色調 淡橙褐色。 		
	碗	A	15	10.1	○ほぼ平坦な底部と内湾気味に外上方に開く口縁部からなる。	<ul style="list-style-type: none"> ○外面はヘラ削りの後、ヘラ磨きを施すが、16・17・20は、口縁端 	<ul style="list-style-type: none"> ○胎土 やや粗(砂粒を含む)。 ○焼成 ややあまい。 ○色調 淡橙褐色。 	

遺構	器種	器形	番号	法 量		器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調等	備 考
				口径(cm)	器高(cm)				
SD0605	土師器	碗 A	16	11.4	4.1	○口縁端部は、丸くおさめるもの(15~18・20)と内側にやや肥厚させるもの(19)がある。 ○16は、底部と口縁部の境が明瞭である。	部近くをケズリ残し、19は部分的にケズリの及ばないところがある。 ○15は、外面の口縁部上半を横ナデし、下半は未調整。 ○内面にハケ目の痕跡を残すもの(15・19)がある。	胎土 やや粗(砂粒を含む)。 ○焼成 良好。 ○色調 暗褐色。	○底部内面は磨滅が著しい。
			17	12.8	4.5			胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 淡褐色。	
			18	12.6	4.9			胎土 良好。 ○焼成 良好。 ○色調 赤褐色。	
			19	14.0	4.8			胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 赤褐色。	
			20	13.2	3.5			胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 橙褐色。	
		碗	21	16.9	4.5	○底部がやや丸味を帯びる	○外面へラ削りの後、へラ磨きを施す。	胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 橙褐色。	
		皿 A	22	15.5	2.0	○平坦な底部とゆるやかに外上方に開く短い口縁部からなる。 ○口縁端部を内側にやや肥厚させるもの(24・27・29~31)と丸くおさめるもの(22・23・25・26・28)がある。	○外面はへラ削り、内面は横ナデを施す。 ○外面の口縁端部近くをケズリ残すもの(22~26・27)がある。 ○内面にハケ目の痕跡を残すもの(26・31)がある。	胎土 良。 ○焼成 良好。 ○色調 明赤褐色。	
	23		16.2	2.5	胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 明赤褐色。				
	24		16.6	2.6	胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 橙褐色。				
	25		15.9	3.2	胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 淡赤褐色。			○外面底部に指頭痕が環状に残る。	
	26		17.0	3.2	胎土 やや粗(砂粒を含む)。 ○焼成 良好。 ○色調 橙褐色。			○器形がひずんでいる。	
27	17.8		2.5	胎土 良(砂粒を含む)。 ○焼成 良好。 ○色調 橙褐色。					
		28	19.5	3.2	胎土 精良。 ○焼成 良好。 ○色調 赤褐色。				
		29	18.4	2.5	胎土 やや粗(砂粒を含む)。 ○焼成 良好。 ○色調 橙褐色。		○煤が附着し、黒ずんでいる。		
		30	20.7	2.9	胎土 精良(砂粒を含む)。 ○焼成 良好。 ○色調 明赤褐色。				
		31	20.6	3.0	胎土 やや粗(3mm大の砂粒を含む)。 ○焼成 良好。 ○色調 橙褐色。				

遺構	器種	器形	番号	法量		器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調等	備考								
				口径(cm)	器高(cm)												
S D 0 6 0 5	土師器	鉢	E	32	13.0	<ul style="list-style-type: none"> 深めの体部もち、口縁部を外反させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面はヘラ削り、口縁部外面と内面は横ナデを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 淡橙褐色。 									
				甕	A	33	15.2	<ul style="list-style-type: none"> 球形の胴部と「く」の字状に外反する口縁部とからなる。 口縁端部を内側に肥厚ないし折り曲げる。 36は、口縁端部を丸くおさめる。 39・40・41は、肩部の稜を持たない。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面は、横ナデ、胴部外面はハケ目を施し、内面は、ナデないしハケ目を施す。 口縁部内面に横方向のハケ目を施すもの(33・34・37・38・41・42)がある。33・34は、ハケ目の後横ナデを行う。 口縁部外面にハケ目の痕跡を残すもの(34・36～38・40・42)がある。 叩き成形によるもの(36・40～42)がある。36・40は、外面はハケ目によって消されているが、内面に同心円文を残す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 淡赤褐色。 							
						34	13.2			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 淡橙褐色。 							
						35	15.0			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 暗褐色。 	外面の一部に煤が附着する。						
						36	15.0			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 ややあまい。 色調 淡褐色。 	外面に煤が附着する。						
						37	25.8			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良。 焼成 良。 色調 淡褐色。 							
						38	29.2			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良(1mm大の砂粒を含む)。 焼成 ややあまい。 色調 明赤褐色。 							
						39	27.4			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良(1mm大の砂粒を含む)。 焼成 良好。 色調 淡褐色。 	口頸部の一部に煤が附着している。						
						40	22.6			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 淡褐色。 	口頸部には粘土紐の貼りつけ痕がみられる。体部外面には一部黒斑がみられる。						
						41	18.8			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良(砂粒を含む)。 焼成 良好。 色調 赤黄褐色。 							
						42	15.7			<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良。 焼成 良好。 色調 明淡褐色。 							
						須恵器	壺蓋				43	8.6	2.2	<ul style="list-style-type: none"> 平坦な天井部と、短く垂下する口縁部からなる。 扁平な宝珠つまみを附す。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体に回転ナデを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 淡灰褐色。 	
											44	9.6	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 灰色。 			天井部に暗緑黄色の自然釉がかかる。	
45	14.0	3.6	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 青灰色。 														
		杯蓋	46	18.1		<ul style="list-style-type: none"> 平坦な天井部と屈曲する縁部からなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 縁部は回転ナデを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 灰色。 									

遺構	器種	器形	番号	法 量		器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
				口径(cm)	器高(cm)				
SD0605	須恵器	皿 A	49	15.4	2.7	平坦な底部と外上方に直に開く口縁部からなる。	口縁端部外面は回転ナデのあとがみられる。	胎土 精良。 焼成 良好。 色調 乳灰褐色。	
		壺	48			「ハ」の字状に開く高台を付す。		胎土 精良。 焼成 良好。 色調 灰色。	
		杯 A	47	15.1	4.4	平坦な底部と外上方に開く口縁部からなる。	底部外面にはヘラ切り痕がみられる。	胎土 精良。 焼成 良好。 色調 乳灰褐色。	
		杯 B	50	20.6	13.1	底部と口縁部の境やや内側に高台を付す。	内面全体と口縁部外面に回転ナデを施す。	胎土 精良。 焼成 良好。 色調 乳灰褐色。	墨書土器
		鉢 D	51	19.8		外反する短い口縁部と肩の張る体部からなる。	回転ナデを行う。	胎土 精良。 焼成 良好。 色調 灰色。	
		甕	52	41.8		口縁部が短く外上方に開く。	口縁部は回転ナデ、体部は叩き成形による。	胎土 精良。 焼成 良好。 色調 淡緑黄色。	外面全体と口頸部内面に釉がかかる。
	土師器		53				胎土 精良。 焼成 良好。 色調 橙褐色。	墨書土器	
	製埴土器		54	6.9	口縁部はラッパ状に開く。 端部は丸くおさめる。	指オサエ末調整。粘土紐の接合痕をよく残す。 57は、口縁端部内面に横ナデを施す。	胎土 1mm~4mm 大の砂粒をかなり含む。 焼成 ややあまい。 色調 (54) 暗灰色。 (55) 淡明灰褐色。 (56・57) 淡明褐色。		
		55	7.6						
		56	8.7						
		57	9.0						
		58	7.4						
SD0614	土師器	杯 B	59	17.5	4.6	口縁部が大きく外上方に開き、端部近くを外反させる。 高台を持つ。 端部を内側に肥厚させる。	内面及び口縁部外面上半は横ナデ、下半は指オサエ末調整。	胎土 良(砂粒を含む)。 焼成 ややあまい。 色調 淡明赤褐色。	
			60	20.2	4.1				
		甕 A	61	23.4		口縁部が「く」の字状に外反する。	口頸部に横ナデを施す。	胎土 良(砂粒を含む)。 焼成 良好。 色調 暗赤褐色。	外面に煤が附着。
SD0606	土師器	皿 A	62	15.1	1.6	口縁部は丸くおさめる。	外面はヘラ削り、内面は横ナデを施す。端部近くをケズリ残す。	胎土 精良。 焼成 良好。 色調 明赤褐色。	底部外面の磨滅が著しい。

遺構	器種	器形	番号	法 量		器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調等	備 考
				口径 (cm)	器高 (cm)				
S D 0 6 0 6	土師器	甕 A	63	17.2	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部が「く」の字状に外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部は横ナデ、体部にはハケ目が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良好。 焼成 良好。 色調 淡橙褐色。 		
		杯 A	64	17.0	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部は内側にやや肥厚する。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は、口縁部下半と端部近くをへら削りし、ほかを削り残す。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 良好。 色調 橙褐色。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部外面の磨滅が著しい。 	
包含層	土師器	皿 A	65	18.4	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部がゆるやかに内湾しながら立ち上がる。 端部は、やや内側に肥厚させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面は横ナデを施す。外面調整はへら削りか。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良好。 焼成 やや軟。 色調 淡褐色。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は磨滅が著しい。 	
		縁袖陶器	杯 B	66	8.8 高台径	<ul style="list-style-type: none"> 高台を付す。 	<ul style="list-style-type: none"> へら磨きが施されている。 高台は削りだす。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 堅。 色調 淡黄緑色。 	
			67	7.2 高台径	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 精良。 焼成 堅。 色調 淡黄緑色。 				
S K 0 6 0 7		杯蓋	69	10.6	<ul style="list-style-type: none"> 天井部から稜を持たず、ゆるやかに縁部に至る小型の杯蓋である。 端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面及び口縁部外面は回転ナデ、天井部外面は未調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土 良好。 焼成 堅。 色調 灰色。 	<ul style="list-style-type: none"> 焼けひずんでいる。 	

- 注1 平良泰之・石井清司・常盤井智行「平安京跡（右京一条三坊九町）昭和54年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-3）』京都府教育委員会）1980
- 注2 平良泰之・伊野近富・杉本 宏・常盤井智行・村川俊明・谷口智樹「平安京跡（右京一条三坊九町・十町）昭和55年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-1）』京都府教育委員会）1981
- 注3 注1・2と同じ
- 注4 杉山信三・鈴木広司「住宅公園花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報—平安京跡右京土御門木辻—」（『埋蔵文化財発掘調査概報集1976』鳥羽離宮跡研究所）1976
- 注5 注1・2と同じ
- 注6 注1・2と同じ
- 注7 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告 XI」（奈良国立文化財研究所学報第40冊）1982
- 注8 注2と同じ
- 注9 注2と同じ
- 注10 注2と同じ
- 注11 注2と同じ

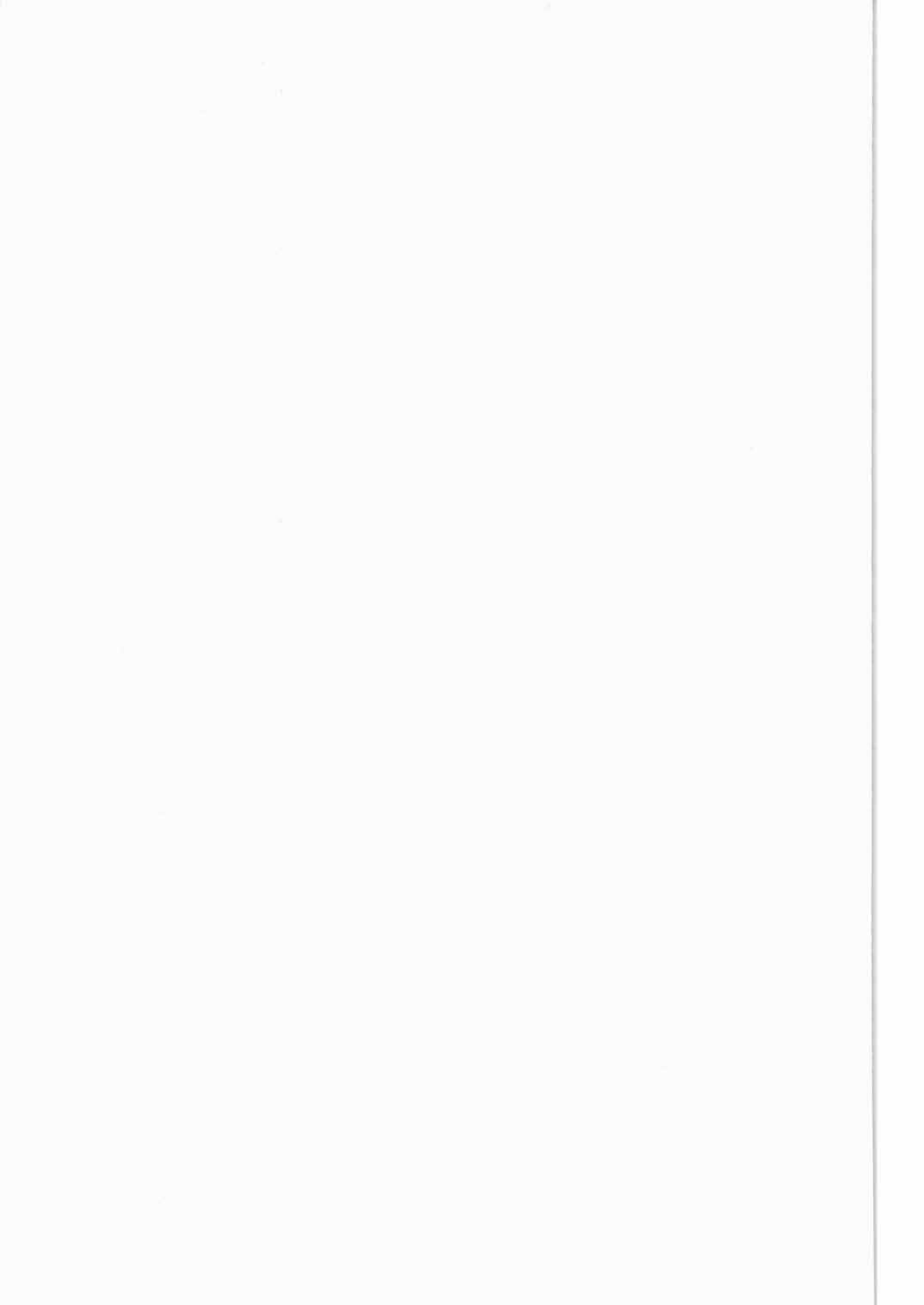
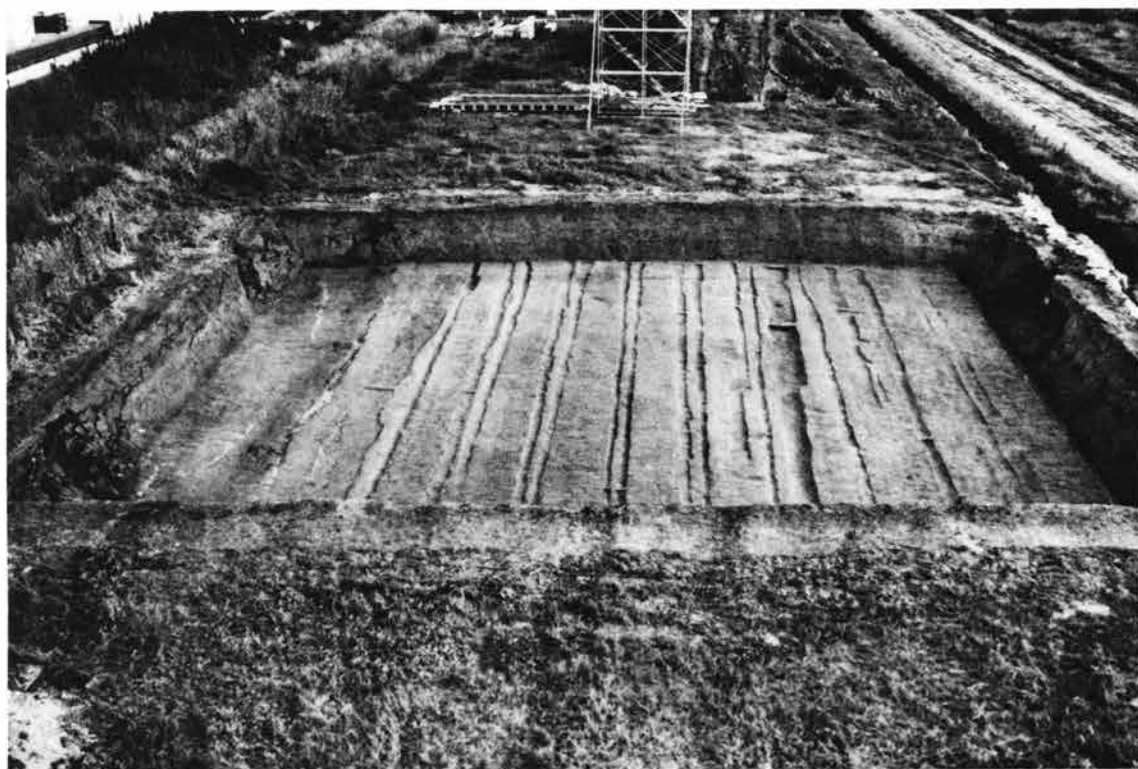
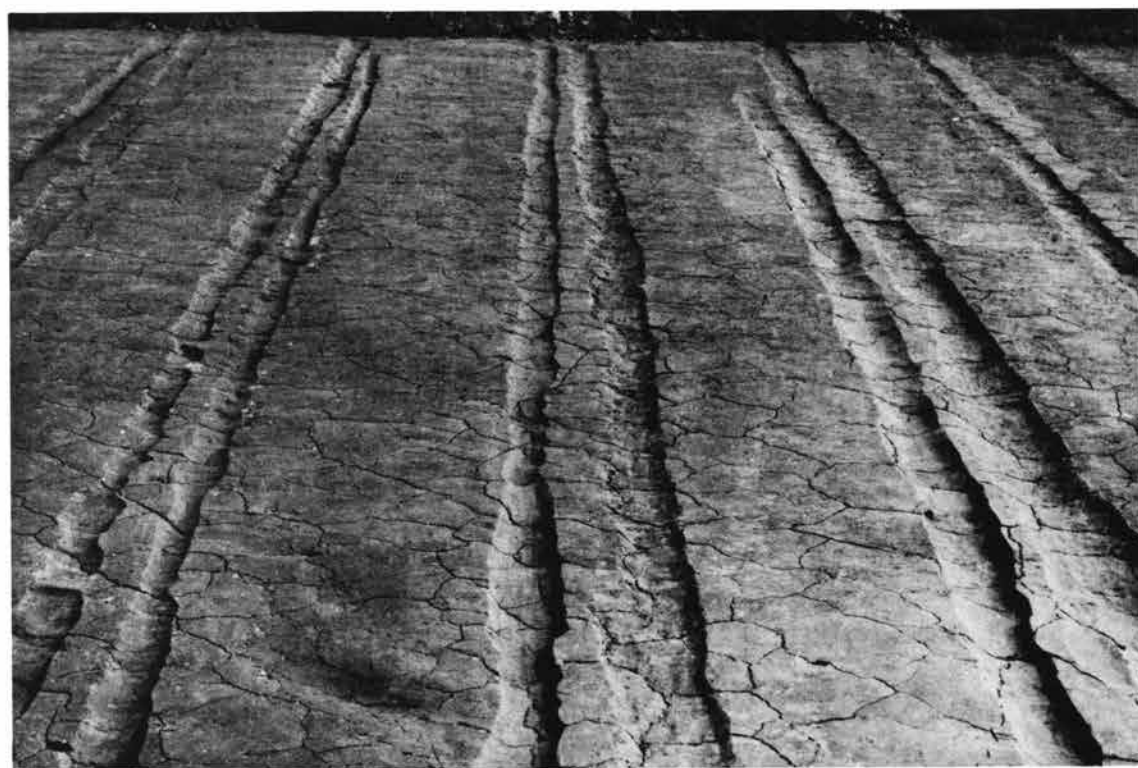


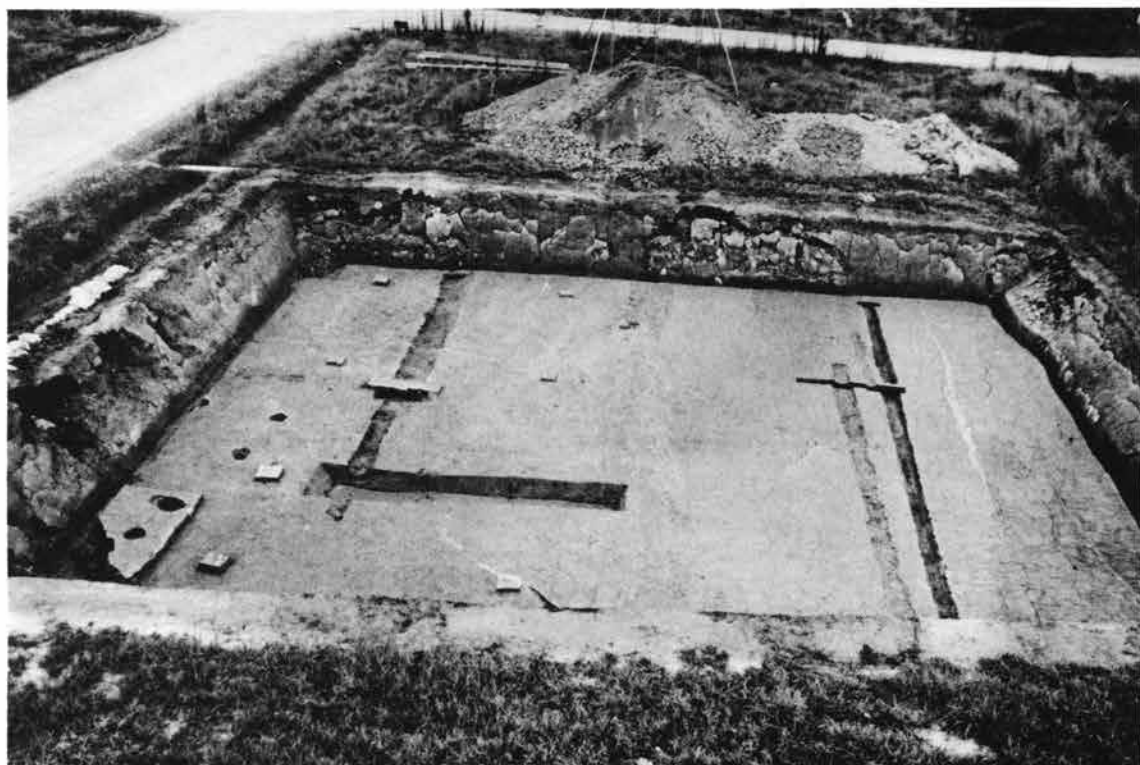
图 版



(1) Cトレンチ遺構検出状況 上層（北から）



(2) Cトレンチ溝状遺構（南から）



(1) Cトレンチ遺構検出状況 下層 (南から)



(2) Cトレンチ溝 (北から)



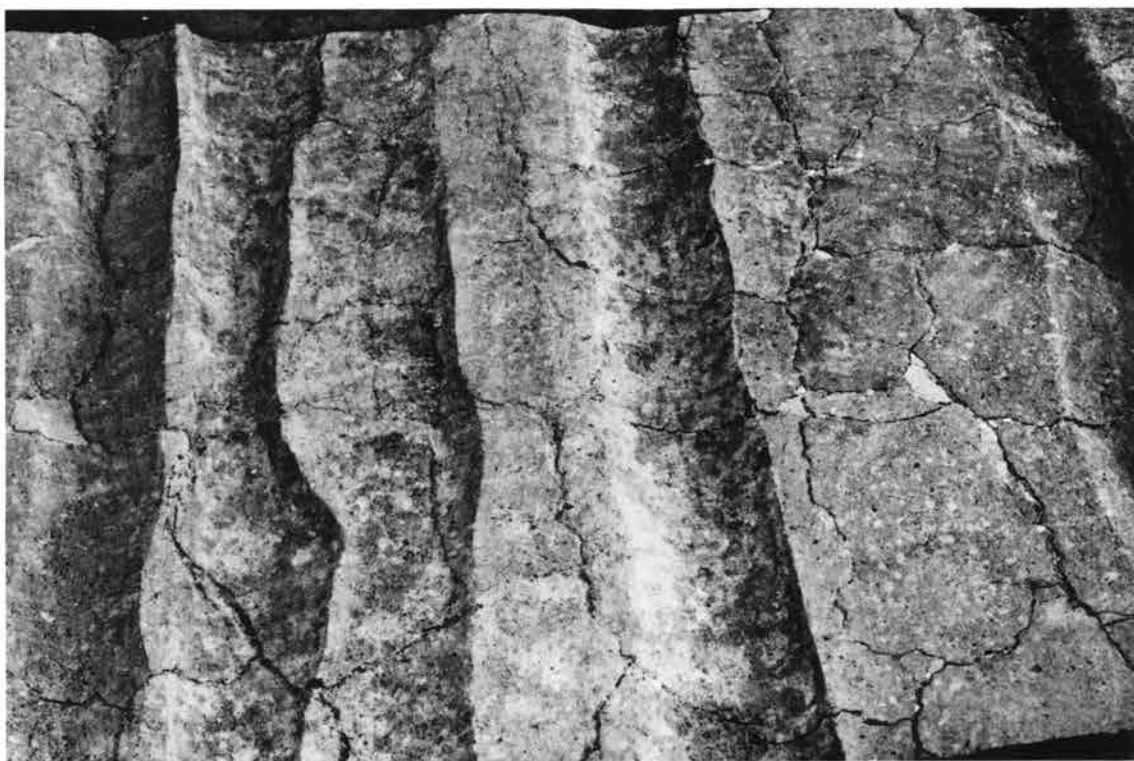
(1) 土城S K01 (北から)



(2) 掘立柱建物跡S B01 (南から)



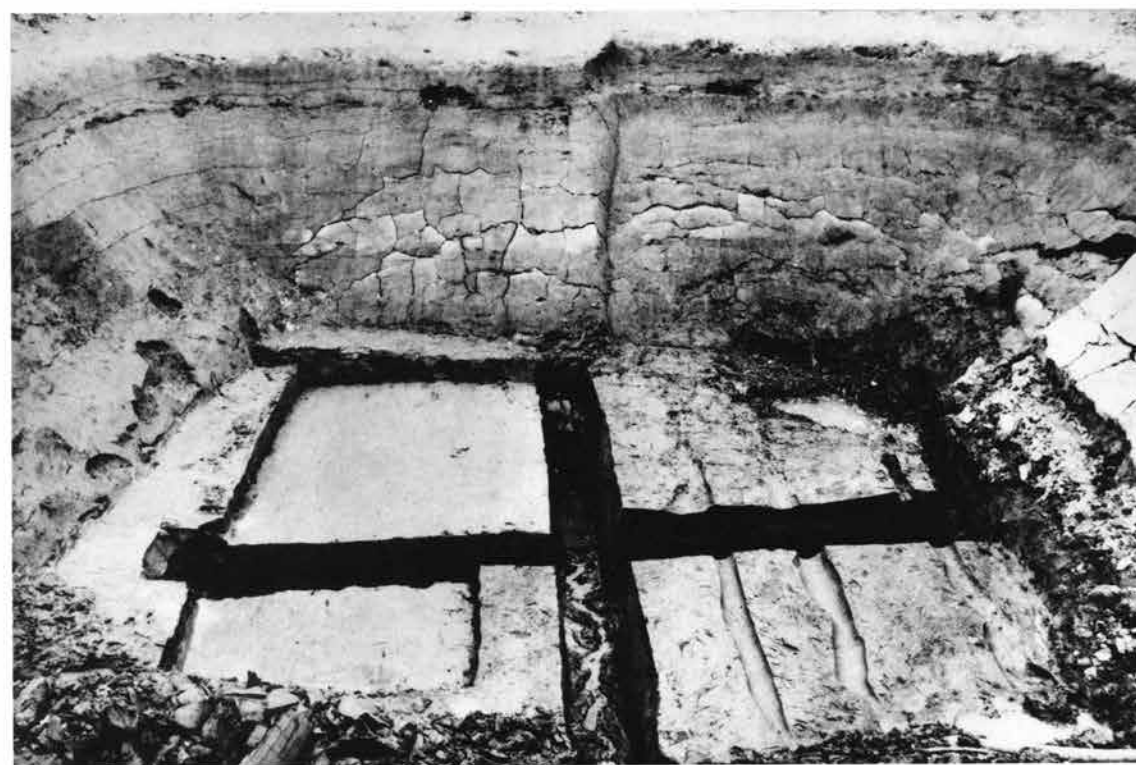
(1) Bトレンチ遺構検出状況（東から）



(2) Bトレンチ溝状遺構（北から）

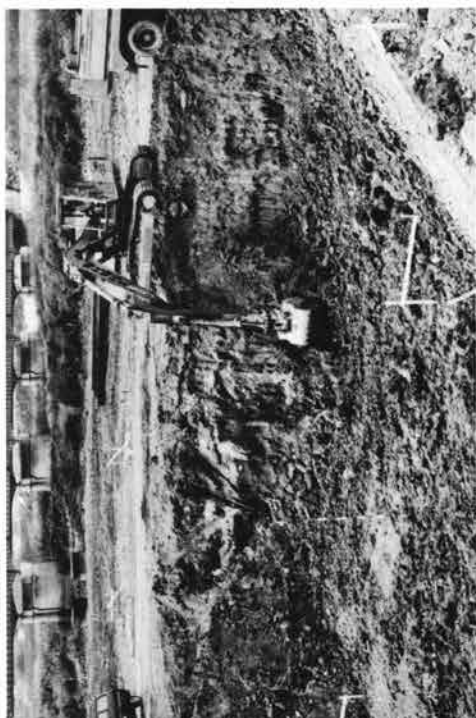


(1) Dトレンチ全景 (東から)



(2) Eトレンチ全景 (東から)

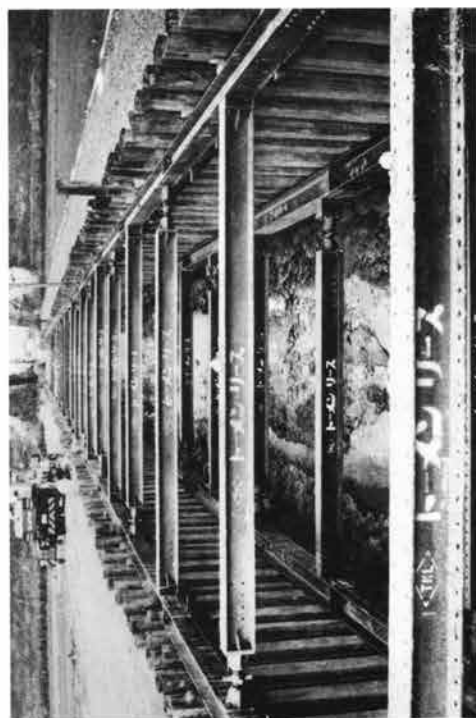




(3) 堤外水路地区 (No.4 地点) 掘削風景



(4) 土層断面観察状況 (No.4 地点北壁中央部)



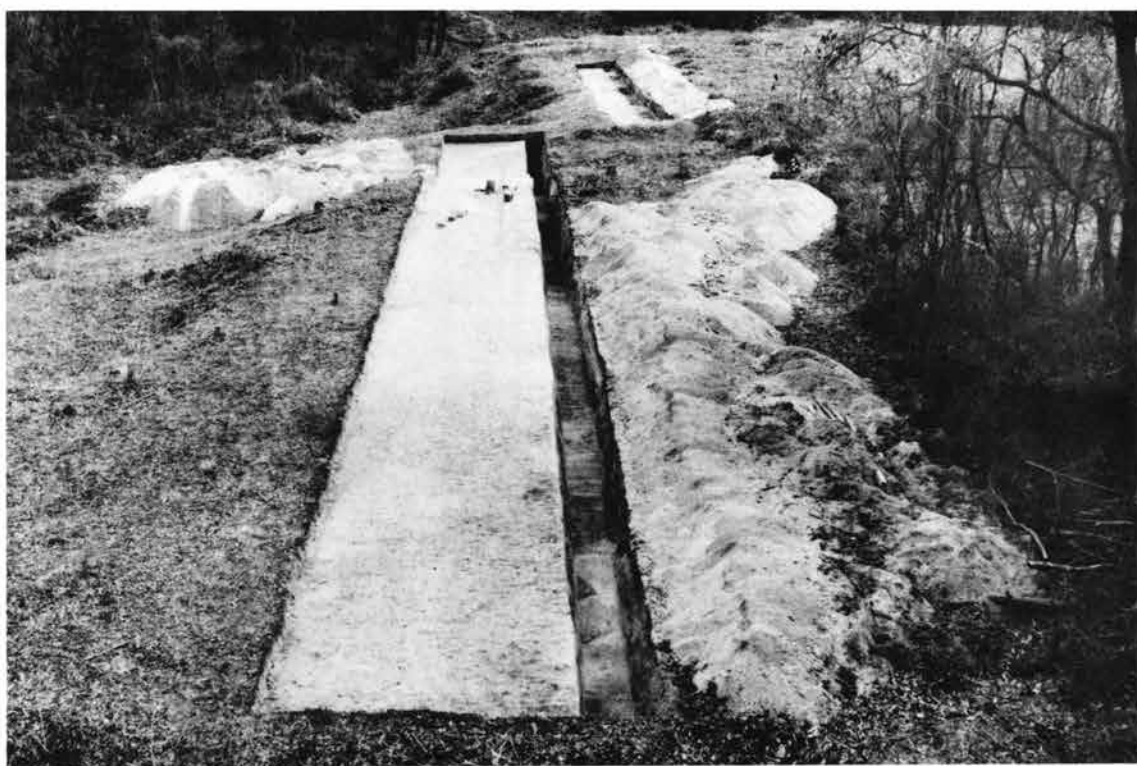
(1) 工事掘削状況 (No.3 地点)



(2) 最終底面観察状況 (No.3 地点)



(1) 平坦地調査前全景（北西から）



(2) 平坦地トレンチ全景（北西から）中央・1トレンチ、奥・2トレンチ



(1) 南東端調査前全景（北西から）



(2) 山林部分トレンチ全景（北西から）手前が6トレンチ



(1) 7トレンチ全景 (南東から)



(2) 7トレンチ・9トレンチ全景 (南東から) 中央が9トレンチ



(1) 尾根頂部平坦面トレンチ全景（北西から）



(2) 7トレンチ拡張部遺物出土状況（北西から）



(1) 3号墳石室全景（南から）



(2) 3号墳遺物出土状況（東から）



(1) 2号墳石室全景 (南西から)



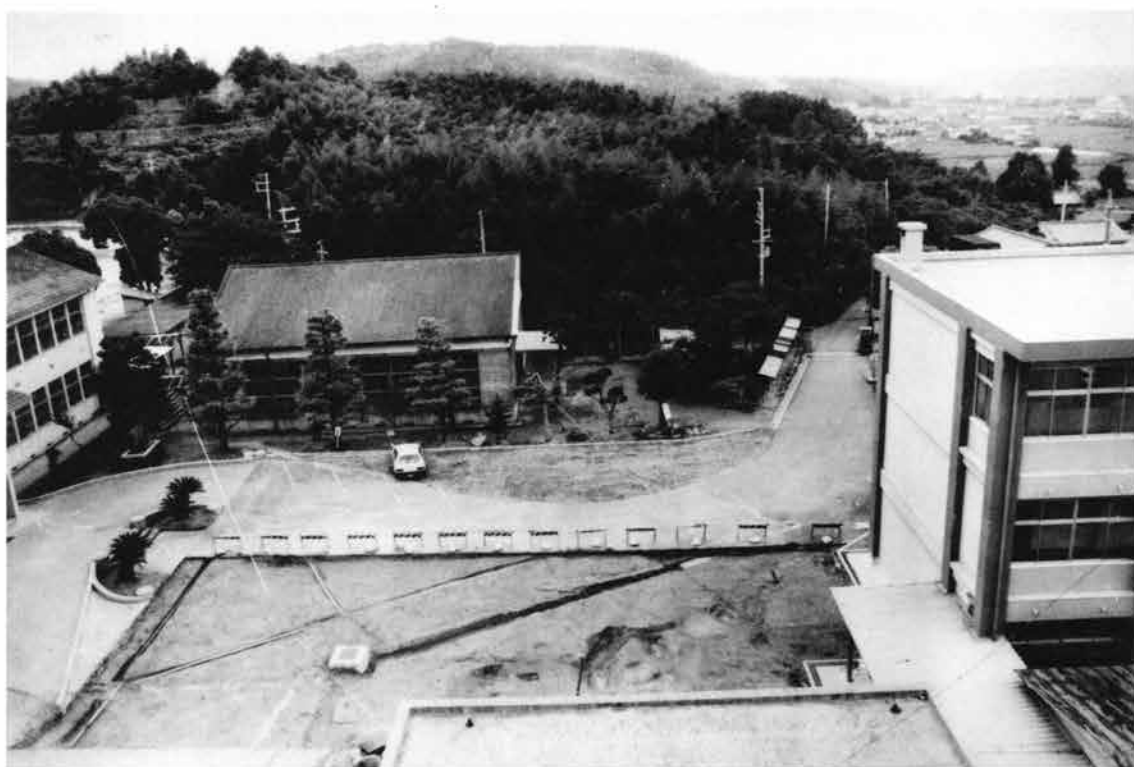
(2) 2号墳遺物出土状況 (北西から)



(1) 中世土壙墓群完掘状況（南から）



(2) 土壙11・青磁碗出土状況



(1) Aトレンチ全景(北から)



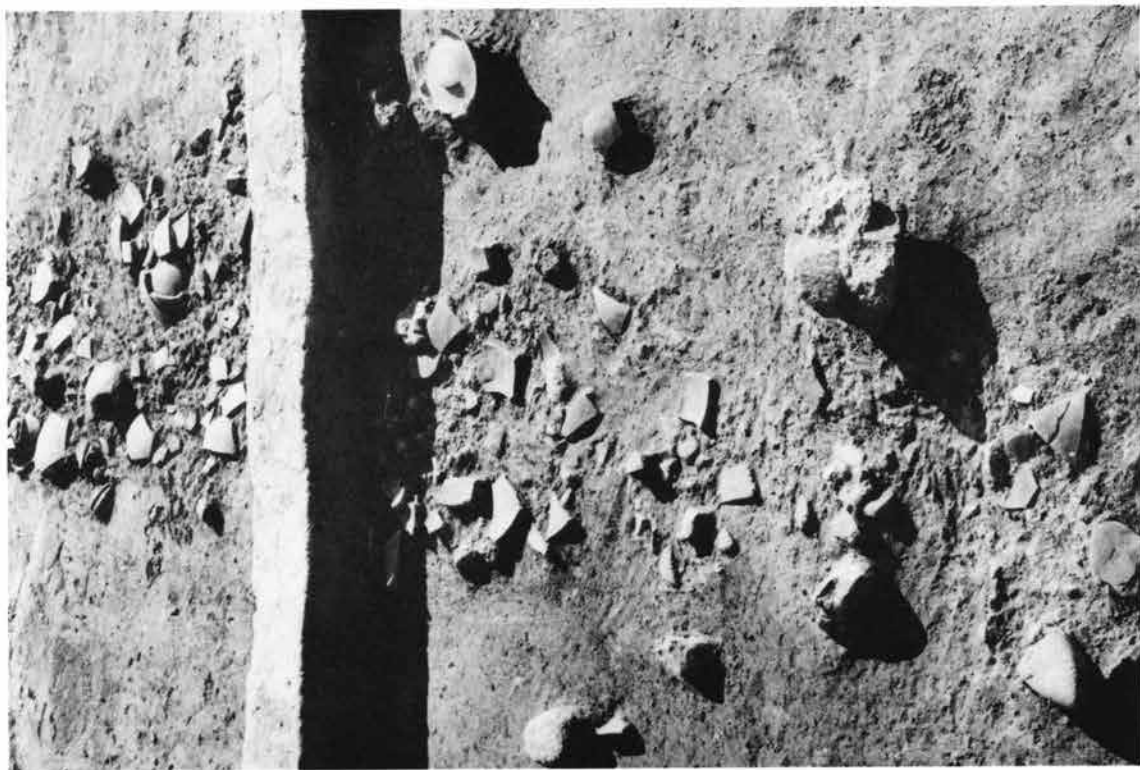
(2) Bトレンチ全景(南から)



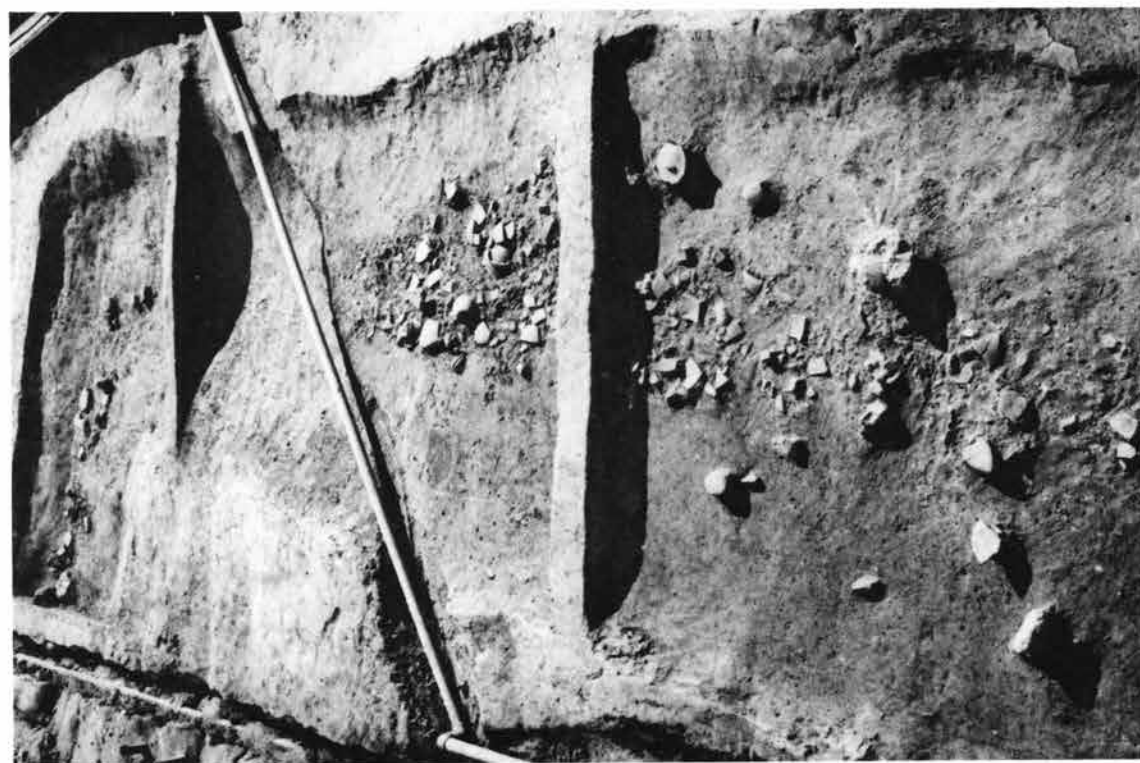
(2) 溝S D11上層検出状況 (南から)



(1) Aトランチ遺構検出状況 (西から)



(2) 上層遺物出土状況（北から）



(1) 溝S D 11上層検出状況（北から）



(1) 上層遺物出土状況（西から）



(2) 上層遺物出土状況（東から）



(2) 溝SD11下層検出状況(北から)



(1) 溝SD11下層検出状況(南から)



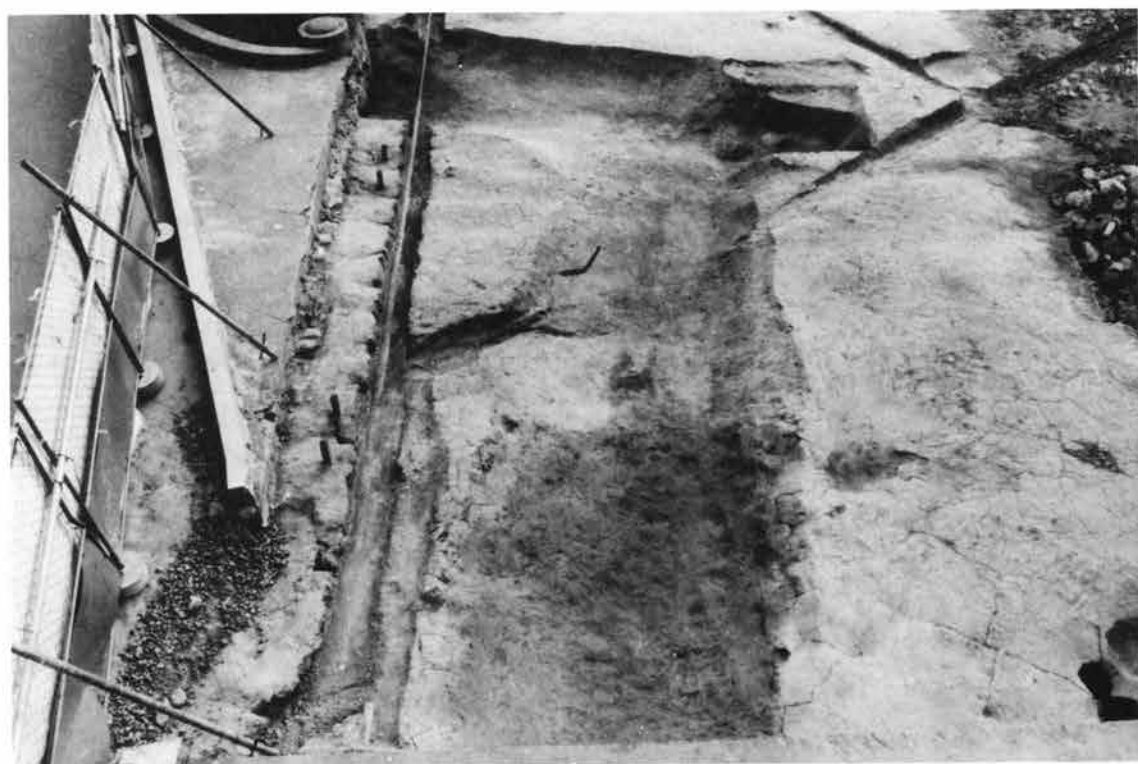
(1) 下層遺物出土状況(西から)



(2) 同上(北から)



(1) 溝S D 11完掘状況(南から)



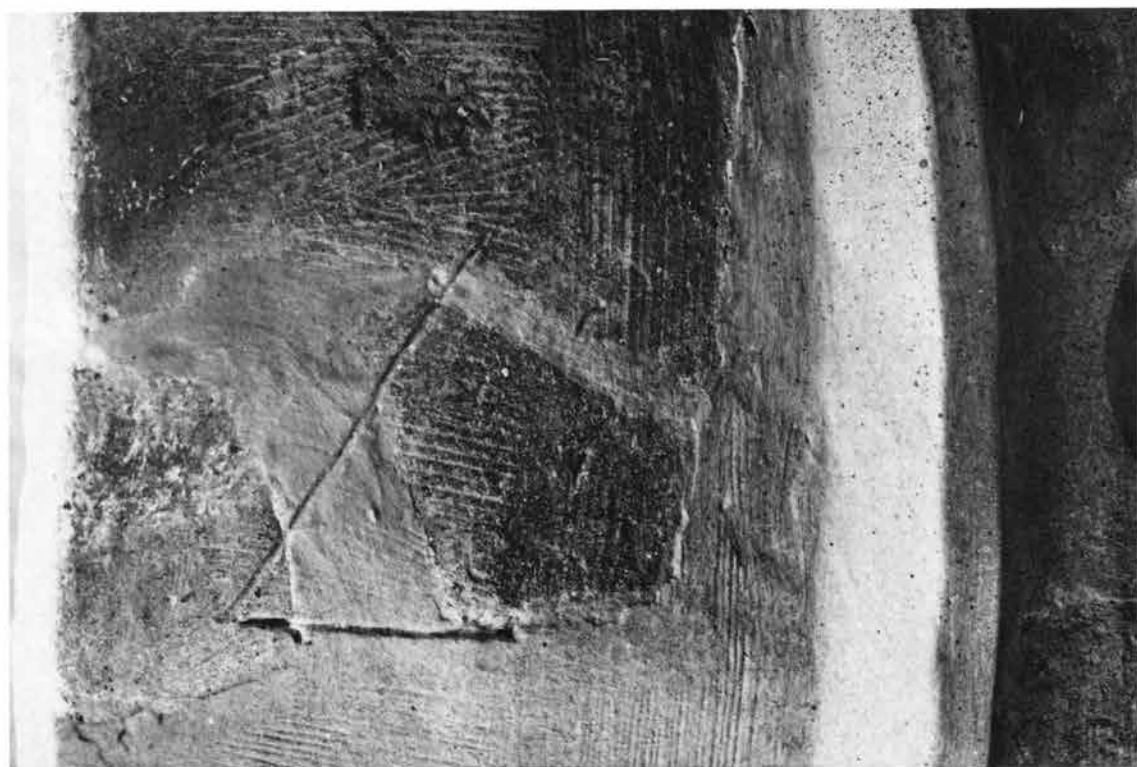
(2) 溝S D 11完掘状況(北から)



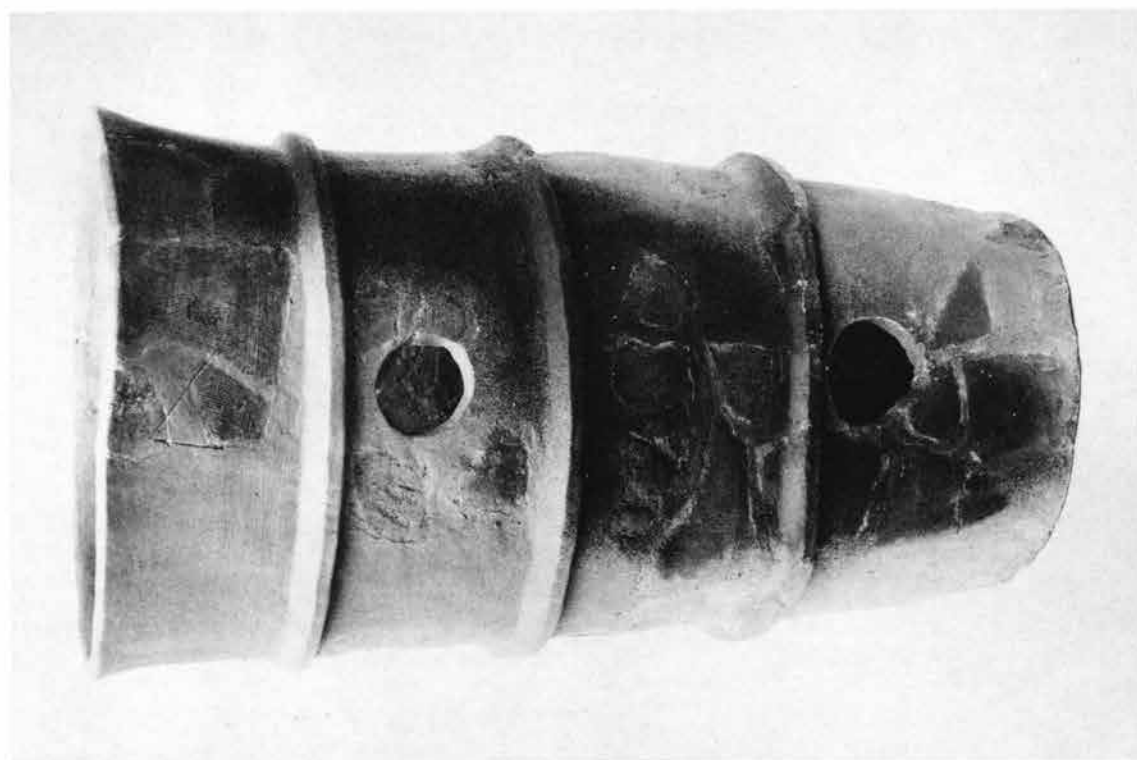
(1) 池状遺構S G01検出状況(南から)



(2) S G01下駄出土状況(北から)



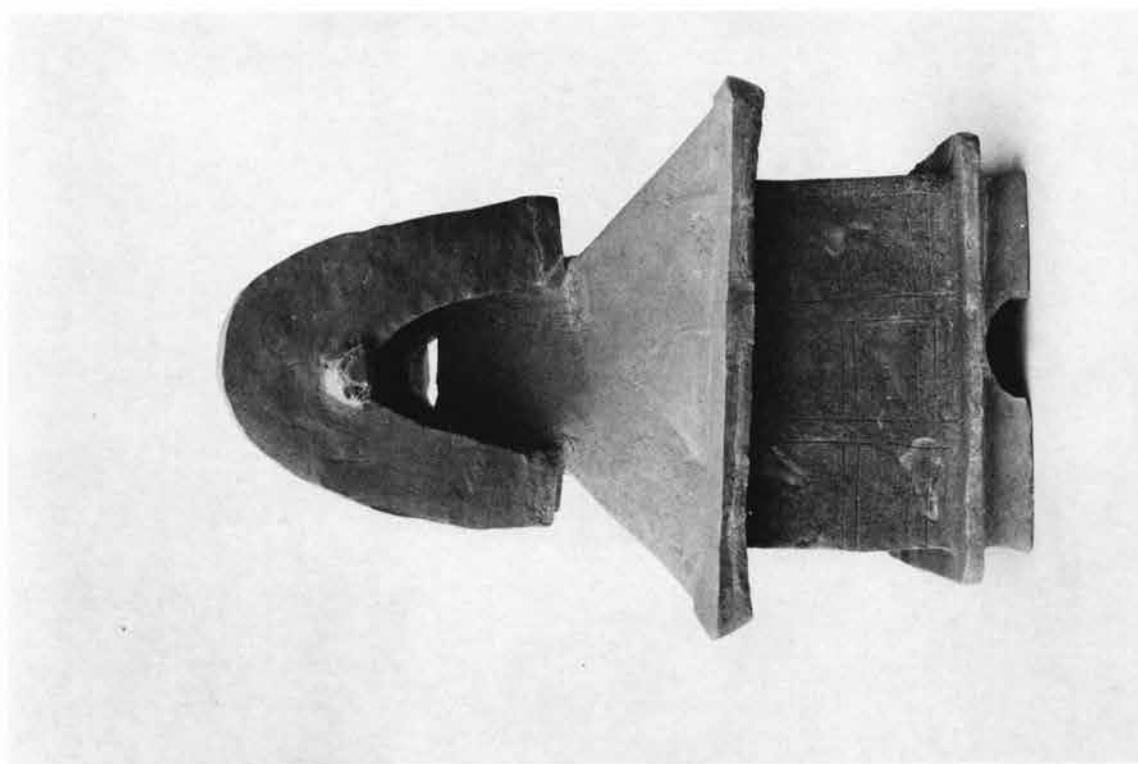
(2) 円筒埴輪細部（線刻文様）



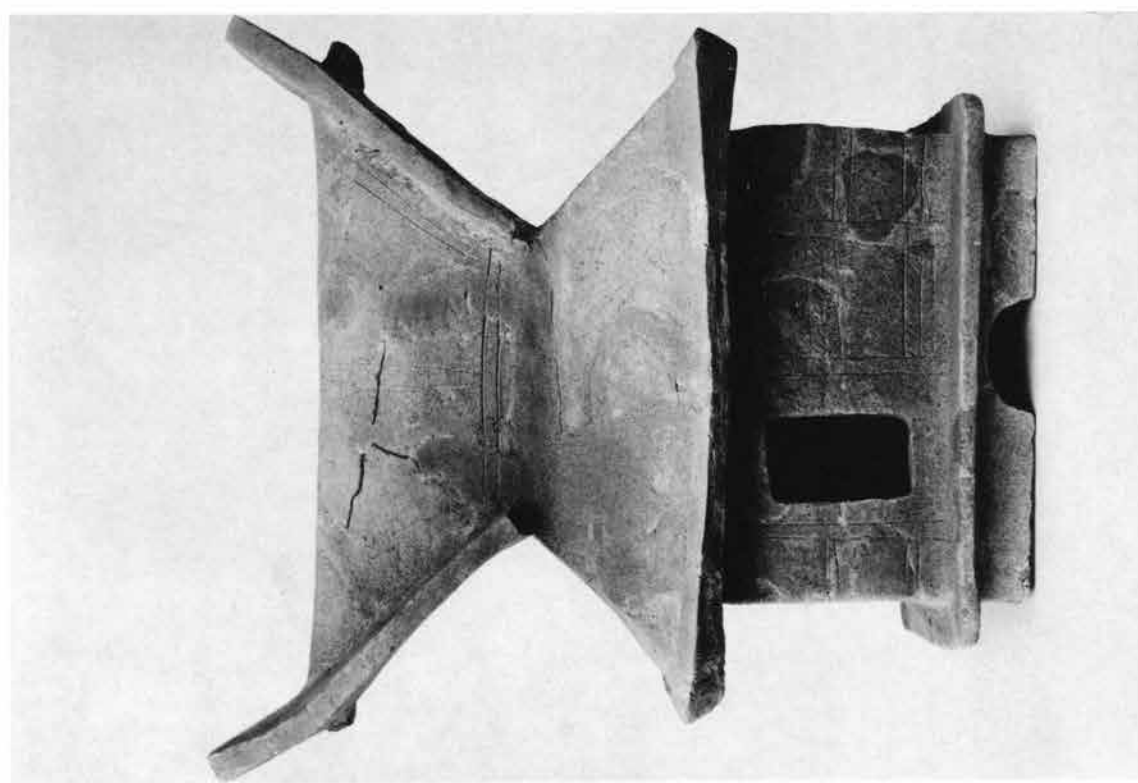
(1) 円筒埴輪



車形埴輪



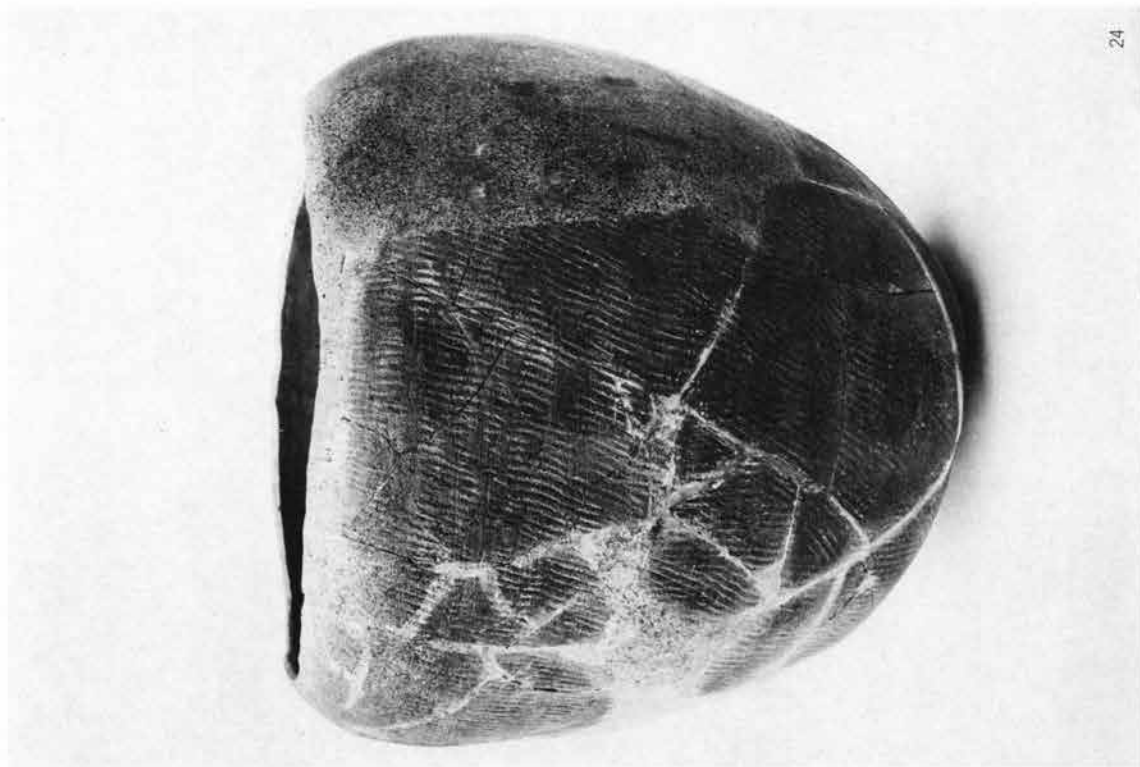
(2) 同 (側面)

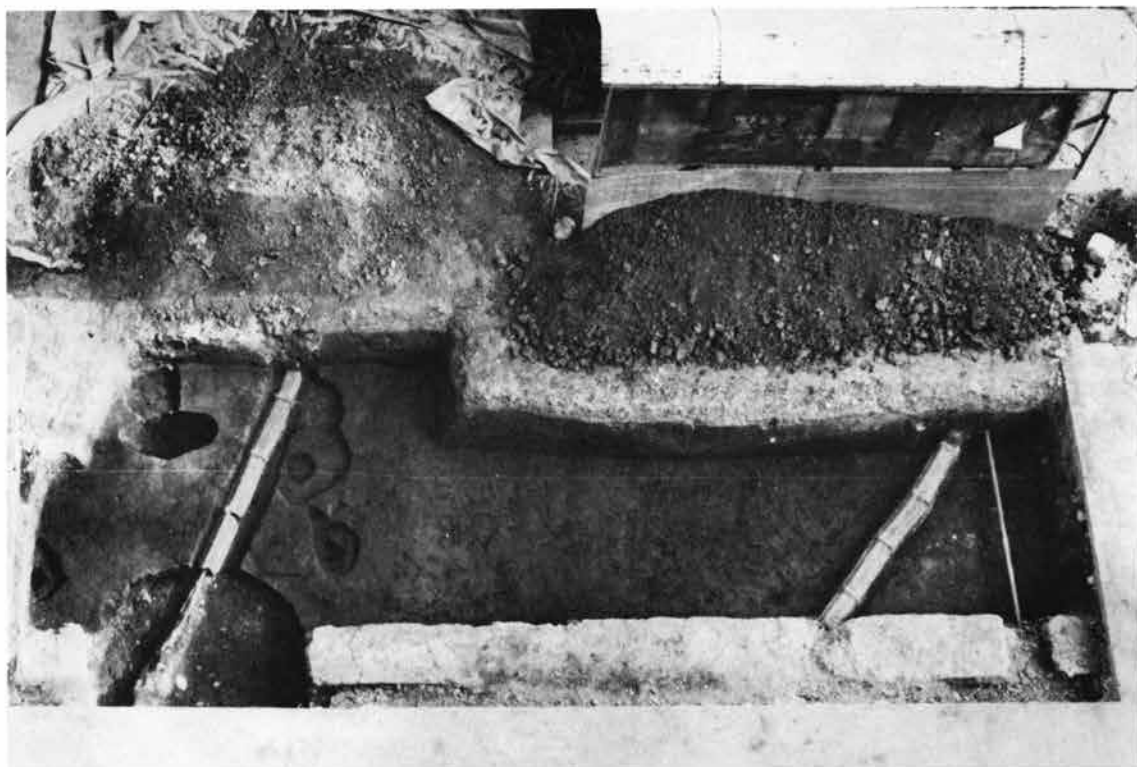


(1) 家形埴輪 (正面)



S D11上層出土遺物 (7:土師器, 12~16・20・22:須恵器)





(1) 第1トレンチ全景 (北から)



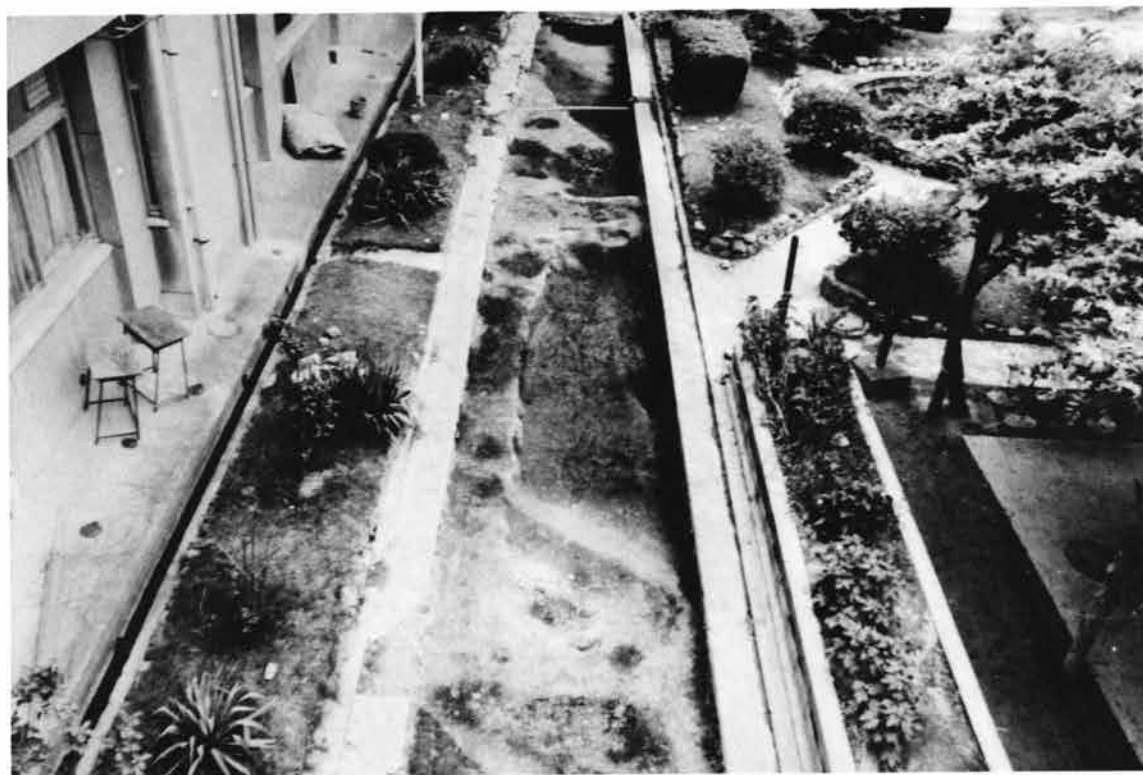
(2) 第2トレンチ全景 (東から)



(1) 第3トレンチ全景 (西から)



(2) 第7トレンチ全景 (西から)



(1) S D 0605・0606全景（西から）



(2) S D 0605遺物出土状況（西から）



43



1



45



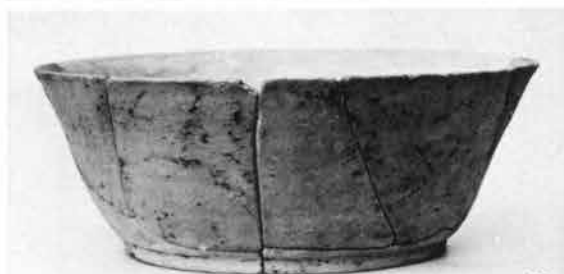
3



47



5



50



27



9



30



17



19



15



出土遺物 (2)

京都府遺跡調査概報 第16冊

昭和60年3月20日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (75)441-3155 (代)